



函館ラ・サール学園同窓会誌

日吉の丘

La colline de Hiyoshi

2012.05
Vol.

12

HLSA

Sapporo Chapter

Hakodate Chapter

Northeast Chapter

Tokyo Chapter

Westjapan Chapter





Contents

01	会長挨拶
04	対談
10	COMMUNION IN MISSION
12	校長挨拶
14	教頭挨拶
16	ラクロワ先生の追悼ミサ
20	恩師寄稿
25	同窓生寄稿
47	平成23年度函館ラ・サール学園同窓会総会
48	同窓会の歴史
50	同窓会組織改編と会則の改定
66	世界同窓会報告
78	来年度以降の同窓会会費について
81	創立50周年記念募金活動結果報告
82	支部だより
94	恩師訪問
97	同期会だより
107	同期会のご案内
108	同窓会入会式代表生徒挨拶
109	卒業生答辞
110	大学別進学状況
112	クラブ戦績
114	理事会、評議員会からの報告
117	函館ラ・サール学園同窓会 理事役員一覧
118	函館ラ・サール学園同窓会 会則
127	事務局からのお願い
134	編集後記



マリー・マルセル修道士

マルシアン・ローラン修道士
(後の本校初代校長)

メラン・ダニエル修道士

マリー・リゴリ修道士



会長挨拶

函館ラ・サール学園同窓会
会長
齊藤裕志

「四人のブラザーの来函、80年目に思う」

昭和7年（1932）10月22日、函館棧橋に4人のラ・サール会ブラザーが降り立ちました。同年10月2日「おおカナダ」の歌声に送られて、故国カナダを出発してから20日が経過していました。

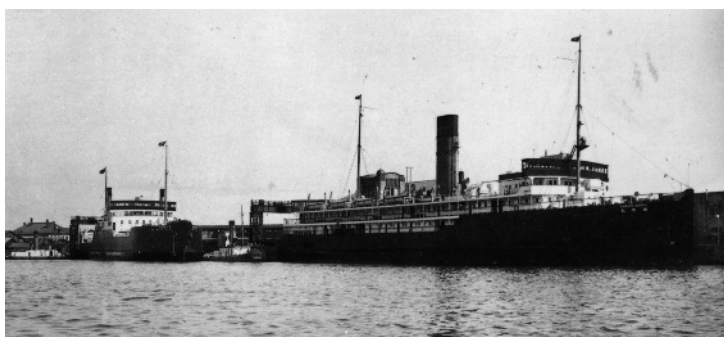
しかし、日本での教育に大きな夢と希望を持って来函したマルシアン・ローラン（35歳）、マリイ・リゴリ（35歳）、マリイ・マルセル（37歳）、メラン・ダニエル（34歳）らの若きブラザーは、彼らの前に苛酷な運命が待ち受けていることなど想像だにしていなかったはずです。

その当時、棧橋に迎えに出たという今田正美氏は、ブラザーたちとの出会いを、「…連絡船上のお客様を見ると、至極理知的で上品な服装の隙なく整った方達…」と述懐している。

それでは、何故、函館の地にラ・サール会のブラザーが、わざわざカナダからやってきたのでしょうか。

か。その理由は、当時のドミニコ会函館教区管区長・ラングレ師がラ・サール会に協力を要請したことはじまららしい。函館における布教活動に加えて、ラ・サール会としては男子学校設立という目的もあったといえます。4人は函館の地で、その期待にこたえ、努力を惜しみませんでした。当地が「要塞地帯」であったこと、そして軍部、軍人の校舎建設への介入等で学校開設という目的を達成することはできず、4人は昭和11年（1936）11月3日函館を去り、仙台へ居を移さざるを得ませんでした。当時、国内にあっては、5・15事件が、そして中国では満州事変、上海事変などが勃発し戦争へと突き進む暗い時代の始まりであった。

それ以後、4人は、抑留所生活で想像を絶する辛苦を嘗めることとなります。特に4人のうちの1人リゴリ修道士は、新たにカナダから来日した数人のブラザーと共に満洲に渡航し、その地の子供達の教育にあたりました。しか



昭和7年当時の函館棧橋と青函連絡船

〔函館市中央図書館蔵〕

し、昭和18年（1943）10月18日、満洲の四平抑留所で心臓疾患のため46歳の生涯を閉じたのです。死の淵にあつて、うわごとの中でも、教室で生徒に教え、祈り、聖歌を歌いながらの帰天であったと報告されています。

大戦後、カナダに帰国していた

3人のブラザーは再来日をはたし、仙台で修道院、光ヶ丘天使園の開設に尽力したことはご承知のことと思われます。

その後、昭和35年(1960)4月6日、函館ラ・サール学園が開校、164名の第1期生が入学しましたが、初代校長は誰であろう、あの函館栈橋に降り立った4人のブラザーの1人、マルシアン・ローラン(ローラン・ルエル)その人でした。昭和7年の来函以来28年の歳月が過ぎ去り、彼は63歳になっていました。そして、本年は4人のラ・サール修道会修士が来函してから80年目にあたります。私達同窓会生及び学園関係者は、彼等の遺業を決して忘れてはなりません。ラ・サリアンとして、いかに生きるべきか、その答えは、4人の修士の足跡を辿り、歴史を知ること、意外にも、その中に見出すことが出来るかもしれせん。

「学園校歌の作詞者・安藤元雄氏とは誰であろう」

ご存じのように学園校歌の作曲者は初代校長のローラン修士であります。それでは作詞者の安藤元雄氏とは一体誰なのか、という疑問をかねがね抱いております。

昨年の秋口であつたでしょうか、11期生でギターリストの藤井真吾君が来函した折、お会いする機会がありました。その席上で、話題が本学園の校歌に及び、彼がラクロワ元校長先生からお聞きしたという、校歌が作られた経緯を語ってくれました。

当時、道庁に「学校設立申請書」を提出した際に、校歌は「ラ・サール賛歌」と記入されてあつたらしいが、鹿児島と同じものでは認可出来ないとの指摘で、新しく作られたのだということです。ラクロワ校長先生がローラン修士の自筆の楽譜を見せてくれたこと、またローラン修士が音楽に対してとても造詣が

深かつたこと、しかし、そんな話の中でも、安藤元雄氏のことは全く話題にのぼらなかつたということです。

藤井君は「作詞者安藤某は、盛山兵護初代教頭のペンネームではないか」と、大胆な推測をしてくれました。それが面白く、場が盛り上がりました。

数日後、本学園の開設期すべてを知り尽くしている恩師・遊佐悦大先生にその件をおたずねしましたが、残念なことに校歌に関しては、記憶に無いとの返事でしたが、「ただ、もしかしたら仙台ホームの関係者かもしれないよね」と話されました。

早速、仙台在住の伊藤事務局長に連絡を取り、園長やブラザーになにか御存じないか、ホームにあたつてくれないかと依頼いたしました。しかし、大友先生をはじめとして、安藤元雄氏なる人物については、皆目見当がつかないとのことでした。そうこうするうちに、伊藤事務局長からメールが入り、ネットで検

索された安藤元雄氏に関して、恩師・吉岡正敏先生からの情報が齎された。しかし、年齢的にみて、その当時25歳位の若い安藤元雄氏に、作詞を依頼するであろうかとの疑念が残りました。

意を決し恐る恐る電話をかけてみると、電話口で「それを作詞したのは間違いなく私です」との答えがありました。その時、しばらくぶりに感動の毛穴が開くのがわかりました。氏の話をまとめてみると、最初、ローラン校長は友人であつた渡辺二夫東大教授(仏文学者)に作詞を依頼したのだそうです。それを渡辺氏が、弟子で当時東京大学を卒業し、時事通信社に入社したばかりの安藤元雄氏に再依頼したのが真実らしいとわかりました。その後、安藤氏から手紙を頂戴いたしました。その中で函館や本学園を見ずして、ローラン校長からの情報のみで作詞したことや、特筆すべきは、校歌の最後の歌詞、く永遠

の真理、ゝ愛の教え、ゝ真の道など校長自らが要請した文言であつたと書かれていたことです。

こうして創設50周年目を過ぎ、校歌の作詞者が判明したので、禿筆をおこす次第です。

「ブラザーと新同窓会」

ともかくにも昨年11月に新同窓会が発足したのであります。

多くの会員のご協力と、なかなく「有り方委員会」の皆さんの侃侃諤諤の議論により、会則の見直し、組織の再編等において本質的な課題を剔抉することができたと思います。

「政治家や政治のレベルは、国民のレベルを超えない」との類いの格言や、「この人民ありて、この政治あるなり」との福沢諭吉翁の言もありますが、本同窓会組織には当てはまらないことを祈るばかりです。

会長の小生は、懷手をして委員会の成り行きを見守っている

だけでありましたが、ラベル理事長、フェルミン校長先生とは、同窓会のあるべき姿について幾度となく話し合いをいたしました。その話し合いの中で、人もなげな振る舞いを恬として恥じない輩のことに話題が及んだ時、「ヒトはなかなか変われないものだから、こちらが変わることです」と、この年齢になつてブラザーから教わりました。同窓会は将来にわたり、何が問題で何が必要とされているのかを、会員皆の目と耳と足で確かめていきたいと考えております。

昨年8月にお会いした鹿児島
の岡山進教頭の言葉が、今もって
なお脳裏から離れないでおります。
「鹿児島ラ・サール学園はぜっ
たいなくなりません。何故つて、
我々教職員は皆ブラザーを尊敬
し、大切に思っているからです」と。
同窓会員、本学関係者に、そして
自分自身にも改めて問い直し
たいと思います。

「あなたはブラザーを心から尊
崇しているか」と。

函館ラ・サール学園校歌

作詞 安藤 元雄
作曲 Bro. Laurent Ruel, FSC

日吉の丘よりのぞむ 宇賀の浦の波ひかり
掲げよ朝な夕なに いそしむ学舎の
若い理想の旗 集え友よ 我らここに
目指すは永遠の真理
ラ・サール学園 ラ・サール学園

額は知恵にひいでて 胸には心豊かに
築けよ国と国とを 結ぶ理解の橋
高い文化の虹 集え友よ 我らここに
学ぶは愛の教え
ラ・サール学園 ラ・サール学園

開かれたる北の島 扉の港函館
開けよ決意あらたに たゆまぬ技をつぎ
輝きの世界を 集え友よ 我らここに
励むは真の道
ラ・サール学園 ラ・サール学園

対談



函館ラ・サール学園理事長

同窓会名誉会長

Br. アンドレ・ラベル

函館ラ・サール学園同窓会

会長

齊藤 裕志

【齊藤裕志会長Ⅱ以下会長】

本日はよろしくお願いたします。最初に理事長の個人的ことをお聞きします。カナダでの御家族との生活のことと、修道士になられたきっかけについてお話しいただけますか。

【アンドレ・ラベル理事長

Ⅱ以下理事長】

13才から修道士になる準備を始め、17才の時に誓願を立てました。ラ・サール会の経営する中学校で学び、卒業後は師範学校に進みました。

【会長】

なぜ、ラ・サール会に入ろうとされたのですか。

【理事長】

12才でラ・サール会の学校に入ろうと思いましたが、両親に未だ早いので1年待ちなさいと言われてました。きっかけは良い教師に出会ったからです。その教師はブラザーでしたが、彼の影響が大きかったと思います。そして、自分も人を教えることが好きでした。

小学校の最初の4年間はシス



ターが運営する学校で、5・6年の時にはラ・サール会の学校で学びました。

【会長】

そのブラザーは勿論カナダ人ですよ。

【理事長】

そうですね、今も存命していて90才を過ぎていますが、今もお元気で、昨年の11月にもお会いして来ました。モントリオール修道院の副院長をされております。私も彼のような道に進むことで、より良い人生を歩むことができるのではと思ったのが契機です。

【会長】

ところでご兄弟は何人ですか。

【理事長】

5人兄弟で私が長男です。弟の一人もラ・サール会に入りました。また、5人の中で4人が教師になりました。皆、恵まれた学校に進み、社会的にも安定した生活を送っています。

【会長】

最初にローマ、アフリカに赴任され、その後、長く日本にお住まいですが、ご両親は理事長がカナダを離れるにあたり、寂しさを感じたのではないのでしょうか。

【理事長】

両親も深い信仰がありますから、神様が望んだことに反対することしませんでした。20才の時にローマへの赴任を命じられました。が、未だ若かったので両親の承諾をもらいに行きました。両親はノーとは言わなかったけれど、母は泣きました。

【会長】

日本においてになったのは昭和30年のことです。

【理事長】

その頃には両親も私が海外に



赴任することに慣れていましたし、毎月、手紙のやりとりをしておりました。母が亡くなってからも、父は7年間同じように手紙を送ってくれました。

【会長】

これは私にとって非常に忘れられないお話ですが、お母様が76才で亡くなられた時、お父様が「アンドレ、本当に天国はあるのだろうか、お母さんは神様の下にいるのだろうか」と問われたと以前お聞きしました。というのは日本人から見れば、カトリックの信仰心には深いものがあると思っ
ていますから、お父さんがそうした質問をされたことは意外でもあり、非常に興味を覚えるからです。

【理事長】

わたしにとって父から信仰の話を聞くのは初めてでした。普通、カトリック信者であつても教義を深く勉強することはなかなかできません。精々、日曜日の教会での説教を聞くくらいで、自分で本を読んで深く理解することはしません。

私は父に「天国はありますよ。母は神さまの下にいます」と答えると、父は少し安心しました。その父も83才で亡くなりました。母は信仰深い人でしたから、私が11、12才の頃には復活祭の準備のため40日間教会に行かされたものです。その間はチョコレート等の菓子を食べることは禁止でした。自分に犠牲を強いる為でした。父は製紙工場に勤めていました。大変な労働で毎日疲れて帰宅しましたが、毎晩、跪いて家族全員でお祈り捧げました。こうした家庭の和が大きな恵みだったと今も考えています。両親は亡くなりましたが、存命の2人の兄弟とはSkype(スカイプ)で連絡を取り合っています。これは私の長男としての責任です。両親が離婚しなかつた事も恵みといえます。今、カナダでは日本以上に問題を抱えた家庭が増えています。離婚や片親、結婚せず同棲をしている家庭が半数です。そうした家庭の親は教会に行きません。まれに子供に洗礼を受けさせる例もありますが、子供たちはかわいそうです。

学校でも宗教のプログラムを自由にしました。その結果、宗教史を教えることになり、知識だけの授業では、より良い自分を目指すことや、他人を許し、支えるといったことを教える硬い授業はなくなりました。

【会長】

ここでお聞きしたいのですが、何故、函館ラ・サール学園ではカトリック教に基盤をおいた教育を行つてこなかったのでしょうか。以前お聞きしたときはブラザーが「時代背景やブラザー自身の問題を含めて、遠慮していたのだでしょう」とお答えになっておりましたが。



【理事長】

教えるブラザーが日本語を話せないという事情がありました。これは大きな問題で、日本語で宗教の専門語を教えられませんでした。生徒達が硬すぎる授業に関心を持たなかったということもあります。現在はイエスの価値観や生涯を教えています、教義は教えていません。

同窓生に対しては、例えば、毎年、大津で開かれる西日本支部総会の追悼式では深い話をすることもあり、その他の機会を通してイエスの教えを説いています。

【会長】

この学校の原点は、聖ラ・サルであり、ブラザーだと思いますし、同時にラ・サル修道会だとも思います。ですから少しでも、授業の中で教えていくべきではないでしょうか。今後に期待したいと思っています。

話は変わりますが、日本には函館の3名を含めてもブラザーが8名にまで減少してしまいまし

た。諸外国の現状はどうなっていますか。

【理事長】

例えばLEAD管区(注1)には135名です。面白いことにスルタン服を着用している修道士が多いです。私はもう持っていないが(笑)。世界全体では4,000人の修道士がおります。

また、修道会の活動に協力するレイマンという人々がおります。レイマンは世界中で我々を支えています。修道士に近い人々であり、研修を受けることを要請されます。例えば、井上副校長もその一人で、昨年はローマで研修を2週間受けてもらいました。しかし問題は言葉の壁です。研修内容を理解するには英語が話せなければなりません。

【会長】

3年前に理事長は、「これから自分はラ・サル修道会と同窓会の橋渡しの役を担っていく」という決意を述べられました。突き詰めれば、同窓会に聖ラ・サールの精神の普及と、同時に学園に協力をして欲しいということだと

思います。そのために、各支部を廻ってラ・サールの精神を教える活動が続けられますが、それを聞く同窓生の間に変化は見られません。ラ・サールの同窓会は他の高校や大学の同窓会のように過去を単に懐かしみ親睦を図ることのみが目的ではなく、より進んで、ラ・サル精神で何かをして欲しいことだと思います。

【理事長】

私に対する労りや親切は大変ありがたいことですし、会の雰囲気も大変良いです。しかし時間が限られています。支部の総会でもプログラムが沢山あり、15分から20分が私に与えられる時間です。学園においても、教師に対して私が話す時間は1年に30分程度の時間で3、4回程度です。ですから今考えていることは半日、1日をかけて研修をやりましようということ。その中で教育的研修と心の研修の2つのことを行っていきたいと思っています。

【会長】

鹿児島島の教職員や同窓生は函

館以上にブラザーに対して強い尊崇の念を持っています。やはり、ブラザーが原点であり教職員もブラザーを中心に、ブラザーの気持ちで斟酌していくことが本当ではないでしょうか。昭和40年代に学んだ我々にとって、廊下を歩くブラザーは独特の雰囲気を持っていた印象がありますし、知らず知らずに畏敬の念をもって接したと思っています。

【理事長】

同時に、私たちにも修道士としての人格、姿勢、教育者としての授業の進め方も問題です。日本語を覚えることができず、日本文化になじみなくて、日本を離れたブラザーもいます。戦後、ブラザーも大きな犠牲を払って活動してきましたが、その姿勢を見て皆がついて来てくれたと思います。その後、日本の社会も変わりましたし、私たちも一般の先生方と同じような生活をするようになりました。そうすると魅力を感じなくなってきました。

【会長】

各支部でのお話の時間が少ないとのことですが、支部の総会に出席できない同窓生に向けても今後は同窓会誌の誌面でも発信を続けていただくことを願います。そうしたことを通じて、多くの同窓生に理事長のお考えを伝え、影響を与えていただきたいと思っています。

【理事長】

私はブラザーとして宗教については考えていますが、いつも宗教だけではありません。教育者としての考えも大事です。担任の仕事をしたこともありませんし、日本の教育も詳しくは知りません、生徒の家族の問題、日本の社会についての知識も不足しています。もちろん新聞は読んでいますが、十分な知識を得ることはできません。日本はとても住みやすい国です。苦勞なく生活することができます。人々も親切で、自由がありますし、子供たちも勉強の努力をしてくれます。

【会長】

理事長先生のご苦勞はやはり

学園の経営だったと思います。過去には教職員との間でいろいろな苦勞をされたとお聞きしておりますが。

【理事長】

管理職の先生方が本当に協力してくれました。鹿児島も同様ですが、恩人のような協力者がいました。初めはブラザーも少なかつたけれど、先生方が、より良い学校を作ろうと一生懸命に努力をしてくれました。

ある国では10年前から苦勞をしています。一般の先生方に任せることができない現状もあります。

【会長】

今後、各支部で先生が配布される文章がここにありますが(注2)。その中に「過去にこだわるな」という一節がありました。このフレーズが今年、先生がお話になるテーマかと思いましたが。

【理事長】

テーマというより、もっと一般的な話です。未来を作れと言うこととです。「種を蒔く」ということは、その時点では成果である実

を見ることはできないということとです。年月を経て結ぶ実を、希望と信仰心を持つて植えると言うことです。ラ・サール修道会自体も変化しています。これまで修道院では修道士のみが生活していましたが、一般の人々も、ある条件のもとで同じような生活をするとかできるようなになりました。

【会長】

率直なお気持ちをお聞き致しますが、理事長は函館ラ・サール学園の同窓生に何を望んでいますか。

【理事長】

ラ・サール会の教育の特徴は Faith, Fraternity, Service です。この3つの言葉は校歌の中にあります。「目指すは永遠の真理」が自分の人生を問いつける Faith です。信仰です。宗教的ではなくても良心に従って生きる、他人のために生きるといことです。2番目の Fraternity は「学は愛の教え」です。これは家庭でも人生でも重要なこととすし、愛が無ければ分

かち合うことはできません。本当に愛すること、許すこと、忍耐強く生きること、これは一生の課題です。私も年をとつてきて少し短気になってきました。「けしからん」とか「気に入らない」と言うこともあります。心が狭くなつてきたのでしようか。そのことに気づいてより良い自分を目指そうと努力をしています。3番目は「励むはまことの道」が Service です。自分が正しいと思う道を進むことです。社会に対して良いと思うことを行うこと、簡素な生活を送ることなどです。東京支部同窓会の聖書研究会ではこの3つをテーマに話しています。

【会長】

校歌の中に3つのことが歌われていますが、これは偶然なのでしょうが、あるいはローラン先生の考えが入っているのでしょうか。作詞をされたのは安藤元雄先生ですが、最後の方で、ローラン先生から「文言をこうして欲しい」という要望があつたと伺つております。

【理事長】

日本では教育の中で宗教と倫理を教えることができます。英語で言えます「To Make The

「Truth」信じるではなく生きると言うことです。数日前のミサで読んだのですが、悪い行いをする人は光を遠ざける、神様の前に出ることを恐れるものです。この場合の光とは良いこと、正しいことです。これはキリストの言葉です。やはり後ろめたいことをした後は祈りたくはない、静かに瞑想することもできないものです。自分をだましているわけですが、自分にもこの経験はたびたびあります。

【会長】

理事長のように年齢を重ねた方でも、そういうことを日々考えておられることに新鮮な感動を覚えます。

【理事長】

私は、今度の支部総会で「復活」について話そうと思っています。死は良いことです。それによって新しい命が生まれるのですから。死は終わりではありません。

蒔かれた種は死にますが、花が生まれます。しかし、葉も木も死んだ後、新しい命が生まれます。そのため死は必要です。

【会長】

日本の教育で、情けないくらい欠けているところは、そのことだと思っています。死ぬとは如何となることかを教えないのです。誰も避けて通れないものですが、「自分は死ぬつもりがない」と避けていて、深くは教えていません。

【理事長】

私の場合はキリストのおかげで自分の中で神は生きています。82才になりましたが、「賛美と感謝」の気持ちを大切にしています。神様は素晴らしい。全能全知と昔は言っていました。花や木などにも宿る命を賛美します。例えば手をぶつけます。痛いですが、これくらいの怪我で済んだということで賛美をします。些細なことでも良い面を捉えて賛美と感謝をすることです。時々、早く死にたいと思います。早く神様に会いたい、そのことが楽しみです。そして父と母

に会いたいです。そして、お父さん、お母さんありがとと伝えたいです。死は肉体的には痛いことです。しかし心の中では新しい出会い、完全な出会いが待っています。

【会長】

ご承知のように曾野綾子という作家が同じことを書いています。彼女もまたクリスチャンだからかも知れませんが、全てのことをプラスにしていこうという考えです。例えば、手を折った、足を折った、失明しかかった時でも、現状をプラスにしていこうことです。これはプラス思考とは少し違います。物事の良いことでも、悪いことでもすべて自分にプラスにしていこうことです。

【理事長】

別のフランス人の作家はこう言っています。「すべては恵み」と。だから私は、自分の人生を振り返ってみれば、大変な時期もあったけれど、それも今では役に立ったと思っています。

【会長】

具体的にお聞きしますが、先ほ

どお話しなさったように、理事長は75才を過ぎてからそういうお考えを持たれるようになったのですか。

【理事長】

校長を終えてからでしょう。退任後1年間、鹿児島に行って怠けていました。それ以降、時間はあります。本も読めます。考え事もできます。同じ本を4回5回と読み返すことで深く理解することもできます。今は私にとつて「恵みの時」です。幸い健康でもありませんから。今の教師達は私より天国に近いところにいるかも知れませんが、私より苦勞をしているからです。彼らは神様を知らないでしょうが、自分が良いと思う道で生徒に接しています。家に帰っても子供や妻のこともありますから、様々な責任がかかっています。

【会長】

曾野綾子がこういうことも書いていました。アフリカで修道士が大勢殺された事がありました。理事長もアフリカに赴任され大変な苦勞をされたと思います。

しかし、その困難な時期に修道士が増えていたということです。今恵まれすぎた環境の中で修道士の数は減ってきています。普通の人と同じような生活を送るようになったことが原因と書かれています。

【理事長】

私もそう思っています。自動車も使っていますが、注意しないと、そういう便利なものに囲まれることで心を忘れます。神様との関係も浅くなります。もしかすると、自己中心となってしまう人の気持ちを忘れます。例えば、ダミアン神父様はハワイ諸島のモロカイ島でハンセン病患者のケアに生涯を捧げ、自らもハンセン病で命を落としました。真似の出来ないことであり、偉い方でした。イエスもそうでした、まことの道を徹底するために十字架への道を進みましたが、自分の為に奇跡をおこさなかつたのです。自分の道は人間として誠実に生きることにしたからです。そして神に身を委ねることで全ては成就し

たと語つたのでした。宣教師は今でもパキスタンやインド、マレーシアなどで迫害を受けることもあります。困難を乗り越える挑戦の生き方は大切です。信者になるには掟も沢山あります、自由を阻害されると感じることもあるでしょう。

【会長】

最後になります。鹿兒島と函館が合同して日本フェデレーション(注3)を作つて、世界に向けて発信していこうということになりましたが、こういう活動に対して理事長から何かアドバイ스가あればお聞かせ願いたい。昨年、フィリピンの世界大会に参加しましたが、まだまだ世界には貧しい子ども達がいいます。こういう子ども達に手を差し伸べる活動を考えています。

【理事長】

私は、先ほど申しましたが、「学ぶは愛のおしえ」の通り、力を合わせて、恵まれない人たち、特に子ども達を支援して欲しいし、お金だけでなく、人権についても活

動を行つて欲しいです。日本でも「Meaning of Life」生きる意味を持つていない人々がいます。そうしたことが自殺を生みます。このことは宗教心にも繋がります。意外なことに、ラ・サールが生きた時代、フランスでは家庭での宗教教育は殆どなされていませんでした。

同窓生に対しては、大人として「永久の真理」を目指して欲しい。勇気を出して「神」の問題を考えて欲しい。ラ・サールで学んだという恩恵を分かち合つて欲しい。

【会長】

お話しをお聞きして、パブロ・バステレチア元ラ・サール会総長が語つた「軽々しくラ・サールの名を語るな」という言葉が理解できたように思います。もし、ラ・サールの同窓生であるならば、本日、理事長がお話しになったことを実行して欲しいというのが結論になるかと思っています。本日は長時間ありがとうございました。

(記録・理事 島本肇)

(注1)2011年にアジアに東アジア管区が設けられました。LASALLIAN EAST ASIA DISTRICTです。(略称LEAD=香港、日本、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイの7ヶ国で構成され、本部は香港にある)

(注2)本文の後ろに掲載されています。

(注3)南北両同窓会は、海外との連絡窓口としての「日本連盟」を立ち上げました。

COMMUNION IN MISSION

Brother Victor Franco, Manila, Philippines

A favorite spiritual writer of mine (Sr. Joan Chittister) puts the challenge facing our Lasallian Family in this way:

“There comes a time, in other words, when criticism of the past is simply not enough. There comes a moment in life when we must dedicate ourselves to creating the future, and that is hard, hard work.”

She explains: “Life, Ecclesiastes leads us to understand, is not about change: life is about sowing. And therein lie both the struggle and the gift. The function of each succeeding generation is not to demand change; it is to prepare for it. The function of one generation is to make change possible for the next. The real function of each generation is to sow the seeds that will make a better world possible in the future. “Let us plant mangoes (dates) even though those who plant them will never eat them.” she (Ruben Alves)

wrote. “We must live by the love of what we will never see... Such disciplined love is what has given prophets, revolutionaries, and saints the courage to die for the future they envisaged. They make their own bodies the seed of the highest hope.” Even in the face of the impossible, we must act as if the miracle will come tomorrow. That’s what sowing is all about. It requires trying when hope is thin, and faith is stretched, and opposition is keen.”

“Rebuilders” (or sowers) are commonly misunderstood, misjudged and misnamed.” she said. “They are called ‘reformers’, ‘liberators’, and ‘leaders’ when, as a matter of fact, they are simply lovers gone wild with hope

Just like the Founder (saint John-Baptist de La Salle) and the original members of the Lasallian Family, we are “sowers and rebuilders, lovers gone wild with hope” who live in an in-between-time, a period of dramatic changes and contradictions. As we bring the dream of the Founder a step further into our own space and time, we are faced by a world in turmoil. Yet we fear not. We enter this reality with eyes and hearts and arms open wide, announcing the Good News of salvation every step of the way.

COMMUNION IN MISSION

(ラ・サール会創立者との、世界の同窓生との)使命の共有

Brother Victor Franco, Manila, Philippines

私の好きな宗教的な著述家(Joan Chittister[ジョアン・チッティスター]シスター)は、われわれラ・サリアンファミリーが直面している課題を次のように書いた：

『言い換えるならば、過去に対する批判だけでは十分ではない時がやってくる。人生には、我々が渾身で未来を創造しなければならない時がやってくる。未来を創造するということは困難な、困難な仕事なのだ。』

彼女はなお説明する。『旧約聖書(コヘレト書)が説いているように、人生とは変化することではない、人生とは種を蒔くことだ。だから、人生には苦悩も、贈り物もあるのだ。それぞれの世代の役目は変化を要求することではない；変化に対して準備することだ。それぞれの世代の本当の役目は、未来の世界を良くすることができるような種を蒔くことである。「マンゴー(あるいは椰子)を植えよう、たとえそれを植えた者が決してその実を食べることができないとしても。」と彼女(Ruben Alves[ルーベン・アルベス])は書いた。「私たちは決して見ることもできないものや人に対する愛のために生きなければならない…そのような自制された愛こそが、預言者や革命家や聖人に、彼らが思い描いた未来のために死ぬ、という勇気を与えたのである。彼らは自らの身体を、最も理想高い希望の種とするのである。」不可能な見込みの中でも、われわれは、あすにでも奇跡が起こるかのように行動しなければならない。それが、種を蒔く、ということなのだ。種を蒔くということは、希望が実現する可能性が低い時でも、信仰がなくなりかけた時でも、反対が厳しい時でも、そうし続けなければならない。』

『未来を創造する人達(あるいは種を蒔く人達)はだいたい誤解されているか、間違っって判断されているか、その結果、間違っった名前と呼ばれている。』と彼女は言う。『彼らは、「改革者」、「解放者」、「指導者」と呼ばれており、実際、純真に、希望に狂喜し献身的に働く人なのだ。』

ラ・サール会の創立者(聖ヨハネ・バプティスタ・ド・ラ・サール)やラ・サリアンファミリーの最初のメンバーと同じように、われわれは、時代と時代の間、劇的な変化と矛盾の時代、に生きる「種を蒔く人、未来を創造する人、希望に狂喜した献身者」である。われわれが、創立者の夢を、われわれ自身の空間と時間に、さらに一歩踏み込んで実現させようとすると、われわれは混乱した世界と直面することになる。しかしそれでもわれわれは恐れない。われわれはこの現実、目と心と腕を、大きく広げて、入り込んでいくのだ。そして一歩あゆむごとに、救いの良き知らせを語っていくのだ。

(訳・事務局長 伊藤恒敏)

校長挨拶



聖ラ・サール賛歌

函館ラ・サール中学高等学校 校長
同窓会名誉会長
Br. フェルミン・マルチネス

2011年末、齊藤同窓会長が校歌の作詞者の安藤元雄先生について熱心に調べてくれました。その結果、驚くべきことがわかりました。開校当時、つまり今から約50年前に、あの素晴らしい校歌の歌詞を作られた安藤先生が、ご存命であるということがわかったのです。齊藤会長、調べていただき、本当にありがとうございます。

さて、卒業生の皆さんで30期生までは、在校時、校歌と学生歌「It's a Long Way」を何回も全校集会等で斉唱していますので、卒業後もよく覚えています。その後、ラベル先生により、「聖ラ・サール賛歌」が本校に紹介され、色々な機会で歌われるようになり、今では、すっかり函館ラ・サールにおいてもポピュラーなものとなっています。実は「聖ラ・サール賛歌」は、姉妹校である鹿児島ラ・サールの校歌でもあります。が、最近、本校の同窓会の総会においても、「聖ラ・サール賛歌」が歌われますので30期生以前のO

Bには違和感を抱く方も多いようです。「函館ラ・サールには学生歌と校歌があるのに何故、他の学校の校歌を歌わせるのですか」という声を聞いたことがあります。そこでこの機会に、「聖ラ・サール賛歌」についての背景を説明させていただきたいと思います。

前述の通り、1993年4月に第4代校長としてブラザー・アンドレ・ラベルが就任され、「聖ラ・サール賛歌」を在校生徒に紹介してきました。確かにラベル先生が長い間、鹿児島ラ・サール学園でお仕事をされてきましたので、この歌を函館においても紹介したいということはあったでしょう。

そもそも「聖ラ・サール賛歌」はどのように誕生したのでしょうか。

創立者ラ・サールは(1651年3月30日〜1719年4月7日)68歳で死亡しました。彼の死後、カトリック教会のなかでラ・サールの精神とラ・サールが

教育者として貢献されたことについて高い評価がなされました。ラ・サールが聖人になられる前に神様がラ・サールの名を通して一つの奇跡を行われました。その奇跡を教会の方から認められ、福者にされました。その後、他の奇跡が認められ、聖人になることが出来ました。教皇レオ13世によって1900年5月24日にヴァチカンの聖ペトロ大聖堂でラ・サールは聖人として認められました。その日の盛大なミサの中で「聖ラ・サール賛歌」が始めて斉唱されました。当時、フランス語で歌われました。

その後、世界中のラ・サール会の修道士が聖ラ・サールの祭日の祈りやミサの中で「聖ラ・サール賛歌」を必ず歌っていました。それだけではなく、ラ・サール会の総会や黙想会、研修会等においても斉唱されました。また、色々な国、学校と時代によつて他の「聖ラ・サール賛歌」も作られました。しかしながら、聖ラ・サールと直接に関係がある賛歌は一つ



しかないのです。

日本における最初のラ・サールの学校は鹿児島島のラ・サール学園です。開校してから「聖ラ・サール賛歌」を校歌として受け入れしました。ただ、歌詞はフランス語ではなく日本語にされました。実は、函館ラ・サールを開校する際に「校歌」を作るようにと所轄官庁から要請がありました。ローラン初代校長は、歴史的な「聖ラ・サール賛歌」を提案しましたが、同じラ・サール会の学校で、既に校歌として歌われていますので、その案は認められませんでした。その結果、ローラン先生と安藤先生は心を合わせながら本校の校歌を作ることにしたのです。

校歌、学生歌と共に「聖ラ・サール賛歌」が、函館ラ・サールの先生方と在校生、そして卒業生にも歌われることは喜ばしいことです。我々ラ・サリアンは「聖ラ・サール賛歌」を斉唱するたびに、ラ・サール会の国際的な絆を感じ、そして、我らの創立者聖

ラ・サールを褒め称えることが出来るのです。「永遠の名讃えんラ・サール愛の導師」



「ラ・サール賛歌カリグラフィー」作画：市原みどりさん

教頭挨拶



函館ラ・サール中学高等学校 教頭

男 山 克 弘

今年度の函館ラ・サール学園は生徒数888でスタートしました。高校3年生178名6クラス(理系4・文系2)、高校2年生166名5クラス(理系3・文系2)、高校1年生191名6クラス(内部進学3・高校新入3)、中学3年生116名3クラス、中学2年生113名3クラス、中学1年生124名3クラスという内訳です。

888人の本校生徒諸君にとって、函館ラ・サール学園で過ごした時間が生涯忘れることのない、そしてかけがえない成長の季節となるように、わたくしたち教職員一同は今年度も全力を尽くしてまいります。具体的には、進学実績のいっそうの回復とラ・サール会の教育方針にもとづく教育環境づくりの推進とを目標にしています。

中学生としての3年間、高校生としての3年間、あるいは中高合わせた6年間は、人生にとって重要な意味を持つ期間です。年齢でいえば12歳から18歳にあたる

る青年期を函館ラ・サール学園で出会った仲間とともに共有するという経験が本校生徒諸君の人生において豊かな実りの糧となることを願ってやみません。

本校の校歌は「日吉の丘より望む／字賀の浦波光り」で始まります。この歌詞の通り、わたくしたちの学園はいつも明るい陽光に包まれています。不安や悩みを抱えている若者はいっとうむきがちになります。本校の生徒には、そういうときに校歌を思い出して、まなざしをぜひ高く空に向けてほしい。そして若い理想の旗を高く掲げて日々はげましよう友がいることを思い出してほしいと思います。

一昨年、わたくしたちの学園は創立50周年を迎えました。同窓会員各位には多大なるご支援を賜り、記念行事は成功裡に終えることができました。あらためて感謝申し上げます。

そして52年目の歴史を刻み始めた今年度は、本学園のルーツともいえる4人の修士が函館の地

に到着した1932年から数えて80周年になります。

「開かれたる北の島／扉の港函館」は校歌3番の冒頭の歌詞です。かつて函館はフロンティア精神、パイオニア精神にあふれる青年たちが次々に訪れる街でした。日本を西洋諸国のような近代国家にしようと志した若者が集い、切磋琢磨する都市でした。4人のラ・サール会修士は日本に学校を設立するために、開放的で若い函館というトポスを訪れたのです。80年前の10月22日のことでした。この日からラ・サール会と函館とのかけがえないつながりが生まれました。4人の修士の名は、マルシアン・ローラン、マリールゴリ、マリール・マルセル、メラン・ダニエルです。

フェルミン・マルチネス校長は今年の本学園のスローガンを“Their dream is our dream.”としました。4人の修士が来日して80周年にあたる今年、わたくしたち函館ラ・サール学園は原点を大切にしながら、今わたくしたち



に求められている教育的使命をしっかりと受けとめて活動してまいります。

グローバルゼーションという言葉が人口に膾炙するはるか以前から、ラ・サール会はさまざまな境界を越えて教育環境づくりを進めてきました。その精神は本校の教育方針である「1. キリスト教の広く豊かな隣人愛の精神を養います。2. 新時代の人間として、世界に対する広く正しい認識を養います。3. 知・心・体の調和のとれた、社会に役立つ人間を育てます。4. ひとりひとりの能力を最大限に伸ばします。」という理念にもよく表れています。

21世紀に入って世界はいつそう激しい変化をみせています。そういう激動の社会にあっても、けっして変化を恐れず、つねに勇往邁進する若者を育てることこそわたくしたちたちの使命です。

また、社会と時代とが激しく変化していることへの反応として、持続可能性の追求が重要なテーマとなっています。半世紀を越え

る歴史をもつわたくしたち函館ラ・サール学園も、いよいよ二世紀の歴史に向けて歩み始めています。わたくしたちも本学園にふさわしいサステイナビリティを研究しなければなりません。そして、なによりも12歳から18歳の若者の未来のために不易流行を旨として、自己変革をいとわない勇気と守るべき価値に対する信念とを堅持しつつ教育活動を実践します。

One Lasalle! 同窓会員各位におかれましてもますますご活躍下さるよう心よりお祈り申し上げます。





ラクロワ先生の 追悼ミサ

2012年2月2日(木)、午後5時からラ・サール学園新体育館にて第3代校長ブラザー・パウロ・アンリー・ラクロワ先生の追悼ミサが執り行われました。

26年の長きにわたり本校校長として学園の礎を築いた功績は高く評価されます。

式はフランソワ・ザビエ・オール神父様の司祭のもと、多数の現旧職員、PTA、同窓生が集い、聖書の朗読と賛美歌の調べの中、厳かに執り行われました。

献花・追悼の儀の後、学園を代表してアンドレ・ラベル理事長と同窓会から齊藤裕志会長がそれぞれラクロワ先生との思い出を語り、心静かに会をとおしました。

式後、図書室にて学園から茶菓のおもてなしをいただき、名残も尽きぬ中、散会いたしました。

ラクロワ先生のご冥福をお祈りいたします。

ラクロワ先生の略歴

誕生 1930年9月14日 カナダ ケベック州ヴェドン

修練 1947年

初誓願 1948年

終生誓願 1955年

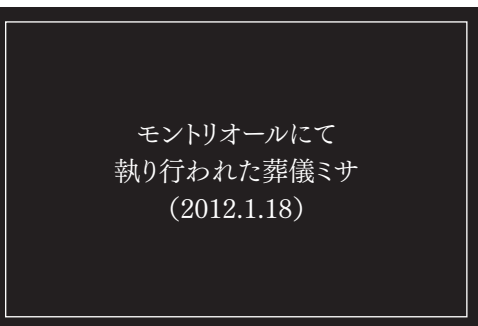
帰天 2012年1月7日(享年81歳)

1951年	モントリオールにて教鞭をとる。
1956年～1958年	サンタフェ(アメリカ)・モントリオールにて英語研究
1959年	東京港区にある六本木日本語学校にて日本語勉強
1960年	函館ラ・サール学園に派遣され、英語教員として教鞭をとる
1961年	鹿児島ラ・サール学園にて英語教員として教鞭をとる
1967年	函館ラ・サール学園第三代校長に就任
1993年	校長を退任後、日野市にあるラ・サール修道院に異動
2002年	函館ラ・サール修道院に異動
2004年	モントリオールにあるBrother's Houseに異動
2012年1月7日	Brothers' Houseにて静かに息を引きとる
2012年1月18日	モントリオールにて葬儀ミサ・告別式
2012年2月2日	函館にて追悼ミサ





▲ 追悼ミサ出席者に配られたしおり





在りし日のラクロワ先生



恩師寄稿



ラクロワ先生に 学んだ日々

1960～93 勤務
遊佐悦大



〈清冽な生涯〉

ラクロワ元校長先生の帰天の知らせを受けたのは、例年にならない積雪で、すべてがすつぱりと包まっていた、正月の余韻も漂っていた1月の半ばでした。

ラクロワ先生とは年齢が1歳違いと言うことで、特別な親近感があり、「さあ、どちらがお先に参るものでしょうかね」と軽口を交わして、心の底からの邪気のない笑いにひと時を忘れたものでした。会話の行き先がこの世からの魂の移転先を意味していることは語る労も必要でしょう。先に天国へのスタートを切った方が、座席を2人分確保しあうという、あわよくば、小生のような、おこぼれに与かろうという願望を下心に秘めている俗人と、ここまでは笑顔で誓いを交わしたことが、しばしばありました。本心では、これ程汚れをしらぬブラザーとは、格が違うことを弁えつつもです。修道士としての修練期に入られたのが17歳と、追悼の記念印刷物にあります、まさに「汚れを御

存じない」幼少期を過ごされ、生涯の人生設計の決断の時が来た時には、何の躊躇もなく、カトリックの布教に生涯のすべてを捧げることは、ごく自然の決断だったと推察されます。25歳で終生誓願を立てられたことは、本校の開校当時、TVで放映されていた「わんぱくデニス」(1960年代のカトリック刷新運動の公会議までは、ブラザーは修道名で呼ばれ、ラクロワ先生はデニス先生と呼ばれていた)に因んで、親近感をこめて、当時の生徒はデニスさんと口にしていたのでした(拙宅はTVがなかったので、正確なタイトル表記は知らないのですが)。卒業生諸君にも、終生誓願の重さの理解者は多くないと思いますが、自分のすべてを神のお望みにしたがって捧げ尽くす生き方であると簡略にご理解ください。終生誓願と書き、説明することは造作もないことです。生涯を貫き通すことの大変さを我が身に置き換え、ラクロワ先生のご生涯を、大人として諸君が思い回らす時、その意志

の強さは到底真似のできない厳しいものであることを、貴重な遺訓として学び取りたいものです。

ラクロワ先生は1961年に函館校に來られ、2004年にカナダのBrother's Houseに移動されるまで、函館校と一体の日々でしたから、それぞれに想い出が多いと想像しますが、徹底して善意のお方であり、笑顔以外を私たちに見せたことがないという人生は、学び尽くせるものではないことも超人並です。

〈想い出の幾「ト」〉

中世最大の思想家と言われているThomas Aquinasの食卓の腹部の部分が、腹がはいるように凹んでいたとの伝説がありますが、ラクロワ先生の腹部も立派なものでした。修道院でも専ら楽しい会話の名手だったようで、生来の明るい個性格に加えて、ゼスチャーの巧みさは、笑いの渦をとめどもなく広げたのでした。胃袋に収まった御馳走は、笑いのための新しい戦力になったようです。特に中国

に、元PTA会長の陳有渠さんと聖ラ・サール像作成の旅での、早朝の市民の格好(特に太極拳のしぐさには、表情までつけての熱演)には、箸は止まったままで引き付けられたものでした。超一流の芸人の域に達していたと、実感させられた程でしたが、ご本人はごくごくありふれた日常会話の再現といった雰囲気でした。修道院の生活で大切なものは、祈りは申すまでもないことですが、よく笑い、食べ、眠ることの大切さをよく耳にしました。お見事な修道士さんだったと尊敬をうけていたことに違いはなかったでしょう。

カトリックの世界には、聖人と呼ばれ、信者の模範となられた先輩の数の多いこと、目映いばかりの方々の伝記などでは、不思議なことに平然と、一切を神に委ね、その日と、体験を乗り越えたと、翌日もいかなる苦難がこようと、喜色満面に取り込む姿が印象深いのですが、言うなれば、生活の達人と言うことになるのでありましょう。

凡人には、不平たらたら、次々に襲ってくる人生の荒波の苛酷な部分ばかりを求め歩いているとしか思えない生き方をする人も大勢おられますが、少なくとも卒業生の皆さんには、身じかにいらした大勢のブラザーさん方の生き方を真似て歩まれるように祈るものです。聖ラ・サールに、パリのバレ司祭が勧めたことに清貧と屈辱と苦難があつたことを関連の書物は触れておりますが、天国に旅立ったラクロワ先生も、ブラザーの皆様がそのような心情のもので、それぞれのデカイオスネー(定められた路を歩む事が運命と見、正義と信じた古代のギリシャ人のように)を愚直に突き進むことにエールを送ってください。

このパートのタイトルに(想い出の幾コマ)と書いてしまいました。ここで終えるのも矛盾する話ですから、職員旅行の思い出の中から、青函連絡船での楽しかった実話を綴って、ご壮健だったラクロワ先生を偲んで見ましょう。

ガラガラに空いていた船内の赤

絨毯を土俵にみたてて、誰かが相撲を取りはじめたのでした。絨毯の土俵で相撲を取るなどということは、国技館では未来永劫にありえないことでしょう。職員も若かったものでした。それを見てラクロワ先生も仲間入りしましたが、強いものの、今の力士に譬えるなら琴欧州か把瑠璃を見ているようなものでした。貸し切りのような船内でしたから目立ちました。いつしか関係のない船客が、手頃な慰みとばかり応援したりしたのでした。ラクロワ先生の「二世代のご体験となつたでしょうし、天国で「娑婆での体験発表」という催しでもあれば、周囲を笑いの渦に引き込む事必定でしょう。

以下は修道士石井恭一先生の書かれた機関誌の中の一文の引用ですが(身障者の全国購読会員を対象とした「グロリア」という、信仰昂揚と文芸欄も含んだ冊子)、記憶に深く残っている感動の玉文があり、「元禄時代と聖ラ・サール」という優れた内容は、石井先



生の文才、ご人格の暖かさなどを余すところなく投射しておりますので触れさせていただきます。

聖ラ・サールが、教育界ですべての子供を愛したご苦勞、受難の結果として今日に至っていることも学び直したく思います。聖ラ・サールの愛の活躍が30代後半から始まったことや、「聖人」と後に尊敬の榮譽を受けるまでの、会内外の試練の凄さに疲れ果てながらも、68歳で世を去るまで、「キリスト教徒として守るべき礼儀作法」という名著を書かれたことなどは何度拝見しても感動が新たに沸いて参りますが、ラ・サール会会員が日々黙想される時は、恐らく、尊師の忍耐強さ、苦難こそ成聖への模範であったことを繰り返し想い、希望のリスタートとされる生活があるのでしょうか。ここにラ・サール会が存続し続ける土台があることは疑いませぬ。そして、その線上に、ラクロワ先生のお姿が彷彿としてくるのです。聖ラ・サールの伝記も、その他の諸聖人の伝記にも、感情の抑制、腹立ち紛れの

粗暴などとは見当たらないのも共通しております。ラクロワ先生の澄み切った明るさは、このような原点に完全に立脚しておられたことこそと言えましょう。

〈終わりに〉

本校で行われたラクロワ先生追悼式で、貴重な一枚の用紙を戴きました。

『聖ヨハネ・バプチスト・ド・ラ・サールの黙想』からの引用で、第208の黙想の中から6片の引用でしたが、次ぎの一文を噛み締めながら、拙辞を終わらせていただきます。

「その時、子どもたちがすべての人の前で、天国への道を教えてくれた人々に対して感謝の言葉を天国中に鳴り響かせる時、おお、何という光栄であることだろう」
ラクロワ先生、清冽なご生涯を誠に有り難うございました。

恩師寄稿

ラクロワ先生の涙

海川敏雄

元教諭



2012年1月7日、本校第3代校長アンリー・ラクロワ先生が母国カナダのモントリオールにあるBrother's Houseで亡くなりました。享年81歳であった。

先生は、校長として26年間の長きにわたって我が函館ラ・サール高校の発展に尽力なさった方であり、同窓生の中には、先生のあの親しみやすい明るい笑顔と、タングのようながっしりとした体軀を思い出される方も多いことだろうと思う。あの先生から、「涙される姿」を想像される方は多分皆無であろうと思われるが、幸か不幸か、僕は2回も先生の涙する姿を拝見している。いずれも、先生が校長として本校に赴任された当初の頃のことであり、当時、学年主任を命じられた30歳を迎えたばかりの僕と、37歳の若き校長という関係の中で偶々起こった出来事……なのであるが、当時の僕にとっては衝撃的な体験と言ってもよく、40年以上経った今でも、忘れ難い思い出となって心に残っている。

ラクロワ先生が校長として来園なさったのは昭和42年(1967)のこと、大学では学生運動が熾り始め、本校でもその影響を受け、制服制帽の自由化要求から、やがて本校の教育そのものへの批判へと広がった、いわゆる「学園紛争」が起きている。44年11月17から授業実施困難の状態が続き、12月2日には冬休み繰り上げ処置を断行、45年2月15日の卒業式は中止せざるを得ない破目に陥ったのだ。7・8・9年生諸氏にとっては忘れ得ぬ「思い出」であろう。

ラクロワ先生は、こうした最も困難な時期に校長として我が校に赴任され、新米校長の身でその渦中に身を投じることになったのだ。想えば、来園してまだ日も浅く、鹿児島で数年の教師経験があるとは言え、精神風土も職員や生徒の気質も異なるこの函館で、指揮官としてあれほどの苦渋と屈辱を味わうことになるうとは、御自身にとっては全く想像できないことであつたろうと思

う。

昭和43年(1968)2月15日、この日は7年生の卒業式が行われた日だった。その日、僕は教職員を代表して、来賓・父母・卒業生・在校生・教職員を前にして、あの屈辱的とも言うべき教師側からの「自己批判文」を読み上げていた。制服制帽の自由化要求から端を発した運動が、教師批判・教育批判・卒業式改革へと飛び火し、やがて翌年の8年生の時には、卒業式を中止せざるを得ないという事態に至るのだが、言わば、その前哨戦とも言うべき小競り合いが、7年生の卒業式で行われていたのだ。42年12月、生徒会は我々職員会に対して、卒業式改革を要求し、その改革の柱として、「三者のスピーチ」なるものを式の中に加えるよう要求してきた。説明によると、ラ・サール教育の改革を図るために、先ず、教師・生徒・父母(保護者)の三者が、それぞれの立場で自己批判をし、それを卒業式場で発表し合う……というものであった。この要

求には、教師側に反対論が多く、最終的には教師と生徒の二者で行うことで決着した。教師側の自己批判文の作成は3年学年会に任せられ、最終的には職員会議の承認を得て発表することになった。スピーチは、当時3年の学年主任であった僕が行うことになった。

卒業式の前日、3年学年会から提出された教師側の「自己批判文」を巡って職員会は紛糾した。午後4時頃から始まった会議は一向に終了に向かう気配もなく、真夜中の12時が過ぎてもまとまりそうもない。学年会がまとめた「自己批判」が、余りにも事実を無視した、本校の教育を卑下した内容になっており、そのようなものを読み上げることは容認できない……、余りにも生徒側に迎合し過ぎた内容で、そんなものを父兄・来賓の前に読み上げることは許せない……といった批判が多かつたように思う。3年学年会のまとめた内容は、生徒会側の意見を正面から受け止め、出来るだけ誠実に対応しようとして、敢えて批

判の矛先を我々教師自身に向けた、苦痛に充ちたものであった……。

会議が終了したのは卒業式当日の午前2時過ぎである。職員会から多くの訂正すべき点を指摘され、原稿を家に持ち帰り、清書して全てが終了した時には既に6時をまわっていた。僕は、終に1睡もすることなく、10時から始まった、あの「屈辱の卒業式」に臨んだのだ。

僕は興奮する気持ちを抑えながら、一字一句、努めて冷静に「教師側の自己批判」を読み上げていった。大意は次のようなものである。・本来学校は、教師と生徒とが親密な関係によって結びついた共同体であるべきだが、現在のラ・サールには両者間に断絶があり、ファミリスピリットは幻想と化している。

・教師は受験体制に毒され、真の教育への意識が希薄だ。本校には自覚された形での教育精神というものがない。

・今こそ現状を踏まえた自己批判が必要で、ラ・サールの真の教

育を取り戻すべく努力をしなればならない。血を流すような苦しみをもって・・・。

今振り返ってみて、よくもこんなことが言えたものだ…と考えるような内容であるが（敢えて言わせてもらえらるなら、僕らがこれほど情けない教師集団であった…とは決して思っていない！）やはりあの時代は、学校批判が全国的に燃え上がり、その批判の矛先が直接現場の教師に向けられた時代で、我がラ・サール高校として例外ではなかった。あのスピーチはそうした厳しい状況の中でまとめられたもので、生徒側の要求に、できるだけ教育的立場から真面目に応えようとしてあのような内容にならざるを得なかった…当時の本校の姿を窺い知ることができる。スピーチには10分程度を要しただろうが、読み終わって己の席に戻った時、僕は急に力が抜けた。そして無性に悲しくなつて、惨めな思いの中で、溢れ出る涙を必死にこらえていたのだった。

卒業式の後、旧図書室で卒業

生の父母と教職員が集まって、恒例の「謝恩会」が開かれた。この時の謝恩会は例年と違って華やかな気分もなく、祝意も薄らいた、どこか白々しい感じのするものだった。僕は打ち合わせがあつたので早目に会場へ行つた。ラクロワ校長と大場清太郎先生が既に来ていらつしやつたが、僕の顔を見て、大変だつたね…と、先ず大場先生から声をかけられた（大場先生は前年まで教頭として尽力され、生徒と教師側とのやり取りの経緯について熟知しておられた方である）。その声が涙声だったので、驚いて先生の方に顔を向けると、「俺達教師が、父兄の前で、あんな情けない、恥ずかしいスピーチをしなければならぬなんて…」、そう言うのと、先生は顔をくしゃくしゃにして絶句した。思わず堪え切れずに僕も泣き出してしまった。すると、傍らにいたラクロワ先生が、「これは、校長の責任です」と言うのと、大場先生と僕の手を取つて、大粒の涙をぼろぼろとこぼされたのだった。この後に謝恩会が

始まつたのだが、先生は、父兄を前にした挨拶の時にも涙された。「申し訳ありません。校長として責任を感じています…」と言つたまま、それ以上おつしやることが出来ずに、空虚な眼で、遙か遠くにあるものを見つめていらつしやつたように見えた姿が、今でも脳裏に残つている。この1年前に、当時2年生だった中村信行君が大沼遠足中に水死する…という痛ましい事故があつたが、ラクロワ先生の涙される姿を間近に見たのは、その時に次いでそれが2度目であつた。

40年以上が経つて、改めてラクロワ先生の「涙した姿」を思い出している。いかにラ・サール会ブラザーとしての使命とは言え、社会思想も生活習慣も教育状況も異なる異国の地で、あの当時の、最も複雑な教育の現場に立つて苦勞なされた先生の心情を想う時、当時の状況を知る同僚の一人として、唯ただ、「先生、有難うございました」と言う以外に、言うべき言葉がないのだ。

ラクロワ先生の御霊の安らかならんことを心から祈念して筆を
お
擱
きます。



同窓生寄稿



生みの苦しみ&喜び 東京同窓会創立秘話

大

1期
誠

○はじめに

「秘話」を広辞苑で調べると「包み隠されて世に知られていない話」とある。東京同窓会は今年創立11年目を迎え、毎年盛会を維持しているが、創立に携わった1期生として、「知られていない話」を披露しよう。

現在の東京同窓会が正式に立ち上がったのは、2002年4月。1期佐藤紘司君が勤めていた「ロイヤルパークホテル」(中央区水天宮)にて旗揚げした。東京会と言っているが、むしろ「首都圏同窓会」と言っている。毎年200人近くを6月の同ホテルに集め、質はともかく、人数に於いては有数な

誇っている。創立にタッチした1期生としては、若き息子の成長を見るようで、実に楽しくうれしいことである。

○21年前のこと

しかし、この旗揚げにさかのぼること11年。今はほとんど知る人もなくなった「大手町に於ける第1回」が実は挙行されていたのである。

本稿を書く為、拙宅のアルバムを限なく調べた。「あつた!」ほこりにまみれた「幻の第1回東京同窓会」の写真があつた。

ちょうど1991年6月24日と記されている。今から21年前の「快挙」であつた。実に懐かしい写真たち。会場は大手町の何と経団連会館。写真には「函館ラ・サール高校同窓会東京支部設立総会」の横看板が誇らし気に会場天井からブラ下がっている。

○1200人に発送

なぜ21年前に東京会を立ち上げようとしたのか。いきさつはも

う忘れてしまった。同期と飲んだ時、「東京に同窓会がなくてどうする!」などオダをあげたのだろう。私は某新聞社に勤めていたが、地方から東京に揚がつて来て比較的ヒマだった。皆から下準備を任される形になった。私は23区外にある都下の小さなオフィスに勤めていた。その支局で目を付けたのが、使う人がほとんどいないコピー機だった。(これさえあれば首都圏の同窓会員に案内状を出せる)。幸い、母校の同窓会が出した卒業生名簿が手元にあつた。支局員が帰つたのち、残業のふりをして、首都圏約1200人の住所氏名をコピーし、往復はがきにセロテープで張り付けて出した。会場は私の職場の本社に近い大手町の経団連会館とした。仕事で会館のパーティ会場を知っていたため、目を付けた。

○約170人が出席

ほとんど使われていなかった支局のコピー機が突如枚数が上がり、本社管理部も驚いたろう。転

居先不明でかなりののがきが私の自宅に戻つて来たが、うれしいことに約170人が「出席」としてくれた。1期が卒業したのは昭和38年(1963年)。それから28年たつていた。「東京同窓会、出来たのか。この日を待っていた」「先輩ありがとう!」等、幹事泣かせの文も書かれていた。

当日は受付、司会、運営等は1期生が分担し、活躍してくれた。

当時、日野市にあつたラ・サール修道院から管区長さん、また函館から校長名代として野本義秀副校長がわざわざ来て下さり、あいさつを戴いた。卒業以来初めて会友もいて、「オー、○○じゃなにか」「お前、元気だったか?」「再会を大いに喜び合う(これが同窓会のいいところだ。同窓会は、これでいい)。肩を叩き、手を握り合つて喜ぶ同窓生を見て、私はしばらく幹事冥利にひたつた。

○消えた10万準備金

まずまずのスタートを切った。来年もやろう。1期生は肩の荷

を降ろしたつもりだった。X期の有志に「これは来年の準備金だから取っておいてくれ。はがき代に充当していいから」と現金10万円を渡した。しかし、翌年が明けても、X期生からの連絡は一切なかった。私も仕事が忙しくなり、そのうち北陸へ転勤となり、同窓会どころではなくなった。

そのまま、ナシのつづて。10年が経とうとしていた。

しかし、私は同窓会のことを忘れた訳ではなかった。ちょうど森村誠一の「人間の証明」が角川映画でヒットを飛ばし、「お母さん、ボクのあの帽子どこへ行ったの?」というキャッチコピーがちなみに流れてあいた。私もヒマがあれば「X期生よ、あの10万円はどこへ行っちゃったんだい」と時折口に出していた。いつか突然、「東京同窓会、再開します」のはがきが舞い込むことを信じて。

○想い出す、あの青春

私は創立したばかりの函館ラ・サール高校に1期生として入

学したことを実にラッキーだったと思うし、誇りに思う。女の子が一人も居なかったことを除いては。新しい校舎。さあ、教えるぞ」と意欲と情熱に充ちた諸先生方。生憎、1期生は秀才が少なく、大進学塾では先生方の期待に沿えなかったが、先輩もいないし、実に伸び伸びと高校生活を送れた。今振り返っても、まぶしい程クリンで楽しかった青春?時代。ありがたいことである(あんまり勉強勉強と言われなかったのも良かった)。

グラウンドでのラグビー。球を追って突っ込めば、そこはペコの糞。いつも腹を空かしていた。午前中、早弁を食し、授業中に海苔、沢庵の臭いが漂っていても先生方は知らん顔をしてくれた。授業の終わりを待ち兼ねて売店に急ぎ、チョコレートパンと牛乳を買って求めた。

○先生方もユニークだった

私は3年間、図書委員をやっていた。新本がずらりと並んだ図書

室の臭いが大好きだった。新潮社の世界文学全集のカバーを巡って、ブラザーと女性司書先生が言い争っていたつけ。全裸の女性の寝姿をブラザーは問題にし、「この表紙は良くない。はずすべし」と主張し、司書先生は「これは芸術であって、なぜはずさなければならぬか」とあらがう。私が側で聞いているのに気付き、両氏が今度フランス語でやり合ったのは、さすがラ・サールというべきか。私が1年の時で、図書室の方針もまだ定まらない頃だったと思う。

国語の先生の下宿を訪ねれば、本をぎっしり詰めたミカン箱がいくつも積み重なって天井まで隙間もない。その本の量に圧倒された。

やたらに生徒にチョークをぶつける先生もいた。幾何の授業中、いきなりドストエフスキーを論じる熱血先生。五里霧中の中、よくぞ生徒の力を信じてあそこまで指導して下さったと、今でも先生方には頭が下がる。

○空白の時を乗り越えて

経団連会館での皆々の笑顔が忘れられず、1期の飲み会で「今度こそ長続きするガッチリした同窓会を作ろう」と話が持ち上がった。

東京会の強味は、人数が多いこと、資金力があることである。発足して、年を重ねれば、何とか持ちこたえるであろう。

1期を中心に、今度は準備会に2期、3期も集まってもらい、1年位かけて準備した。最初は先輩後輩の垣根をはずそうと、ビールを飲みながらの懇親からスタートした。しかし、次第に期の中でも期ごとでも、意見が分かれ、衝突することも出て来た。最初にどういう組織とし、規約をどうするか。難問は山積した。縁があつて鹿児島同窓会の方々に会議に参加してもらい、数々のアドバイスを戴いた。鹿児島の12期が函館の1期と同期であり、鹿児島は鉄の団結力を誇る。

「1期生は同窓会の神様である」が鹿児島のモットーと知り、い

函館ラ・サール東京同窓会年表(2010.9.22植木清三郎)

1991(平成3)年6月24日	日本経団連会館
1期 菅原・大・佐藤・小松・小鷹・阿部・立野・松井他 記念講演 なし 来賓:ラ・サール全日本管区長ブラザー2名(名前不詳、日野修道院)、野本副校長 出席者数:約170名(創立30周年の翌年)	
2002(平成14)年4月19日	ロイヤルパークホテル
1期 菅原・大・佐藤・吉田・斎藤・小松・秋好(3) 記念講演 なし 来賓:アンドレ・ラベル校長、ホルヘ・ガヤルド管区長、渡辺良三会長(4)、遊佐悦大先生、田村(塩越)洵子、山屋(橋本)京子、菅野剛造(1)、深江方次鹿児島会長(7) 出席者数:239名	
2003(平成15)年4月19日	ロイヤルパークホテル
3期 秋好・後藤・内田・菅原(1)・佐藤(1)・小松(1)・吉田(1)・斎藤(13)・斎藤(33)他 記念講演 文学部の行方 谷口 巖 来賓:アンドレ・ラベル校長、ホルヘ・ガヤルド管区長、海川先生、渡辺良三会長(4)、菅野剛造(1)、谷山啓一鹿児島会長(12)、永吉淳(1)、石橋徳次郎(19期ラサールロッジ委員長) 出席者数:185名	

かにも勇気付けられた。

東京会の初代会長には1期菅原宏之君が就任することになった。堂々たる押し出しと、声が大きく指導力を買われての人選であった。

函館の同窓会本部からも力強い支援をもらい、遂に2002年4月19日、悲願とも言える正式な「第1回」にこぎ着けたのである。

同窓生寄稿

友、遠方より

琉球大学理事・副学長
2期
佐藤 良也

我々2期生は、すべて65歳を超えた。高齢化社会にともなう定年延長の流れのなかにあっても、すでに第一線を退く世代である。かく言う私も、40年におよぶ大学教員生活に昨年ピリオドを打ち、今は任期2年の大学役員としてエクストラの人生を送っている。遠い沖縄に身を置くようになって早30年を超えてしまったが、最近になって悠々自適の生活に入った同期生が夫婦で沖縄に遊びにきてくれるようになった。まさに「友、遠方より来たる」である。嬉しく、また楽しい機会を頂いている。

北海道と沖縄は他の都府県と

境を接していないわが国で只ふたつの地域である。その一方で、北海道と沖縄は、およそ3,000キロの距離を隔てて日本列島の最北、最南という両極の位置を占め、北海道の広大な開けた大地に対して沖縄は160余りの小さな島々から成る離島県であるといった点で対照的である。このような自然環境などの著しい違いとは裏腹に、北海道と沖縄は意外な共通性も有している。例えば、北海道では青森以南を内地と呼ぶが、沖縄でも九州以北を内地と呼ぶ。沖縄に移り住むようになった私などは、内地の人(ナイチャー)と呼ばれる。多分、両地域が辿ってきた歴史的な背景が関係しているのではないかと思っている。いわゆる蝦夷地と琉球は、日本の中心(江戸、東京)からみれば、日本の領土外の辺境の地というイメージであったためかも知れない。沖縄にいたっては、かつて琉球王国という独立した王国であった。また、今次大戦で唯一の地上戦を経験した沖縄

で、沖縄に次いで戦争犠牲者数の多かったのが北海道出身の兵士であったことなどはあまり知られていない。

沖縄に赴任して間もないころ、実は函館と沖縄の間には深い縁(えにし)があったことを知った。それは、北前船による「昆布ルート」のことである。北海道特産の昆布が函館・松前から日本海の西廻り航路で鹿児島に運ばれた。当時、日本が鎖国下にあったなかで薩摩藩は琉球王国を隠れ蓑に利用して中国(清)との昆布交易を行い、莫大な財政基盤を築いたと言われる。その豊富な資本をもとに、薩摩藩は近代的な軍事産業を発展させ、それが倒幕、明治維新の原動力となったという説もある。函館から始まる「昆布ルート」が、沖縄を介して300年続いたわが国の幕藩体制を崩壊させ、その旧体制が最後の抵抗を試みたのが函館というのも、何か興味深い因縁を感じさせる。そういえば、母校の姉妹校が鹿児島にあるというのにも、何ら

かの因縁があるのだろうか？詳しいことは分らないが、明治以降、北海道開拓の中心人物はほとんどが薩摩藩出身の人たちであつたと聞く。

ともあれ、昆布の採れない沖縄は今も北海道昆布の最大の消費地である。沖縄の伝統料理には、昆布を使った料理が非常に多い。多量の昆布を使った「クープ（昆布）イリチー（炒め物）」などは、日常的に食されているポピュラーな食べ物である。沖縄で料理に使われる昆布は、ほとんどが根室、釧路方面産の長昆布と言われている。昆布のことは良くわからないが、函館で海産物の加工会社をやっている同期生が以前に送ってくれた昆布が、肉厚で柔らかくとてもおいしかった。沖縄で料理に使われている昆布とはまったく別物の印象であつた。沖縄は、北海道昆布の最大の消費地でありながら、沖縄の人たちはまだ本当の昆布の味を知らないのでは？と思っている。

その沖縄に「北の会」という北

海道出身者の親睦会がある。いわゆる（北海）道人会である。会を主宰するのが青別出身の地元民放（琉球放送）の人気アナウンサーであるが、毎月定例で那覇市内のジンギスカン料理店で開催される会に時々顔を出すようにしている。「北の会」といえば、何の変哲もない当たり前の名前であるが、北海道弁で言うところの「やいや、アンタも来たのかい？」の語呂合わせでもある。遠く北海道から沖縄に越してきた人を温かく迎えるという雰囲気満ちている。私も、古き同窓の友を「やいや、アンタも来たのかい」といって迎える機会がこれからもどんどん増えることを楽しみにしている。「友、遠方より来たれ」である。

同窓生寄稿

新しい函館ラ・サール 学園同窓会に望むこと

医療法人社団 北腎会理事長

坂 丈敏 4期

函館ラ・サール学園同窓の皆様には、益々清栄のこととお慶び申し上げます。皆様には、日頃から函館ラ・サール学園同窓会ならびに母校の発展のためにご尽力頂き、厚くお礼を申し上げます。

私は函館ラ・サール学園の4期として卒業しており、現函館ラ・サール学園同窓会札幌支部長の宮永氏の前に支部長を務めておりました。当時の活動としては支部の地域に特化した活動がほとんどであり、支部ごとの判断で活動をするが多かったと思います。勿論、函館本部とのやり取りはあつたかと思いますが、本州の支部と連絡をとって何かをすること

は、ほぼなかつたと記憶しています。現在のように同窓会のあり方についても大きく議論されていたわけではありませんでした。繋がりについて、それほど重要視していなかつた時代なのかもしれせん。もしくは私達もまだ若かつたということでしょうか。

しかしながら状況は「繋がり」を考えざるを得ない時代に突入していきます。2008年のリーマンショックを起点とした世界的なデフレに加え、昨年には国難と言つて差し支えないほどの被害を生んだ東北地方太平洋沖震災が起こり、まさに日本は転換期を迎えていると感じています。様々な情報は錯綜し、正しい情報を得ることはこれほど大切なのかと感じるとともに、利だけで結ばれた繋がりがいかに脆いのかを身を以て感じました。こういった時に自分を助けてくれる繋がりが、それは利害関係のない友情でありました。こういった経験をした結果、2011年を表す言葉が「絆」であつたように、同窓会の「絆」の必要性にも

気づきました。

我が母校函館ラ・サール学園は開設当時から外国人ブラザーによる英語の授業や国際色豊かな授業も多く、倫理に重きをおいた教育を現在まで継続しており、その教育を受け、卒業した同窓生は13,000人を超えていると聞いております。その多くの卒業生達は日本はおろか世界中で活躍していることでしょう。その沢山の人材を活かすことができれば、利害関係のない有意義な繋がりを創造していけるのではないのでしょうか。

そのためには卒業生をつなぐネットワークが必要不可欠になってきますが、折しも、一昨年の函館ラ・サール学園50周年記念式典で、同窓会のあり方について検討・議論し、新しく全国を網羅した函館ラ・サール学園同窓会が発足をしました。これは大変に意義あることだと思えます。

今まで個別に動き、整合性がとれていなかった同窓会各支部が、同じ方向に向いて活動することができれば、今までと比にならない

くらいの大きな力を発揮します。

ただ、体制を一本化したからと言って、全てが同じ方向を向き、すぐその大きな力を発揮できるというわけではありません。同窓会は理事会を執行機関とし、評議員会を承認機関とする組織が誕生し、函館支部・札幌支部・東北支部・東京支部・西日本支部をもって構成するとされていますが、これを本来の意味で有機的な組織として運営するためには多大な努力と時間がかかり、大変難しいことだと思えます。しかしながら、世代は違えど、函館ラ・サール学園の一貫した教育方針で繋がっている私たちですから、達成できることを信じてやみません。

当同窓会だけではなく、どの同窓会でも主要な構成メンバーが年配者で占められていることからわかるように、卒業したばかりの若い人達は同窓会に興味を持っていないのではないのでしょうか。若者にも魅力的な組織作りができれば新たなステップが見えてくるのではないかと思います。若い人達が

同窓会に興味を持たない理由としてはいくつかの要因があると考えますが、同窓会には彼らの欲する情報を提供するシステムが脆弱であることがひとつあるのではないかと思います。

在學生に向けて卒業生が所属する色々な仕事についての講演や、就職の相談、新社会人からの相談を受けたりと、様々な情報提供や発信をすることによって、若者にとっても有意義で魅力的な同窓会になるのではないのでしょうか。

組織が若返れば、我々のような老輩は人脈や知識・経験や、若き人達は情熱や、行動力、決断力といった互いの能力を出しあうことによって相乗効果的に結果をだしていけるのではないかと思います。

新しく生まれ変わった同窓会には、多くの事業を達成すること、また母校へは勿論、在校生や卒業生にも有意義な同窓会の運営をしていただくことを大いに期待しております。

末筆ながら皆さまのご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

同窓生寄稿

野球部の思い出

渡辺良三

4期

函館ラ・サール高校野球部の高体連初出場は、昭和37年春季大会でした(創部2年目です)。第一戦目から、当時一番強かった函館有斗高校と対戦し2-3の惜敗でした。当時は2回生が中心のチームでした。

その年の夏の大会も又、有斗高校と対戦し3-5の敗戦でした。私はまだ中学生でしたが、「ラ・サール強し」の声をよく耳にしました。

次の年(昭和38年)、ラ・サール高校に入学し、すぐに野球部に入学しました。中学の野球部と違い、とてもおおかで、入学してすぐにバッティング練習をさせて

くれたのを良く覚えています。当時は2年生が1名しかいなくて、3年生主体のチームでした。この年はあまり良い成績を残せなかったのを覚えています。

3年生が退部したこの年の新人戦(秋季大会)からは、2年生が1人でしたので、1年生主体のチームでした。一回戦で函商に0―1の惜敗でした。

翌昭和39年の春季大会は、準決勝で有斗高校に0―5のシャットアウト負けでした。有斗が優勝し、春の全道大会へ初出場しましたが、2回戦で敗退しました。

いよいよ夏の大会がやってきましたが、前回の大会で良い結果を残したので、監督(化学の金井先生)はじめ部員全員が張り切りすぎて、前日まで練習試合を何試合も行った結果、全員疲れすぎて、函館高専に2―5で負けてしまいました。全員大変なショックで、特に私はピッチャーだったもので、ものすごく落ち込んだの良く憶えています。この時の反省をもとに、全員で様々な練習方法をも

試し、そしてチームワークも上がっていったと思います。

秋季大会は、本当に思い出に残っています。東高、函工に勝ち、決勝で有斗高校に1―0で勝ちました。決勝戦は全校応援で、オース学校長先生が、ベンチに上がり応援してくれたのが懐かしい思い出です。

第17回全道大会(今はない中島球場でした)で、2回戦で北海道高校に4―5で惜敗しました。当時、北海道高校には、その後社会人野球を経てプロ選手になった、元ヤクルトの若松選手がいて、彼にメチャメチャに打たれたのを良く憶えています。

この昭和39年には東京オリンピックがあり、本当に日本が世界にその復興をアピールした年だったように思います。

またこの年、沖繩の高校との選抜試合があり、正月をはさみ、代表選手に選ばれて、沖繩に行ったのが良い思い出です。

当時、沖繩は外国で、パスポートを持って連絡船に乗り、東京か

らは出来たばかりの新幹線に乗って鹿児島までの汽車、鹿児島から船と、丸3日ばかりでの大旅行でした。正月の沖繩は暖かく、子供が泳いでいたのが印象に残っています。

翌昭和40年、最後の夏の大会で有斗高校と決勝で対戦しました。昨年の雪辱と有斗の選手は手強く0―0で9回まで接戦でしたが、延長10回力尽き0―3で敗れました。すばらしい投手戦だった事を良く憶えています。

あれから約50年近くが過ぎましたが、当時の同期のレギュラー9人中2名が亡くなっています。私も昔野球をやったと言うと、全員に「キャッチャーでしたか」と言われるほどの体型になりました。

当時のラ・サール高は、生徒がのびのびしてて学校に行くのが楽しみだった記憶があります。

色々な事が閉塞状況にある昨今ですが、なおさら高校時代の思い出が懐かしく感ずる今日この頃です。今年で同期は65歳にな

り、10月に全国から函館に来て、同期会を開催する予定になっています。その時は又、みんなで昔を懐かしみたいと思っています。



同窓生寄稿

福島第一原子力発電所事故：
安全確保の意思決定システム
構築の重要性：

佐藤 正知

5期

平成23年3月11日の東日本大震災が引き金になって、東京電力福島第一原子力発電所の3つの原子炉で炉心溶融事故が発生した。そこに至る過程で炉心の温度が800から900℃になった段階で、ジルコニウム合金製の燃料被覆管が水蒸気と反応してその閉じ込め機能が失われるとともに、多量の水素ガスが発生して水素爆発に見舞われた。この結果、大量のヨウ素-131（半減期8・0日）やCs-134（2・06年）、Cs-137（30年）が放出され、福島県をはじめ深刻な汚染が生じた。私はここまでの大事故は起こらないものと信じていた原子力

工学分野の研究者である。事故で不便な生活を強いられている方々に誠に申し訳ない気持ちで一杯である。この事故の教訓を引き出す立場から気がかりな点の二つに触れてみたい。

戦後の高度経済成長時代には、欧米の先行事例がある中でエネルギー資源に極めて乏しいわが国がエネルギー安定供給体制の健全化に向けて、欧米の技術を導入して原子力開発に取り組むことになった。40年前になるが、大阪万博の翌年の1971年から順次運転を開始した福島第一の発電所も高度経済成長に貢献し国民生活水準の向上に役立った。1985年のプラザ合意を境にして、産業分野によって濃淡はあるものの、欧米に追いつく目標はほぼ達成された。

ただ、そうなる前に豊かになったが故に先行事例が限られる不透明な時代に向き合う用意も進める必要があった。経済性最優先の縦型社会では、意思決定のあり方や研究開発の進め方や学校

教育が、歴史を将来に生かすかという視点でとらえられて来なかったことから、その用意が極めて不十分である。各産業分野における技術立国日本の将来に向けた展開に対して、研究に関する基礎と応用そして短期的取り組みと中長期的取り組みをどう方向づけていくのか、どのような専門家によるような視点で、特に、中長期的評価を委ねると良いのか大きな課題を残したままである。

この点に関して縦型体制を調整・整理しつつも維持し、新たに分野横断的な柔軟性のある体制をどう展開するのかについて戦略的な仕組みができていない。横断的取り組みの面で組織体としての行政組織である各省庁はほとんど機能していない。消費者サイドや市民の安全安心の視点からすると、「数百年や千年に一度」に備える投資は民間企業の経営判断を超えると考えられる。そこで税を徴収する国の安全規制当局が、必要に応じて安全性を優先して長期的な視点に立って経営に

介入する仕組みを持つことが必要と考える。そういった意識を持つて、組織を整えて国は向き合ってこなかった。国の責任体制のあり方が問われている。

民間企業である電力会社においても、欧米の技術導入で実績を上げた管理職が日々の仕事に追われ、個人として課題やその背景に気づく人が多くなっても組織としては改革が進みにくい土壌が浸透し、旧来の体制の中で経済性を優先させて、短期的に収益を上げて評価を受ける展開が続いた。机上の調査に基づく判断を続けてきた。福島第一原子力発電所では地震により送電線が倒壊し、大津波で非常用電源の機能が失われるとともに配電盤が海水に浸り、全電源喪失状態が続く極めて対応が難しい中で、炉心の冷却機能が損なわれ炉心溶融に至った。一方、津波の脅威を肌で感じやすい東北電力の女川発電所では、主要施設とともに非常用電源が高台に設置されたため、深刻な事態を免れた。事故の

教訓を活かす意味で、技術的な対策とともに、適切な意思決定ができる組織に作り変えることが期待される。

1990年代の初め、中国のGDPは日本の1/4の経済規模であった。2000年代の初めになって、その規模は1/2となった。そして、2010年には日本の経済規模を追い抜いた。あと10年すると日本の倍になる可能性もある。インドその他のBRICS諸国も同様に急成長している。

われわれは10年単位で世界がめまぐるしく変化する時代を生きている。原子力発電所では、福島事故以降、非常用の大型電源に加えて移動電源車を高台に用意し、常設の非常用電源を納める建屋は海水の侵入を防ぐ密封構造とし全電源喪失を避ける対策が講じられた。安心感を高めるために防潮堤も含めて必要な対策をさらに推し進めることが大切である。日本国内におけるぎりぎりの電力供給状態も心配である。世界のエネルギー需給の不安定

化は日本全土の経済活動や市民生活を根底から揺るがす。不透明な将来に向けて、リスクの大小を考慮しながら、現実的なエネルギーの選択肢を維持すると同時に、時間をかけて再生型のエネルギーを現実的な選択肢の一つに育てることが期待される。このような取り組みとともに、原子力の安全確保に関する、支える仕組みも含めた国レベルの意思決定のあり方をつくり上げる必要がある。

同窓生寄稿

定年・還暦を過ぎて

～函館ラサール高校同期会

『猿六会』とのかかわり

石原

6期 観

団塊の世代として札幌で生まれましたが、間もなく函館に転居し高校を卒業するまで過ごしました。振り返ってみると函館で過

ごしたのは人生の5分の1の時間にしかありませんが、今でもまだ実家が形を留めていることもあり、気持ちとして、また、風景・風土として『ふるさと』は函館』というのが家族ともども共通の認識となっています。

函館を離れ40年、還暦を過ぎ多少は自分の来し方を考える年になりましたが、62年の人生を辿ってみると、高校を卒業して札幌に戻り、1年のブランクを経てどうにか大学に進学したものの、全国的な学園紛争真つ只中で、ほぼ1年間の休講状態が続き、バイト中心の生活を余儀なくされました。空白を埋める集中講義を真面目にこなして卒業に必要な単位を取得。卒業後は札幌市役所に就職し、以後今日まで札幌から離れることなく過ごしてきました。

市役所では清掃、下水道などの事業部門を経て総務管理部門に配属され、ちょうど「土光臨調・中曽根行革」の流れが地方にも波及した時に重なり、市の行財政改革

を担当、出資法人の見直しに手を染め、その後区役所、教育、都市基盤整備部署を経て、21年3月に肩をたたかれ(勸奨退職)、36年の役人生活にピリオドを打ちました。

年金支給開始年齢引き上げの影響もあり、仕事は続けねばと再就職先を求めていましたが、天下り批判が続く中で、現職時に改革を迫られた出資団体に職を得ました。しかし、23・3・11東日本大震災以降のエネルギー需要の政策転換の影響を受けたリストラの中で任用期限前に退職することとなりました。

現在は、自身が「前期高齢者」になったところで、介護保険関連の権限が都道府県から政令市・中核市に移管されることに伴い、業務連携を進める観点から医療関係団体に再々就職することができ、仕事と自分自身のケアも含めた生活を送ることになりました。経済・雇用情勢がまだまだ厳しい中で恵まれた環境にいることに感謝しなければと思います。

そんな生活の中で、40歳を過ぎたところから、高校同期生との交流する機会を定期的に持てるようになってきました。

卒業後しばらくの間は、函館、札幌、東京、関西など地域ごとの集まりが折々に開かれていたが、平成5年7月に、函館と札幌の地区合同同期会を開くことができた。会場は両地区の中間点、洞爺湖サミットの会場ともなったウインザーホテル。当時は「エイベックス洞爺」として開業間もない時で、バブルの象徴的なホテルだったが、今日の全国を網羅する『猿六会』活動の節目となった集いでした。

翌年から北海道での集まりは道内を5ブロックに分け、各年持ち回りで開催することとし、札幌、小樽、苫小牧、帯広、富良野、伊達、千歳、洞爺、美幌、登別などを回っています。

毎年常連メンバーに加えて新たな参加者も加わり30名前後の集いとなっていますが、概ね5年に1度の記念大会は函館で全国から

の参加を基本に開催することとし、平成9年の卒業30周年記念（正確には29年でしたが…）では90名、15年の35周年時には70名、そして21年の卒業41年還暦記念大会は100名以上が参加し大いに盛り上がりしました。

ただ残念なことに、近頃は毎年1～2名が鬼籍に入ってしまった、冒頭に黙とうから始まるのはちょっと切ないものがあります。

同期会としての日頃からの繋がり、情報共有を進めようとメルリングリストと合わせ、WEBサイトにホームページ(<http://hs6th.jp/>)を開設し、各地域の活動状況、今後の行事予定などを掲載していますが、管理人の個人的資質・負担に負うところが大きく、今後の運営体制に何らかの工夫が必要になっている状況です。

団塊の中核として、大学入試制度、就活問題、年金制度、定年対応など社会状況の変化にその都度振り回されてきた感がありますが、変化への順応性はついているのかと思います。まだまだ「悠々自

適」というには程遠い状況ですが、最近やつと孫も生まれ、これから少しずつでも社会に還元できるよう生活していかなければと思っています。



同窓生寄稿

聖ラ・サールの
通帳を引き継ぎました

長谷川 裕崇 8期

「宗教の時間？何でそんな授業があるのか？ここは受験校だよ！」

思えば、姿を隠していた神が、視野狭窄の私の眼前に現れた瞬間でした。

それから20数年後。1期の吉田誠治先輩（当時は北海道庁職員）から札幌支部同窓会の通帳を引き継ぎました。小生が引き継いだのは何時のことだったか、もう定かに覚えていません。（多分、現事務局長の掌中には、当時の通帳が残存しているとは思います。）

このように書くだけで、当時の状況を皆様にご推測いただける

と思いますが、札幌支部同窓会を
実際に支えていたのは1期の吉澤
慶信氏を中心とする北海道庁に
奉職されたラ・サールOBの皆様
方でした。北海道職員といえど転
勤も頻繁にあり、同窓会の活動を
維持していくのはかなり大変だっ
たと今さらながら拝察しておりま
す(当方の父は教師だったので人
事異動に伴う転勤の大変さは良
くわかります)。

私事で恐縮ですが、当方が札幌
市職員となったのが昭和54年(1
979年)で、同じ職場の北区役
所には6期の石原観先輩と7期
の村木正隆先輩の奥様とがおら
れました。転勤で札幌市外に出る
(住所変更をする)ことは稀とい
うべき札幌市職員に札幌支部同
窓会の裏方の役割が回ってくるの
は、いわば既定路線だったというべ
きでしょう(そして、公私にわた
り、後輩としてお二人に甘えるこ
とができたのも小生にとっては既
定路線でした。いまだに甘えてお
ります)。

札幌市職員では、1期生のラ・

サールOBは佐藤泰昌先輩お二人
のみで、その次のお二人目が6期
の石原氏でしたので、8期の小生
が通帳をお預かりするのは状況
からして自明でした。つまり、当方
は札幌支部同窓会の通帳をお預
かりするために札幌市職員とな
ったようなものであります。職員
採用時の辞令交付式で当時の板
垣市長から直接辞令をいただいた
のですが、思えば、板垣市長の
実体は神たる聖ラ・サールの分身
だったのです。

平成7年(1995年)のこと。
札幌支部の実像が小生の目には
つきりと見えたのが、4期の田村
政志氏の北海道副知事就任の祝
賀を兼ねた支部総会・懇親会の
時でした。

気がついたら、同窓生に向けて
同窓会開催の案内を郵送すべく、
せつせと宛名書きをしていました。
完全に神の掌中にあつたのです。
(本当は焼酎のほうが良かったん
ですが)「酒とバラの日々」どころ
か、封筒の宛名書きとファックス
送付の日々でありました。ファックス

ス送付の際には、宛名の部分のみ
鉛筆書きにして、同窓生の皆様
のご芳名を書いては消しゴムで消
し、次のご芳名を記載してはファ
ックス送付に及んでいました。

当時の支部総会・懇親会の写
真が手元に2枚。中越先生のご臨
席をいただいております。その写
真を眺めていると、数多くのラ・サ
ーリアンが集い、熱気に溢れていた
会場の雰囲気鮮やかに蘇ってきます。
自分がラ・サーリアンである
ことを心から実感した一瞬でし
た。この時点で、札幌支部同窓会
は質的転換を遂げたのだと表現



できました。集ったラ・サーリア
ンの二人ひとりが同窓会というも
のの名と実との合致を理屈抜き
で体感した瞬間でした。

写真に写っている同窓会・懇親
会の受付にある掲示には、「第四
回生札幌支部同期会」と「札幌支
部同窓会」とが併記されておりま
す。いわば同時開催です。この流れ
が4期の坂丈敏先輩の札幌支部
支部長就任へと繋がっていきまし
た。

そうして春秋を経て、4期の坂
氏から5期へと札幌支部支部長
職を引き継いでいただくために、



5期の方々の中から人選していた
だかなければならぬ時期を迎え
ていました。今は店閉まいしてしま
いましたが、8期の同期生である
中嶋昇君が経営していた札幌は
ススキノの「牛若丸」(スナック)に
て、適任者のご推薦を5期の先輩
方にお願ひした経緯があります。
5期の佐藤正知先輩に支部長職
が引き継がれることが内定し、聖
ラ・サールが分身化・血肉化した
瞬間でありました。神の歴史は夜
つくられるのであります。

横道にそれた話を聖ラ・サール
の通帳に戻します。齢を重ねつつ
あった小生の肩の荷を引き継いで
くださったのは、18期の菅井朗氏
でした。東京でもご活躍なされて
いる有力な公認会計士であり、非
常にご多忙な日々を送りながら
も、快く事務局長として裏方を動
めてくださった菅井氏には心より
感謝申し上げます。彼の存在なく
しては今の札幌支部はあり得な
い。聖ラ・サールは救世主を送って
くださったのであります。

同窓生寄稿

ラ・サール遺伝子

岩 淵 雅 俊

11期

手元に、「心の夜想曲」という遠

藤周作さんの講演を録音したCD
があります。その中に、或る大
学の入学試験問題として遠藤さ
んが書かれた小説が出題され、そ
れが試験終了後に遠藤さんに送
られてきた時の話がでています。

「受け取った後すぐに、主人公
の気持はどれか一つ選べという問
題をやってみたんだ。答え合わせ
をしてみたところ・・・、それが違
つとるんだな」選択肢を読んだ
のだが、どれもあたっているのだ
よ。だから全部〇にした」「しか
し、作者が出した答えが間違いで
あって、大学の先生の答えが正し
いなんてことが、あり得るか？

(笑)

遠藤さんの話は、遊佐先生のお
話と同様、どこまで事実か疑わし
いところがありますが(遊佐先生
すみません!)事実でないとして
も真実だと思ふのです。そして、
自分が遠藤文学に惹かれるのは、
遠藤さんのそういうところ、つま
り、正解であろう事を論理的に突
きとめる読み方をするのではな
く、多様な心を感じとり受け入
れるところです。

東京同窓会実行委員として活
動して行く中で、それは、聖ラ・サ
ールの遺伝子を持つ人間だから
ではないかという思いを強くしま
した。よく「準備大変だったろ
う?どのくらいの頻度で会議を
開いていたんだ?」と聞かれるの
ですが、実は11月に初会合をも
ち、12月に会ったきり、次に集まっ
たのは5月21日。11月に会った時
は殆ど呑み会でしたから、実質2
回です。でも懸念はありませんで
した。何故なら、実行委員、事務
局そして同窓会にお集まりにな
るであろう殆どの方に、函館ラ・

サールで、15〜18歳の少年を大人
扱いしていただいた先生とブラザ
ーから、大学の授業でもそうはお
目にかからない、熱い授業を受け
たという共通項があると確信し
ていたから。

今年のテーマ「ラ・サールのここ
がすごい!」は12月に決まりました。
今、函館ラ・サールに通ってい
るのは自分の子息よりも年下で
あること、自分が居た頃と今で
は、函館ラ・サールをとりまく環
境が違っていないわけがないこと
は承知です。が、どんな時代であ
ろうが「自分って何だろう?」「こ
れから自分はどうなるんだろ
う?」と不安になり、自分が描い
た様には物事がなかなか進まな
いことに落ち込み、皆で戯れてそ
れを紛らわそうとしたりして生
きているであろうことは同じだろ
う。そして、函館ラ・サールにそう
いう12〜18歳の少年たちを温か
く見守る先生とブラザーがいる
ことも真実だろう。それを、参加
していただいた方々に思い起こし
ていただきたいと思った結果出て

きたテーマでした。

この文のおしまいに、私だけが知っている(かもしれない)函館ラ・サールのここがすごいという話をさせてください。1、2年の頃、自分を含めて11期は数学の成績が芳しくなく、それを当事者の11期は殆ど皆感じて、落ち込んでいました。そんな3年の4月、大場先生が数Ⅲの担当になりました。後に、担任だった大畑先生から伺った話なのですが、当時、職員室では「11期はラ・サール生ではない。数学ができなすぎる!」という意見があり、それを打ち破るべく大場先生に担当していただくことにしたそうです。大場先生はそれに対して、「いや、そんなことはない。皆、自信をなくしているんです。だから、あまあく点数つけて、自信をつけさせればいい」。

秋の実力テストが終わった時だったと記憶しますが、廊下で大場先生に呼び止められました。「イワブチくん、あそこ、十と×を間違えたでしょ! (笑)」私、昔も

今もオッチョコチョイでして: (笑)。

悪い点を覚悟していたところ、その問題について半分ほど点をいただきました。そして、予備校生のころ、全国模試で、数学で名前がでるほどになっていました。すっかり数学が得意科目に化けていたわけです。大場マジック、いやラ・サール・マジックにはまったのです。こんなすごい先生たちが天国から見守り、他者の気持ちを感じることができ、謙虚に日々新鮮な気持ちで生きているOBが多々いる学校は、いい学校です。



同窓生寄稿

白黒写真が

語りかけてきたこと

植竹公和

11期

ラ・サールの講演を同級生に依頼されて、これは困ったことになったと思った。先輩や後輩や、ましてや、先生の前で僕の個人的な話をしてもおもしろいはずがない。そんな皆さんに誇れるような、劇的な半生を歩んで来てはいない。もっと、ふさわしい人がいるに決まっているからだ。

僕は劣等生という奴だった。ゆえに、どうして、僕に白羽の矢が立ったのか? それも依頼してきた同級生が、当時の飛び切り優秀な生徒だった奴。彼がやればいいのになと思ったが、なんとなく、僕がやることになってしまった。

第一、僕はろくすっぽ、高校へ行っ

てない。今は完治したが、当時、強度の喘息にかかっていた。連日、早朝に、発作が起き、登校しても保健室で寝ていて、昼食を食べて、帰宅する毎日。振り返ると、ラ・サール時代は僕は遊びも勉強も何もできず、ラ・サールの生徒や先生やラ・サールの風景のただの目撃者だった。だから、これと言った自分の思い出はほとんどない。ひたすら、健康で優秀な仲間たちに猛烈に嫉妬し、呪い? (笑)、己の状況に絶望し、まるで、8ミリビデオで記録するように、皆の青春ドラマの上映を観客として観劇していた。だから、自分には、講演などで、何も語るネタがない。しかし、自分のことは話せなくても、記憶のビデオに、記録された仲間たちや先生についての話は少しは、できるかもしれない? と、講演を請け負ってしまった。

放送作家という仕事柄、映像と音源を使って講演をやることにした。当時の死の? 50キロ競争の写真、1泊3日の強行・修学旅行の写真、先生たちの写真、それと仲間が先生の授業風景を盗聴

していたカセットテープの音源も使いながら、講演をやった。40年前の昭和の白黒写真だ。三島由紀夫が自決したり、日の丸飛行隊が活躍した時代。その色褪せた皆の白黒の写真の顔を見ていたら、みんな一人一人、なにか所在なげで、おどおどして、貧乏臭く、地団駄踏んで、虚空を見つめ、飢えていて、誰一人自信の固まりなんて奴がいなのが、手に取るようにわかった。自分は一応、映像のプロなのでフィルムに映った人間の表情で、見えないものが見える。高校時代の自分は、世界の孤独を一人で抱いていたような気がしていた。手垢がついたクサイことを言うようだが、青春は皆にとっても平等に孤独だった。僕は闘病という特殊な事情があつたが、白黒の写真の当時の仲間の表情を見たら、みんな孤独と戦う同じ戦友で、さびしさを共有していたんだなあと、少し、安心した。全て、白黒写真が語っていた。57歳になつて、やつと、そのことに気づいた僕はやはり筋金入りの劣等生だと思う。

同窓生寄稿

聖ラ・サールの

宗教哲学とその展開

—日本哲学・教育の観点から—

中富清和

12期

フランスのカトリック司祭、聖ラ・サール(Saint Jean-Baptiste de La Salle)は、近代学校教育においてクラス編成や教師養成学校(現在の教育大学)を考案したことで知られている。彼のキリストの名における教育理念・実践は哲学であり、21世紀の今日においても教育の展開をしている。存命中、彼はフランス国内に50の学校(無授業料)を作り、その精神・情熱は時代と国を超え、ラ・サール会による学校は、世界80カ国、約1000校に及ぶ。日本においても函館市と鹿児島市に高等学校(1)が、仙台に児童養護施設(2)があり、国内では高い評価を

受けている。聖ラ・サールのキリスト者としての誠実な生き方、教育への情熱、人間愛、堅固な忍耐力は、深く我々の心を打つ。彼の宗教哲学・教育哲学は、キリスト教に基づくが、アジアの仏教国、儒教国においても広まっている。その普遍性は、彼の深く広い人間観によるものであり、その中核は、「神に対する人間の崇敬の外的表示としての礼儀の哲学」である。教育は、相手に対する敬意(教師、生徒相互)が必要であり、その根拠は神への崇敬にある。こうした礼儀を重んじる思想は、歴史的には孔子である。ラ・サールの「礼の宗教哲学」は、時空を超えて孔子の「礼の哲学」に連続する。ここに、ラ・サールの教育理念は、アジアにおいても理解され、受け入れられる根拠が見出される。今日、ヨーロッパ哲学とアジア哲学の総合が課題とされているが、ラ・サールの哲学は、その総合の先駆をなしている。ここに彼の業績を讃えて私の「無と愛の哲学」の立場から、彼の哲学・教育実践の偉大

さとその展開を提示したい。それは、21世紀の教育、哲学の光となるであろう。

Ⅰ.生涯—幸福と挫折

ラ・サールは1651年フランス、ランスの裁判官の長男として生まれた。石井恭一氏(ラ・サール会修道士)の本(3)によると、ラ・サールは極めて平坦な幼年期、不自由のない生活をしてきた。裁判官の家庭というと、現代では高級公務員、エリートの家、裕福な家庭である。両親ともカトリック信者で、父、ルイ・ド・ラ・サールは、常に礼拝では、最前列に座りかつ司祭の祈りは全部覚えていたという。母、ニコル・モエド・ブルイエも信心深く、ラ・サールに限りない愛情を注いだという。ラ・サールは、素直に神を受け入れ信じ、成長した。聖職者になるべくランス大学神学課程に進み、さらにパリの神学校に学んだ。ラ・サールは聖職者としてのエリート之道を順調に歩んでいた。しかし、20歳の時、思わぬ試験に見舞わ

れた。1年の間に、両親を失うのである。父は47歳、母は38歳で病死する。弱冠20歳のラ・サールは家と6人の弟や妹の面倒をみなければならなくなった。両親を失う不幸は、中国の孔子、イスラムのムハンマドも同様で、人類の偉大な先哲に共通するように思われる。

ランスに戻ったラ・サールは、くじけることなく6人の弟妹をみながら、神学の勉強を続けた。現在でいえば、通信教育であろうか。両親の死にめげず、勉学のかいあって、27歳で念願のカトリック司祭となった。この途上、ラ・サールを慰め励ましたのは、ニコラ・罗兰司祭で、慈善事業や無報酬教育に強い関心を持っていた。彼は、ランスの町で無報酬学校を始めた。しかし、1678年急逝、事業の継続をラ・サールにゆだねたのである。さらに、親戚のマイユフェール夫人、重病で余命はかない篤志家レヴェーク・ド・クロワイエール夫人の提言などにより、ラ・サールは教育へ向かうこととなった。マ

イユフェール夫人の学校設立の手紙を運んできたアドリアン・ニエルとラ・サールは出会い、男子の無報酬学校が開校された。しかし、アドリアン・ニエルは学校事務長としては、適任であつたが、教育そのものについては、素人であつた。教師を集めることはできなかった。教師を指導することはできなかった。当時の教師は、現在のようないかなる専門教育機関、大学を出て受けていなかった。集まった若者は、町中にいる若者を集めただけの集団であつた。それで、ラ・サールは、まず、教師の養成をしなければならなかった。

この若者達は、まず、礼儀作法が欠けていた。礼儀作法は社会への参加章(4)のようなもので、これを身につけていないと社会人とは認められなかった。ルイ14世、フランス絶対王政の全盛時の当時、宮廷では、儀式に始まり儀式に終わった。この儀式、礼儀作法をヨーロッパ社会の柱にしたのは、キリスト教であつた。それは「神に対

する人間の崇敬の外的表示」として、詳細に規定されていた。ミサの祈りの姿勢、言葉、行列、祭具、装飾などへの配慮である。こうした典礼は、作法は、騎士、宮廷の作法に影響を与えた。(この礼儀作法重視の姿勢は、孔子とつながる)ラ・サールは司祭として、礼儀作法を身につけていたが、礼儀を欠く若者達には、目に余るものがあつたであろう。ついには、自宅に、この若者達を呼び、共同生活を始めた。当然、家族の反対も生じ、結局、家の近くに二軒の家を借り、若者達と共同生活をした。その内容は、修道生活で、彼らにとつては厳しい修行であつた。何人も逃げだし、二人の時もあつたという。しかし、教えは徐々に浸透し、青年達も増えていった。

やがて、ラ・サールは重大な決意を迫られた。それは若者達の将来である。無報酬学校なので、収入のあては見込めない。若者達は、将来の生活保障に悩んだ。ラ・サールは有名な箇所、「空の鳥をご覧なさい、蒔きもしなければ

刈りもせず、倉におさめることもしません。でも、天の父はその鳥たちを養われます。あなたたちは鳥よりもはるかに優れたものではないでしょうか。……明日のために心配しないでください。明日は明日で自分で心配します。一日の苦労は一日で足りるのです。」(聖書 マタイによる福音書第6章26節〜34節)と諭す。しかし、若者達は言う、「ラ・サール神父様、私たちはあなたにうまく利用されているのです。あなたは、ラ・サール家の主人で、また、ランス司教座聖堂参事会員です。先祖から伝わった広い土地や家をお持ちの上に、さらに、参事会員としての職録も受けておられます。だからどんな波目に陥つても、あなたは困らないわけです。保障されているのですから。でも私たちはどうなのでしょう。か?」(5)

ラ・サールは、若者達をとどめるために、家の財産と聖職者としての職録を放棄する。これは歴史における仏陀の出家、孔子の平和論実践による司法大臣の放棄と

重なる。歴史の偉大な先哲は、人生のどこかで名誉、地位、財産を捨てざるを得ない。ある意味では、無になること。しかし、この無は、単なる無でなく無限の可能性へ連続する。すなわち、仏陀は、悟りに至り、孔子は弟子達の教育へ向かう。ラ・サールは、財産を失うが、教育者となる若者達を得た。それは、教育の礎となった。1684年ランスに「キリスト教学校修士会」(通称、ラ・サール会)が誕生、会員数も60名に達し教育活動は軌道にのりだした。

ランスでの学校が順調に行くと、今度は、パリの学校経営で呼びだされた。その学校は、生徒数約200名で、混乱状態にあった。時間割もなく、キリスト教の教理教育もなされず、規律は乱れ、何と、生徒達は運動場で賭け事をしていたという。教育現場で働いている筆者にとって、この状況は、容易に察しがつく。無報酬学校に来る家庭は、そもそも授業料を払えないほど、経済的に貧しい。親は、生きるのに精一杯で、

子供の教育どころではない。子供は躰がされず、感覚と欲望におもむくまま。両親がいれば良い方で、片親の場合は、深夜作業で親が朝、起きることができない。親子ともども朝寝坊で朝食もなし。こんな状態で、学校にきても勉強に集中できない。私語、ざわめき、奇声、嘲笑、器物損壊、暴力と心はすさんでいる。こういう生徒達を教育するわけであるから、聖職者といえども、教育と聖職者の生活は不可能である。(現代では、教育者は一つの職業になっている。)

それで、ラ・サール会は司祭をおかない。教育は一人の人間が心身共に捧げ切る価値ある仕事として司祭との兼任は認めない。それでモットーは「司祭がおらず全員が教育のみに身を捧げる修道会」とした。こうした活動には、やはり妨害が生じた。ラ・サールは、優秀なルーラー修道士を会長に任命したが、司教がこれを許可しなかった。司祭と修道士の間には格差があり、修道士が修道会の会長になることは認められなか

った。また、ルーラー修道士は、パリのある学校の指導者となったが、嫉妬からであろうか、これに不満の古参修道士は、脱会した(6)。

パリ進出を果たしたラ・サールは、評判が高かったのであろう、立て続けに三校を開校した。ところが、パリに行つてから、ラ・サールはランスとの往復で、疲労、閉尿症になる。重体で、生死を賭けて「馬の薬」を使用、奇跡的に回復した。運もよかった。名声が広がる、逆風も激しくなった。習字学校、有料学校の教師達がラ・サールを裁判で訴えたのである。その理由は、「貧しい子を集めるといいながら、裕福な子供を入学させて授業料をとっている」すなわち、詐欺的教育活動をしていると(7)。ラ・サールはこれに対して、反論せず結局、敗訴。学校は停止、不当にも学校は襲撃されてしまう。かろうじて、シエタルディー神父により鎮静化されたが、このシエタルディー神父が、ラ・サールにとって支援者であり、また、最大の妨害者という矛盾の権化で

あった。味方と敵が同一という矛盾の存在は、ヨーロッパ哲学では、異常としかいようがない。(しかし、日本哲学の西田幾多郎は、これを絶対矛盾的自己同一と表現し、新しい論理学を提起した。)このシエタルディー神父は、ルイ14世にも謁見できる高級聖職者で、権力志向の高級官僚と思えば良いのかもしれない。役人の世界では、なんでも上司の命令に従うのが常識。異議を唱えることは、反逆に等しい。現在の日本では、左遷か窓際族にさせられるのがおちである。ラ・サールは、しばしば異論を唱えた(譲らない点があった)というから、目をつけられたのは当然。そもそも事業内容自体が、質的に違っていた。ラ・サールは従来とは違う教育を考えていたわけで、従来の施策を踏襲、監督するシエタルディー神父とは、ベクトルが違っていた。シエタルディー神父は、さながら文科省の官僚、ラ・サールは学校現場の教員と校長を兼ねた最前線の教育者である。間に入る人がいなかったので、

ラ・サールは不遜な部下に見えたであろう。故に、シエタルデイー神父の迫害は、激しくなった。

その第一は、ラ・サールの厳しすぎる苦行である。詳細は不明だが、たとえば断食であろう。石井氏の本によると、修道院で戒律のもつとも厳しいトラピスト修道会（正確には、厳律シトー会）を指していた。初期にいた、15人の修道士中、6人は30歳前に他界した（8）。半分近くのメンバーが死に至るほどの苦行である。仕事の中にも倒れたり、差し障ることもままあったようだ。この苦行をやるようにシエタルデイー神父は忠告したが、ラ・サールは止めなかった。教育に向かう厳しい姿勢のあらわれであろうが、続けられた。無論、後ほどラ・サールは止めるようになるが、この時は続けた。第二は、ミシエル修練長（修道士の指導者）が、数人の修練士にちよつとした過ちで体罰を加えた。体罰を受けた修練士は、シエタルデイー神父に訴えたのである。ラ・サールの引き落としをね

らつていたシエタルデイー神父は直ちに、大司教に報告。ラ・サールの監督不行き届き、指導力不足を告発、ラ・サールの会長を罷免させた（1702年）。パリの有料学校の教師達による告訴は、この後である。

こうした迫害、試練の嵐の中でラ・サールは何を考えたであろうか？さらには、ともにラ・サールの設立に誓約を交わした仲間が裏切ったり、有力な支援者も去つて行つた。事態は、最悪であった。しかし、こうした試練によってラ・サールは、不屈の忍耐力を身につけ、思考、理念も鍛錬されたのである。

「信仰の試練は、火を通して精錬されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであつて、イエス・キリストの現れの時に称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。」（聖書 第一 ペテロの手紙 1章7節）

身内からの攻撃は、敵の攻撃よりはるかにダメージは大きい。上司からの迫害、仲間の背信は何

ほどのダメージをラ・サールに与えたであろう。おそらくは、ラ・サール以外の者は挫折したに違いない。しかし、ラ・サールはこうした、迫害、裏切りに屈しなかった。シエタルデイー神父や、パリの教師達の迫害、仲間の裏切りという試練は、逆にラ・サールの情熱、理念、哲学をさらに高めたのである。試練が強ければ強いほど、ラ・サールは磨かれ、金銀を超えて永遠の輝きを放つダイヤモンドの光を放つに至つたのである。ラ・サールの会長職を失う無に直面し、その前には財産を放棄し無一文の無となり、裁判に敗訴し、教育活動は停止され、過酷な無の遭遇となつた。しかし、この無は、単なる無ではなく、無限、永遠の輝きにいたる。無は無限、永遠、超越者、愛へと連続する「無と愛の原理」（9）の機能である。ラ・サールの生涯にもこの原理は適合される。それは、キリストも同様である。キリストも無を体験し、永遠の命を証明した。そして、永遠、無限に高められた。

「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもつて現れ、ご自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。」（聖書 ピリピ人への手紙 第2章6〜9節）

ラ・サールも、無という闇の中で、逆に、無限、永遠に至るエネルギー（神的エネルギー）を享受し、高められていたのである。故に、逆境であつてもヤケになつたり、匙をなげることはしなかった。また、大きな抵抗もしなかった。裁判に関しても、出廷せず、判決にまかせた。シエタルデイー神父に対して、抗議はしなかった。ここが、ラ・サールの賢明なところで、争いよりも道を広げる方へ、精力を傾けた。試練を受けつつもフランスの

様々なところに、学校を開いていた。苦難よりも教育実践、学校開設による喜びの方が、遙かに大きかったのである。北フランスでは、ランス、シャルトル、ギーズ、ルーアン、ヴェルサイユなど、さらには、南フランスでは、アヴィニオン、マルセイユ、グルノーブルで開校された。パリでは、八方ふさがり、四面楚歌の状況であったが、南フランスでは、快く、ラ・サールをむかえたのである。結局、迫害の嵐の中、ラ・サールは、無理な航海は避けて、南フランスに移る（1712年、61歳）。当時、南フランスは、方言のなまりが強く、異邦人のような地であった。それだけに、ラ・サールは南フランスへの学校建設への情熱を注いだ。言語の苦労はあったが、パリにおけるようなしがらみ、迫害はなく、着実に教育は広がっていった。ただ、南フランスのカミザール地方には、ナントの勅令廃止に抵抗する新教（カルヴァン派）の勢力があり、ルイ14世王政と対立していた。ルイ14世の軍隊も鎮圧できなかった。こうした治安が

不安定の地にもラ・サールは入り、カトリック、新教徒、関係なく子供達を教えたのである。そこには、異教徒に対しても平等の教育を実践しようとするラ・サールの広く深い人類愛がうかがえる。この情熱が、世界教育へと展開し、日本にまで広がったのである。

南フランスでは、暖かく迎えられ、落着かと思われた。しかし、思わぬ苦境にみまわれた。それは、当時、ローマ教皇、ルイ14世から異端宣告された、ジャンセニズムの信仰者としての誤解である。ジャンセニズムは、人間の自由意志より、神の恩寵を重視するアウグスチヌスの教説に基づいているが、ローマ教皇の勅書を無視し、フランス国王が要求した「信仰宣誓書」への署名を拒否したことにより反体制派とされた。パリのポール・ロワイヤル修道院が牙城となり、フランス全土に広がっていた。ラ・サールの弟が信仰し、それでラ・サールもその一派の疑いをかけられた。このポール・ロワイヤル修道院は、哲学者パスカルの信仰、回心に影

響を与え、パスカルはポール・ロワイヤルの立場から論陣を張ったのが、『プロバンシャル書簡集』であり、死ぬ38歳までつづられたのが『パンセ』である（この時ラ・サールは11歳）。故に、神学的・哲学的には極めて有効、強力であった。ラ・サールの学校は、反教皇、反国王派として、迫害、弾圧されたのである。かつての同士、ボンヌ修道士もラ・サールを非難し、去って行った。かつての教え子（修道士）も公然と背を向け冷たい対応をした。何と、修道院に宿泊中のラ・サールに宿泊料金を請求したという。家主に向かつて、間借り人が宿泊料金を請求するようなものだ。幸い、「キリスト教婦人共同体」という小さな信心団体がラ・サールを泊めてくれた。ラ・サールの生涯において、女性達（女子修道会）はしばしば、支えたのである。特に、宿泊先もままならずリユーマチの再発で、苦しんでいた1715年春、グルノーブルの近郊バルメニの丘でのことである。安住の南フランスで、まさかの迫害である。絶

体絶命の苦境、ラ・サールは自分の生涯を回顧する。「一切の財産を捨てて、教育の事業に邁進してきた。これで良かったのか」孔子の大いなる迷いのような。ここで、無学だが純心のルイーズ隠修女と出会う。極めて短い対話だが、ルイーズから次の言葉をたまわる。

「神があなたを父となさった家族を見捨ててはいけません。この仕事は、あなたの受け持たれる仕事です。」（10）

この言葉で、ラ・サールは心を立て直したといわれる。神的な言葉、あるいは哲学的直観ともいえる劇的な衝動、電撃を受けたのである。ちょうど、この時、なんとパリから帰還要請の手紙を受け取る。

「神父様、神父様はあなたのお名前と、本会全体によつて神に従順を約束なさいました。それゆえ、私どもはその本会の名によつて、直ちに本会全体を統率なさることを神父様に謙虚な心でお願いし、また、ご命令いたす次第でございます。」（11）

ラ・サールの事業は正当なものとして改めて評価されたのである。大逆転である。その後、ラ・サールの最大の迫害者シエタルデール神父は、死去。パリに戻ったラ・サールは、ラ・サール会を立て直し、ランスで総会を開催、バルテルミー総長を選出し、会の礎を確実にした。1719年、神へ感謝の言葉を残して、平安のうちに昇天した。波乱万丈の生涯であるが、キリストにおける礼儀の哲学は、一時も揺るがなかった。では、その核心の哲学に至ろう。

II. 礼儀の宗教哲学

石井恭二氏は、ラ・サールの研究において、日本との比較考察をされている。これは極めて興味深く、おそらく、ラ・サール研究では、初めてであろう。ラ・サールになじみの薄い日本人にとって、江戸時代の出来事と比較すると理解しやすい。ラ・サールの礼儀作法の本は、当時ヨーロッパでは、ベストセラーになったという。それほど、ラ・サールの礼儀作法の理論

は説得力があり、また、格式高かったということである。当然、そこには、深い哲学があつたわけで、石井氏は、江戸時代の碩学、貝原益軒の学理と礼儀理論を紹介し、比較考察されている。それ自体、独自の研究なので、ここでは、立ち入らない。ところで、貝原益軒は孔子の思想を受けている。私は、さらなる根源を求めて孔子そのものに切り込み、ラ・サールの礼儀の哲学と考察し、ラ・サールの哲学をさらに普遍的にしたい。私は既に、著書『無と愛の哲学』第8章 孔子の仁 及び 2本の英語論文「孔子の平和論」「孔子の正義論」(12)において、私における孔子の理解と位置を確立した。この観点から、論じていきたい。

さて、ラ・サールの礼儀とは、神に対する敬意から人間に及ぶ敬意である。それに対して、孔子の礼とは、仁の現れ、外的表現である。そこに、孔子の思想には、神が抜けているという指摘がある。確かに、孔子は迷信的な鬼神は否

定したが、しかし、天は認めている。あるいは、天には畏敬の念を抱いている。そもそも、古代中国では、自然神、祖先神を含め、天地万物を支配する命の流れ、實在として「天」の思想があつた。孔子もこの天を畏敬する。その最も有名な箇所が

「子の曰わく、予れ言うこと無からんと欲す。子貢が曰く、子も如し言わずんば、則ち小子何をか述べん。子の曰わく、天何をか言うや。四時行われ、百物生ず。天何をか言うや。」

「先生がわしはもう何も言うまいと思う。」といわれた。子貢が「先生がもし何も言わなければ、わたくしども門人は何を受け伝えましょう。【どうかお話をしてください。】」という、先生はいわれた、「天は何か言うだろうか。四季はめぐっているし、万物も生長している。天は何か言うだろうか。【何も言わなくても、教えはある。ことばだけを頼りにしてはいけない。】」(『論語』陽貨十九)

ここに、孔子が天を認めるとともに、天は何も言わ無い、「無」を直観している。愛弟子、息子を失った孔子は、落胆の余り「我いうこと無し」と表現できない無を伝えている。伝統的には、無の思想は、老子、荘子のアイデアとされているが、荘子は儒教を学んでいる。ゆえに、孔子の無が荘子に伝えられたと考えることができる。そして、この天、無の直観は、神直観と連続する。

キリスト教において、天地万物を支配する神は、人間を超越したヤハウェの神であるが、これはいまだかつて見たものはいない。つまり人知を超越した、超越者である。故に、中国思想における天と極めて近いといわざるを得ない。少なくとも、人知を超えているので天とともに超越者と呼ぶことができる。そして、この超越者は、人知を超えているわけであるから、言葉をも超えているので、「無」と呼ぶことができる。こう理解することで、キリスト教の神と中国思想の天とがつながる。さら

に、これはイスラム教のアッラーの神や世界の諸宗教の神にも適用されうる。たとえば、「アッラーは余りにも偉大なので、言葉では表現しきれない。言葉を超えているので無である」と。この論理については「キリスト教、仏教、イスラム教の哲学的総合」で論証した(13)。この原理は無と愛の原理と呼ぶが、この立場をとることによって、宗教だけではなく、物理学、生物学、政治学、経済学、他の学問の地平を開くことができた(14)。

ようするに、天、無の考えを導入することによって、時空を超えてラ・サールと孔子は結びつくのである。孔子は天の下にあつて、相手に敬意を払うのである。これが孔子の礼の核心である。ラ・サールは神において相手に敬意を払う。核心において共通性を認めることができる。

孔子における礼であるが、これは現在の日本でも生きている。「規律、礼」この学校での実践は、一番身近なものである。さらに、冠

婚葬祭の儀式である。本来、孔子は孤児として巫祝者の中で生活し、供えごと、葬儀を通して礼樂一般の教養を深めた。下級官吏として宮使いをしているので一層、礼儀は必要となった。故に礼儀作法については、プロといつてよいだろう。礼は形式的なものではなく、仁(人間愛)を現す重要な意味がある。礼についての貴重な箇所は、柔道の規範となっている。

「顔淵、仁を問う。子の曰わく、己れを克めて礼に復るを仁と為す。一日己れを克めて礼に復れば、天下仁に帰す。仁を為すこと己れに由る。而して人に由らんや。顔淵の曰わく、請う、其の目を問わん。子の曰わく、礼に非ざれば視ること勿かれ、礼に非ざれば聴くこと勿かれ、礼に非ざれば言うこと勿かれ、礼に非ざれば動くこと勿かれ。顔淵の曰わく、回、不敏なりと雖ども、請う、其の語を事とせん。」

訳 「顔淵が仁のことをおたずねした。先生はいわれた、「わが身をつ

つしんで礼(の規範)にたちもどるのが仁ということだ。一日でも身をつつしんで礼にたちもどれば、世界じゅうが仁になつくようになる。仁を行なうのは自分しだいだ。どうして人だのみできょうか。「顔淵が」どうかその要点を聞かせ下さい。」といったので、先生はいわれた、「礼にはずれたことは見えず、礼にはずれたことは言わず、礼にはずれたことはしないことだ。」顔淵はいつた、「回はおろかではございますが、このおことばを実行させていただきますましよう。」(「論語顔淵」)

ここでは「己れを克めて礼に復るを仁と為す」に代表されるように、仁と礼の区別はなくなる。それは表れとしての相違であつて根源において同一である。一日でも身を慎んで礼に立ち戻れば、世界中が仁になつく。仁を行うのは自分次第で、どうして人頼みできょうか。仁の実践は主体的なものである。顔淵が要点を聞くと礼にはずれたことは見えず、聞かず、言わず、

行わず。即ち、感覚から言動まですべて礼と一体化することである。自分の感覚、一挙手一投足、言葉のすみずみまで、常に緊張して仁、礼の実践を孔子は説く。その精神は、ラ・サールも同様である。歩き方、話し方、飲食、すべてに具体的に記している。それらは、「黙想集」「修道生活の具体的な指針を集めた「手引き」や「会則」、「キリスト教徒の義務」、「キリスト教徒として守るべき礼儀作法」、「キリスト教学校運営指針」などに記録されている(15)。歩き方については、同僚が町中で手をブラブラさせて歩いていることを注意、姿勢を正した凛々しい歩き方を指導している。町中の視線を彼は、十分に注意していた。姿勢、歩き方は、その人の人生への姿勢、心を表していることを了解していた。服装については、ラ・サール会独自の服装を定めた。町中でも、一般市民にもわかるようにした。良い意味での自己アピールである。もし、こうした、司祭者とは違う服装をしなければ彼らの活動の

独自性が一般者に示すことができない。ラ・サールは常に、自分の学校組織を広めることを指向していたのである。

III. 結論

ラ・サールの礼儀の哲学は現代の教育にも至り、学ぶべき点は多々ある。たとえば、授業開始前の生徒の起立、礼である。これは、現在の日本でも行われている。略礼として、座礼もあるが、やはり起立、礼は、お互い気持ちのよいものである。開始時には「生徒は「お願いします。」「終了時には「ありがとうございます。」「生徒は教師に、常に尊敬の念を持ち、教師は生徒を敬愛する。また、授業中は、静寂が基本。ラ・サールは徹底していたようである。基本的には、教師の声のみが響き、生徒は静かにノートを取り静聴する。質問があれば、挙手をする。私語や無断の移動は、厳禁である。この2点に関しても、現在の日本の教育に共通する。クラス崩壊、学校崩壊の状態は、まず、この2点が

欠けている。意欲のない生徒は、鐘がなつても席につかず、廊下や階段にたむろ。座りこんで雑談にふける。けじめはなく、休み時間にパン、お菓子をのべつくまなく食べ、ゴミを散らかしたまま。席についても隣やうしろの生徒と私語、何回注意を受けてもへらへらわらうだけで、改善の余地なし。授業中のトイレは頻繁で、すべてそれを理由に動きまわる。授業を乱すので、廊下に出すと、他の授業で廊下に出された連中と徒党を組み、学校中走り回り、あぐくの果ては、勝手にサッカーや卓球をやります。始末。もはや学校ではない。しかし、崩壊した学校、学級とはこんなものである。こうした状態では、起立、礼も成立しないし、静寂もありえない。学力低下もはなはだしく、進路（進学、就職）は望むべくもない。彼らは、人生を投げている。退学にして（簡単に）はできないが、町中にだせば、たちまち、ヤクザ、チンピラの餌食になり、身を崩すのは目に見える。故に、学校にとどめている施

設であり、学校とはいえない。犠牲者は、半分近くのまともなまじめな生徒である。授業が頻繁に中断されるからである。こうした現状の学校、クラスもあることを考えるとラ・サールの礼の教育論は、けつして古いでもないし、単なる理論、きれいな事でもない。ラ・サールは、学校、修練院において詳細な規則を定めているが、みな、おおかたは、必要であり、彼自身、無法状態、混沌を経験し、苦しんだからこそ、今尚、生きるのである。こうした、礼儀重視の教育論、哲学は、まさに孔子とつながる。すくなくとも両者は、財産や地位を捨て、人間の教育を目指した。そこには、深く、広い人間愛があり、その力は、現代にまで及ぶ。今日、日本の教育は崩壊の危機にあるといわれているが、こうした状況においても、具体的かつ明確な指針、光として輝いている。

<注>

- (1) 函館ラ・サール高等学校、鹿児島ラ・サール高等学校ともに中学校を併設。
- (2) 児童養護施設ラ・サールホーム
- (3) 石井恭一著 『丘を下っていった人—聖ラ・サールの生涯』 ラ・サール会 ラ・サール学園同窓会 2004年 印刷 鹿児島サンケイ ラ・サールについての資料は、この書に基づいた。石井恭一氏は函館ラ・サール高等学校元副校長 筆者は同校の卒業生（1974年卒業）。
- (4) 前掲書 p、36
- (5) 前掲書 p、39
- (6) 前掲書 p、65
- (7) 前掲書 pp、103～104 1704年1月の出来事
- (8) 前掲書 pp、91～95 苦行の一つに、たとえば哲学者パスカルは、釘のついたベルトを使用していた。睡魔に襲われた時は、釘で腹部をさしたという。
- (9) 中富清和著 『無と愛の哲学』北樹出版 2002年 pp、377～383

- (10) 「丘を下っていった人」 p、156
- (11) 前掲書 p、157 1714年4月1日付
- (12) 'Theory of peace of Confucius'
 "Parerga" No.2/2006 (Poland, University of Finance and Management Warsaw English version)
http://papers.isud.org/files/Nakatomi_Kiyokasu.doc
 International Society for Universal Dialogue (USA, Emporia University)
 'A theory of Justice by Confucius'
 Website:
<http://papers.isud.org/2009/04/-nakatomi-kiyokazu-atheory-of-justice-by-confucius-.html>
 International Society for Universal Dialogue (USA, Emporia University)
- (13) 'A Philosophical Synthesis of Christianity, Buddhism and Islam'
 "Kultura i wartości w czasach przemian" Warszawa-Legnica-Preszow 2010 (Poland, University of Finance and Management Warsaw, French version)
 Discourse-P"(Philosophy, Politics, Power, Public relations) 2005/ V
 (Russian Academy of Science, Russian version)
 Website: <http://discourse-pm.ur.ru/avtor5/nakatomi.php>
 " Synthesis of Science and Higher Education in social-cultural field " articles of science, 2005 (Russia, Krasnodar State University, Russian and English version)
 "Teme" No.2/2008 (Serbia, University of Niš, English and Macedonian version)
 Website: <http://teme.junis.ni.ac.yu/teme2-2008/teme2-2008.htm>
 "Parerga" No.2/2005 (Poland, University of Finance and Management Warsaw English version)
 "Celestia "2012 (Greece, University of Athens, Greek version, scheduled) "
- (14) ' On the synthesis of the theory of relativity and quantum theory '
 "Człowiek i Filozofia"2008 (Poland, University of Finance and Management Warsaw, French version)
 "Discourse-P"(Philosophy, Politics, Power, Public relations) 2007/ VII
 (Russian Academy of Science, Russian version)
 Website: <http://discourse-pm.ur.ru/discours7/kiyokazu.php>
 "Teme" No.3/2007 (Serbia, University of Niš, Macedonian version)
 Website: <http://teme.junis.ni.ac.yu/teme3-2007/teme3-2007.html>
 "CZŁOWIEK W KULTURZE" (Poland, University of Finance and Management Warsaw English version)
 World Congress of Philosophy in Korea, 2008, section: philosophy of natural science English version
 " Celestia "2012 (Greece, University of Athens, Greek version, scheduled)
 ' Evolution and Non-evolution '
 " Revue de Philosophie Française " 2009, (Société franco-japonaise de philosophie, Japanese and French version)
 "Celestia "2012 (Greece, University of Athens, English and French version, scheduled)
 'BUSHIDO of the Enterprise'
 " Management in the new economy " (Germany, Europäische Akademie der Naturwissenschaften Hannover, 2009, English version)
 " ZARZĄDZANIE W NOWEJ GOSPODARCE" 2009 (Poland, University of Finance and Management Warsaw ,Polish version,)
- (15) 「丘を下っていった人」 p、190

本稿は、筆者の長女中富百合恵により英語に訳され[校正アンドレ・ラベル氏 (カナダ)、クリスチャン・シェノー博士 (フランス)]、ポーランド、ウクライナ、スロバキアの国際学会の論文集『社会と教育』(Społeczeństwo i Edukacja,Nr2/2009)に掲載された。また、バルトシュ・タルラロ氏 (ポーランド)によりポーランド語にも訳され刊行待ちである。

同窓生寄稿



フロアボール(室内ホッケー)

普及活動に没頭

梅田 弘胤

34期

簡単に自己紹介。私は北大医学部を卒業(78期)、現在は生まれ故郷の遠軽町(北海道紋別郡)で田舎医者をやっております。99床のベッドを持つ遠軽共立病院が職場であり、父は職場の先輩であります。

今年で34歳になりましたが、30歳の時に「フロアボール」というスポーツに出会いました・・・それから、フロアボールに狂っています・・・(妻から見れば私は狂っているとのことです・・・)。

フロアボールとは直径72ミリのプラスチックボールを使う室内ホッケーで、キーパーを含めて6対6でゴールを競います。キーパー以

外は防具を着けません。体当たり禁止なので、非常に安全です。普通の上靴でプレーするので、スケートを滑れなくてもいいのです。専用のスティックはカーボン製です。オフサイドルールがないので初心者でも直ぐにゲームを楽しめます。私は息子が幼稚園の頃から一緒にやっていますが、小学1年生になつてからは、大人のゲームに混じっています。

残念ながらフロアボールは日本国内ではマイナー中のマイナー、おそらく認知度はセパタクロー以下ではないでしょうか!北海道内で活動する団体は、なんと私が創ったチームと、釧路公立大学のサークルだけ!やっている人がいないなら普及をするか・・・と現在に至っております。

現在力を入れているのは札幌と旭川の普及活動です。特に札幌もいわゆる地区センターでは、フロアボールサークルの創設、東海大学とのタイアップを実現させるところまで漕ぎつけました。

どこまでやるか・・・私にもわか

りません。「生涯スポーツ」といえば「フロアボール」というのが当たり前になるまで、頑張るつもりであります。函館ラ・サール中学・高校にもフロアボールを伝えたいですね!



函館ラ・サール学園同窓会ホームページ

同窓会HPは2009年3月にリニューアル以来、登録人数900名、アクセス数115,000件の皆様にご覧いただいております。サイトでは同窓会の活動や同期会等、諸行事の紹介をはじめ、同窓会誌「日吉の丘」のバックナンバー、同窓生の著作リスト等もご覧いただけます。

また、住所変更などの情報もお受けしております。今後はより充実したHPとなりますよう、皆様からのご投稿、同期会等のイベント情報を広く募集いたします。

広報担当理事 島本 肇

<http://www.h-lasalle.com/>



平成23年度 函館ラ・サール学園 同窓会総会

2011.11.5
於・ホテル函館ロイヤル

2011年11月5日、ホテル函館ロイヤルにて同窓会総会が開催されました。

午後3時からの理事会での協議を経て、5時から総会が開かれ、物故者への黙祷の後、齊藤会長、フェルミン校長、ラベル理事長の挨拶、事業報告、会計報告、監査報告が行われ、それぞれ承認されました。

続いて臨時総会が開かれ、同窓会の組織改編が提案され、同窓会の将来を見据えた体制、会則、新役員が承認されました。これを受けて新たに函館支部が設立され会則・役員が発表されました。

総会終了の後、世界同窓会の報告会が行われ、写真が投影される中、伊藤事務局長が解説と報告を行いました。

懇親会では来日55周年を迎えたアンドレ・ラベル理事長へ感謝と尊敬を込めて花束と記念品が贈

られ、齊藤会長からこれまでのラベル理事長の足跡が語られ、参加者に大きな感銘を与えました。今回の懇親会は同窓生に加えて、来賓として現旧職員・PTA役員あわせて104名が参加して、例年にもまして華やかな会と

なり、最後はフルバンドの演奏をバックに宮崎先生の指揮で校歌、学生歌を斉唱し閉会となりました。本年はX2期が企画・運営を担当しますので多くの皆様のご参加をお願いいたします。



同窓会の歴史



思い出の44年

函館ラ・サール学園同窓会顧問

菅野剛造

1期

あれからもう44年が経つのかと思えば、些か感慨深い。1968年に同期の有志とともに立ち上げた同窓会が、44年経って、今や世界同窓会の仲間入りを果たすまでに成長したからだ。既に高齢者の仲間入りをして、記憶力も乏しくなってしまったが、この同窓会発足当時のことだけは鮮明に思い出せることが出来る。いや、昔のことを思い出せることこそ、高齢者の特権？か。

その年の春、私は、家業を継ぐため学生時代を過ごした東京から帰函した。函館市内所在の大学校舎が一部崩壊した十勝沖地震発生の日だ。既に函館には同

期の仲間も20人ほどいて、時を見つけては2人、3人と集まって歓談していたし、2期生もボチボチ帰函して、旧交を温めていた。そんな或る日、私たちのともに、母校から正式に同窓会組織結成の要請があつた。

「正式に」と言うのは、実は、その3年ほど前の夏、私たちが未だ学生だった時に、函館市内の某生保会社の講堂で、「函館ラ・サール高校同窓会」と銘打った会が開催されていたからだ。どのような経緯で開催されたのか不明だが、当時、同窓生と言つても、精々、1〜3回生の総勢4〜5百人程度、しかも、殆どの消息が把握可能であつたのに、一切、同窓生に諮らず、いきなりの開催であつたことから推測すると、それは、母校主導によるものであつたと思えない。会長も既に私たちと同期のK君と決まっていた。つまり、その時の同窓会は「正式なもの」ではなかつたということになる。

その後、そうした同窓会は1

度も開かれずにいたところに、学校よりの正式要請であつた。だが、みんな大学を了えたばかり、「同窓会」という組織への知識にも乏しい私たちは、その要請に正直戸惑つたのを思い出す。

今ならば、「自我の確立、社会的視野の拡大など人間としての成長過程において最も重要な青春期を過ごした母校に限りない愛着を覚え、その愛すべき母校の発展を希求するのならば、同窓会を組織し活動することこそ卒業生がなし得る最善の道ではないか」とする意見に異を唱えるものは無く、全員一致で設立を決めた」と格好良く言える。

だが、その頃の私たちは、社会人と言つても、まだ1人前の認知すらされない22〜23歳のヒヨコ子、漠然と「母校のため」と思つたのは事実だが、とてもそんな大それた理念など頭に浮かんだわけではない。これで、呑む機会が増えるし、付き合いの範囲も広がるという、そんな単純な思いから、後の苦労も考えずに要請を受け

入れたように記憶している。事実、会合の場所は、何故か幹事長役を押し付けられてしまった私の、両親同居の自宅、夕食後に集まつて1時間ほどしたら麻雀と相場が決まっていたし、それはそれで楽しかった。

それでも、やることはやった。まず、役員人事では、会長に1期生同期の中澤慎二君（故人）を選出した。ただし、暫定的とはいえ、過去に1度だけながら同窓会会長を務めた前述K君の功績を讃えて、同君を初代会長としたため、自動的に中澤君は2代目会長ということになった。そして、その年の夏8月、私たちが「正式」に立ち上げた同窓会の記念すべき第1回総会が開催されたのである。参加者は少なかったが、隆盛を続ける現在の同窓会の源流がこの時に溯ると思えば、設立に携わった者の1人として感慨一入である。

そのうち、2期生、3期生の帰函者も増えて、協力してくれるようになり、活動も活発化した。頼

もしい後輩たちだった。4人の1期生が会長を担当した後、1980年に2期生に、1985年に3期生に、1995年に4期生に、そして2003年には5期生の現会長にバトンタッチし、若返りを図りながら現在に至る。

この間、母校の発展とともに同窓会会員も逐年増加の一途を辿り、同窓会本来の目的である会員の親睦向上に大きな役割を果たせるように成長して行った。発足当時の半分遊びの雰囲気は微塵もなく、その果たすべき役割の大きさを胸に抱いて、みんな真摯に意見を述べ活動が続けた。

そうした中、同窓会活動に携わる者が最もここをくだいたのは、「会員名簿の作成」であった。第1号は1971年だった。1年間の準備期間を設けたが、何せみんな初めてのことで悪戦苦闘、その出来栄えたるや、とても同窓生が満足出来るものではなく、それなりに不満の声も戴いた。それでも完成した時、みんな手を取り合って喜んだ。その時の

感激はとても文字では書き表せない。

大体5年間隔で発行を続けた名簿は最新号で8号目を数えたが、そうした名簿作成の成果と言えるものの代表が、1991年の札幌支部設立である。むろん、その設立も母校の先生方の尽力に負うところ大ではあるが、同窓生の出身地が、函館のみならず、広く道内、全国各地であるという「名門私学」ならではの「特殊事情」を考慮すれば、支部設立こそ急務であったので、その意義は極めて大きかった。札幌支部の開設により、同窓会活動は函館という小さな殻を抜け出し、全道規模に、その輪を広げたのである。ほぼ同じ頃、東京支部が設立され、その後、関西支部、東北支部が設立されて、活動は全国に及ぶことになった。

今、同窓会は新しい組織に生まれ変わり、函館にも本部の下に函館支部が誕生した。世界的にも素晴らしい組織となったことは喜ばしい。新しい会則で示さ

れた各種事業などを見るにつけ、44年も昔の幼さを思い出し苦笑を禁じ得ないが、それでも、当時のドタバタが懐かしく、知らず知らずのうちに頬が緩む。

そうそう、こうした執筆の機会はそうあるものでないから、ついでに、同窓会裏面史とでも言うべき事件を2つ記すことにする。1つは、会費盗難事件。2代目中学会長の時代と記憶するが、母校の金庫に保管してあった同窓会費がソックリ盗まれたのだ。結局、犯人は不明のまま、同窓会役員が損害を負担したのであった。2は、名簿作製会社の倒産。ある時、母校に係る信頼する人物の紹介で作成を依頼した本州所在の企業が倒産し、その処理に困惑したことだ。発行の日時が迫る中での緊急事態に右往左往ながら、お互い助け合って、間に合わせた。いずれも、当時の同窓会役員にとって衝撃の事件であり、2度と遭遇したくない出来事ではあるが、それでも、今となれば懐かしい思い出として蘇る

のは、それだけ年齢を重ねたせいだ。

母校は2年前に創立50周年を迎えた。我が同窓会も6年後に設立50周年を迎える。その時の感激に浸れる夢を実現させるために、節酒に努め、健康維持を図りたいと思っている。母校とともに歩む同窓会の永遠の活動を願いながら、思い出の一端を記し筆を擱く。



創立当時の校舎

同窓会組織改編と会則の改定



函館ラ・サール学園同窓会 事務局 局長
6期

伊藤 恒敏

1. きつかけと約束
2. トークセッション
3. 提言
4. あり方委員会と新同窓会の概念・構想およびロードマップ
5. 東日本大震災
6. 改訂版ロードマップ
7. 2011年7月の支部長会・理事会
8. 新同窓会のスキームと理事会と評議員会
9. 会則、細則、内規、申し合わせの制定
10. 反論など
11. 新体制発足

1. きつかけと約束

2008年8月、函館での同窓会総会直前の支部長会・理事会。雰囲気尋常でない。意気軒昂な大支部と、その発言に驚くわれわれ東北支部。そして、その意気軒昂な大支部が次に何を言い出すのか、しきりに訝る本部。おかしい。「親睦」というにはほど遠い。

それにしても支部長会・理事会の資料も貧困に感じた。50周年式典が迫っている、というの分かるが、支部長会・理事会を成り立たせている会則もあまり周知されていない。

2009年4月、東京での支部長などを招集しての、50周年記念式典に

向けた会議。遅遅として進まない準備。集まらない寄附。イライラがみんなに伝染している。そればかりではない。前年からのギクシャクを引きずっている。何か噛みあっていない。それぞれが言いたいことを言っていると感じた。

2010年2月の函館での、押し迫っている50周年式典の実行委員会。支部長会を兼ねている。大支部の支部長と実行委員長がほとんど喧嘩口調となる。おろおろする人もいれば、目を下に向けて黙っている人もいた。齊藤会長は困り果てていた。実行委員会の足りないところを指摘して、こうすべきだと進言するなら分かるが、喧嘩腰で攻撃してどうなるものでもない。見るに堪えず、私はこう言った。「実行委員会を罵るようなことは止めるべきだ。ずっと見てきたけれども、同窓会運営そのものも問題が多々あるように思う。この際、あり方などを思い切って検討してみてもどうか。」齊藤会長が「2010年10月の50周年記念式典が終わった時点であり方委員会を立ち上げ、検討することを約束します。必ず、そうします。」

星野裕実行委員長がその後、私に50周年記念行事で予定している「トークセッション(私のイメージではパネルディスカッション)」でぜひ、同窓会運営のあり方をオーガナイズしてくれ、と要請してきた。これも何かの因縁、と観念し、オーガナイザーと座長を引き受けた。

2. トークセッション

トークセッションの座長をどうせ引き受けるのだつたら、徹底してこのセッションを準備して、このセッションでまとめたものがその後の同窓会運営の方向性を明らかに指し示すものとなるようにしたい。座長として方針を決めた。パネリストは当然だが、函館も含め、各支部から参加してもらおう。札幌(宮永雅己札幌支部長…7期)、東北(伊藤恒敏東北支部事務局長…6期)、東京(古旗達夫東京支部副会長…4期)、西日本(薮越英昭西日本支部長)の各支部から二人ずつ、に函館から菅野剛造氏(元同窓会事務局局長…1期)、渡辺良三氏(前同窓会長…4期)、佐藤友康氏(同窓会副会長…12

期「役職はすべて当時」の7人に依頼した。

個人的には、ここまでどれだけ批判を浴びるような稚拙な運営だったとしてもとにかく、「同窓会組織を立ち上げて綿々と続けてきた行為そのものが賞賛に値するものである、同時に今ある同窓会の基盤となつている」という基本認識はパネリストにもトークセッションの会場に参加する人にも共通に持つてもらいたいと考え、同窓会本体の歴史に加え、各支部の歴史をそれぞれ執筆してもらった。それらに加え、各支部の会則、同窓会員の各都道府県の分布数など、全体で49ページにもなる資料を準備し、当日のトークセッションに臨んだ。

2010年10月23日、函館国際ホテル2階の一番奥の部屋に用意された「トークセッションE」の部屋はそれほど大きくなかった。50人も入れば一杯になる程度。こんなもんかとやや自棄的になりながらホテルに送付してあった資料の荷をほどこし、自分の手で参加者の椅子に置き、パネリスト7人の机の上に置いて、それほど多くないと予想された入場者を待った。

14時。パネリストが揃い、会場係からの合図を待ってトークセッションが始まった。満席だ。

私が資料として用意したもののうち、「議論のポイント整理」として掲げた8つの項目は次のとおりだった。

- ① 議論に入る前に…立ち位置と基本姿勢・同窓会の歴史・現状・同窓会のアイデンティティ
- ② 現状での問題点…同窓会の目的、事業、運営、学園との関係、何を目指すのか
- ③ 同窓会の事業のあり方
- ④ 同窓会と学園の関係のあるべき姿
- ⑤ 財政のこと…事業と財政のバランス、同窓会費のあり方
- ⑥ 理想的な同窓会運営のイメージ
- ⑦ 改革の手順

⑧最後に…まとめと展望

パネリストにそれぞれの歴史を話してもらい、次いで同窓会の本来の目的や、学園との関係などが話し合われ、これからの同窓会のあり方や、運営のイメージ、財政と同窓会費のことなどかなり多岐にわたり議論となった。詳細は省かざるを得ないが、このトークセッションで最も私が驚いたのは、パネリストの真剣さはもとより、用意された椅子席をほとんど埋め尽くした参加者の熱気だった。フロアーからの熱心な真剣な発言が相次ぎ、「同窓会運営のあり方」というセッションタイトルにどれだけ参加者が期待していたかが如実に表れた形となった。同窓会の「改革」は待ったなしだということを、パネリスト7人と参加者約50人の小さなセッションではあったが、その切迫感を肌で感じるには十分だった。

用意し整理した議論点についてすべて議論できずに、時間切れでセッションを終了しなければならなかったが、私は話し合われたこと、おおよそのコンセンサスを得られたことを同窓会本体に「提言」としてまとめることを約束し、セッションを閉じた。

3. 提言

私は早速、次のような「提言」をまとめ、2010年10月25日付で齊藤会長に提出した。

トークセッションEの議論を踏まえた提言

1. 同窓会の理念、目的

これからの同窓会活動のためには明確な理念、目的を会員全員で共有する必要がある。

その理念・目的は次の2項目が必須となると考えられる。

1. 1. 同窓会会員相互の親睦

1. 2. 函館ラ・サール学園の健全な発展への協力・支援・貢献

なお、学園への協力・支援・貢献のためには同窓会の代表を学園の理事の一人として任命して貰うように交渉すべきだとする意見も出され、トークセッションE全体のコンセンサスとした。

2. 同窓会本部の体制

全国に各支部が自発的に形成されてきており、本部も積極的にそれらを承認してきた経緯を踏まえ、今後の本部としては、各支部に分散している会員の意思をどのように同窓会全体の活動に反映させていくということが肝要な問題となる。

これからの同窓会本部の体制としては、トークセッションEの議論を経て、次のような提言となった。

2. 1. 新たに全国横断的な同窓会本部を形成する

2. 2. 本部事務局(新しい本部のホームグラウンド)は函館とする

2. 3. 役員構成などは今後、開催される「あり方委員会」で詳細に検討してほしい

2. 4. 各支部や全国に分散する会員状況なども考慮して役員数なども割り振るべきである

2. 5. (懇親会開催などの)必要があれば、函館支部も作るべきである

3. 最高意思決定機関(総会、理事会、役員会)

新たに全国横断的な同窓会本部を形成するのであれば、会員数から考えて「総会」を同窓会の最高意思決定機関とするにはその出席者数などの成立要件から考えて、現実的に無理があるので、総会に代わる理事会や役員会(定義は今後のあり方委員会に委ねる)を同窓会の最高意思決定機関とし、理事会・役員会で決定した事項を迅速に会員に周知するという方式にすべきである。

3. 1. 「総会」を最高意思決定機関にするには現実的な制約が大きい

3. 2. 理事会・役員会を最高意思決定機関とすべきである

3. 3. 最高意思決定機関で決議したことは迅速に会員に周知することとする

4. 会費の考え方、会務と財政

以下の二つの理由から、トークセッションEでは卒業時の永年会費以外に卒業、一定の期間を経た会員から新たに会費を徴収すべきだという結論になった。

金額や卒業何年以降から会費を徴収するか、また支部会費との整合性、仕分けなどについては今後の「あり方委員会」に議論を委ねる。

①全国横断的な同窓会本部体制とするためには、現在、卒業生総数が13、000人を越えている現状、今後の会務の仕事量(会員の消息の掌握)などを考慮すると、専従を置いて会務を処理する必要性に迫られる。専従を雇用するために、現在の会費収入(卒業時に納入する永年会費)では不足を生じることが明らかなので、新たな収入を考えなければならない。専従に割り振るべき会務については今後のあり方委員会に検討を委ねる。

②今後、少子化などの状況もあり学園の卒業生数は200人前後から増加する傾向は考えにくく、これまでの会費収入の増加は見込めない。一方で永年会費を保護者に納めて貰った会員がその後、自ら会費を納めることなく後輩が納入した会費に同窓会の活動費のすべてを依存するというのは道義的にも受け入れがたい状況ではないか。

5. 同窓会と函館ラ・サール学園との関係のあり方

トークセッションEでは次のようなことが了解された。

5. 1. 同窓会と学園とは基本的には対等の関係であり、同窓会は学園の従属団体ではない

5. 2. 学園側から発せられる文書はほとんどが、理事長・校長名の書類だが、詳細について問い合わせても詳細が明らかになることがないのが通常なので、今後は通知内容に責任を持って回答・説明が可能な学園側の責任者(担当者)の明示が必要

5. 3. 同窓会から学園・学園から同窓会への連絡は、あらゆる不要な「付度」を排除するため、すべて文書によるものとすべき…同窓会は会長と事務局長が受信窓口になるべき・学園側も日本人責任者(担当者)が受信窓口になるべき

5. 4. 同窓会事務局として学園に「室を借りるよう、同窓会は学園に交渉すべき

文責…トークセッションEモデレータ 伊藤恒敏

2010.10.25

提言にあるように、これからの同窓会は総会を開催して、同窓生全員の合意を取り付けるのは現実には無理である、同窓会の意思決定は、理事会・役員会を最高意思決定機関とし、その決定プロセスを公平かつ公正なものとし、決議されたことは早期に会員に周知することとする、とした。新たな同窓会は全国横断的な組織とし、函館も支部の一つだという認識である。会費も、現行の「永年会費」だけでは近い将来不足が予測され、永年会費に加えて新たに徴収すべきだ、とされた。トークセッション参加者からの強い意見がベースとなった。学園とも組織として対等の関係を築くべきで、学園との間で連絡方法をきちんと確立し、学園内に同窓会の事務局を置いてもらうよう交渉すべきだと提言された。

齊藤会長はこの年の2月の約束通り、この提言を受ける形でこの年の11月27日に支部長会・理事会を招集した。

トークセッションで座長を務め、「提言」をまとめた伊藤が議長を引き受け、「提言」内容に沿って、議論がなされた。この支部長会・理事会の議事録も伊藤が作成し、下記の通り同窓会に報告された。

函館ラ・サール学園同窓会理事会(支部長会)議事録

出席者…フェルミン校長、菅野顧問、渡辺前会長、齊藤会長、佐藤副会長、島本副会長、星野50周年記念実行委員会委員長、清水事務局長、宮永札幌支部長、大山札幌支部役員、伊藤東北支部事務局長(トークセッションEモデレータ)、植木東京支部長、古旗東京支部副支部長

I. 齊藤会長挨拶の後、今回の理事会の趣旨(「トークセッションEの議論を踏まえた提言」を同窓会が受理できるかどうか)の説明の後、議長をトークセッションEのモデレータである伊藤が務めるべきだということで、伊藤がこの後の審議の議長となる。

II. 「トークセッションEの議論を踏まえた提言」に沿って逐条的に議論を深めることとする。

「トークセッションEの議論を踏まえた提言」

1. 同窓会の理念、目的

これからの同窓会活動のためには明確な理念、目的を会員全員で共有する必要がある。

その理念・目的は次の2項目が必須となると考えられる。

1. 1. 同窓会会員相互の親睦

1. 2. 函館ラ・サール学園の健全な発展への協力・支援・貢献

なお、学園への協力・支援・貢献のためには同窓会の代表を学園の理事の一人として任命して貰うように交渉すべきだとする意見も出され、トークセッションE全体のコンセンサスとした。

【議論】

同窓会からは学園の意向を聞いたことがない、学園はもつと同窓会を利用すべきと言う意見。

一方、学園からは今回の寄附をした同窓生が少ないことから分かるように、また同窓会の形が見えていなかった、今まで同窓会のこととがそれほど分からなかった。

慶応大学や市内の他の高校などの同窓会の実態も報告された。

特に上記「1. 2.」が同窓会の一方的な思いこみでないことを確認できる機会(学園と同窓会の定期的な意見交換の場)の設置が要望された。

【結論】

「1. 同窓会の理念、目的」は大筋で合意された。

ただし、同窓会の代表を理事として任命してもらうようにすべきだということに関しては、今後の成り行きを見て、審議すべきこととした。

2. 同窓会本部の体制

全国に各支部が自発的に形成されてきており、本部も積極的にそれらを承認してきた経緯を踏まえ、今後の本部としては、各支部に分散している会員の意思をどのように同窓会全体の活動に反映させていくかということが肝要な問題となる。

これからの同窓会本部の体制としては、トークセッションEの議論を経て、次のような提言となった。

2. 1. 新たに全国横断的な同窓会本部を形成する
2. 2. 本部事務局(新しい本部のホームグラウンド)は函館とする
2. 3. 役員構成などは今後、開催される「あり方委員会」で詳細に検討してほしい
2. 4. 各支部や全国に分散する会員状況なども考慮して役員数なども割り振るべきである
2. 5. (懇親会開催などの)必要があれば、函館支部も作るべきである

〔議論〕

種々議論があつたが、新たな全国横断的な同窓会本部を形成することについてはほぼ一致した。

函館ラ・サール学園同窓会は同窓生同士の、あるいは本部支部間の権力闘争の場ではないことを確認したいという議論もあり、権力闘争は否定されるべきだと言ふ意見で合致した。

〔結論〕

〔2. 同窓会本部の体制〕は大筋で合意された。

ただし、〔2. 3.〕の提言を具体化するためには「あり方委員会」を同窓会本部に早急に形成すべき。

〔2. 4.〕は今後の「あり方委員会」作業を詰め、理事会(支部長会)で議論を通じて承認する。

支部総会参加者数で役員数を考えるべきだと言ふ意見もあつたが、東京支部総会での会員の出席数は首都圏の交通事情によるところが大きく、東北支部などの場合のように交通機関も発達していない地域での支部総会へ参加しに

くい状況も十分考慮する必要がある。今後「あり方委員会」などで詰める。

〔2. 5.〕の函館支部結成に関しては函館の会員の意思に委ねることとするが、函館支部を形成した方が望ましい。

3. 最高意思決定機関(総会、理事会、役員会)

新たに全国横断的な同窓会本部を形成するのであれば、会員数から考えて「総会」を同窓会の最高意思決定機関とするにはその出席者数などの成立要件から考えて、現実的に無理があるので、総会に代わる理事会や役員会(定義は今後のあり方委員会に委ねる)を同窓会の最高意思決定機関とし、理事会・役員会で決定した事項を迅速に会員に周知するという方式にすべきである。

3. 1. 「総会」を最高意思決定機関にするには現実的な制約が大きい
3. 2. 理事会・役員会を最高意思決定機関とすべきである
3. 3. 最高意思決定機関で決議したことは迅速に会員に周知することとする

〔議論〕

会員総数1万3千人、消息判明者約7千人の会で総会開催は非現実的だとの議論があつた。

〔結論〕

〔3. 最高意思決定機関〕は大筋で合意された。

〔3. 1.〕の新たな本部の「総会」の開催は不可能である。今後は、「総会」は原則として「支部」の総会がこれまでの総会の機能を果たす、ということに一致。

〔3. 2.〕の役員会については支部からの意見汲み上げのプロセスを考える前提で承認した。

〔3. 3.〕も反対意見なく承認。

4. 会費の考え方、会務と財政

以下の二つの理由から、トークセッションEでは卒業時の永年会費以外に卒業後一定の期間を経た会員から新たに会費を徴収すべきだという結論になった。

金額や卒業何年以降から会費を徴収するか、また支部会費との整合性、仕分けなどについては今後の「あり方委員会」に議論を委ねる。

①全国横断的な同窓会本部体制とするためには、現在、卒業生総数が13、000人を越えている現状、今後の会務の仕量（会員の消息の掌握）などを考慮すると、専従を置いて会務を処理する必要性に迫られる。専従を雇用するためには、現在の会費収入（卒業時に納入する永年会費）では不足を生じることが明らかなので、新たな収入を考えなければならぬ。専従に割り振るべき会務については今後のあり方委員会に検討を委ねる。

②今後、少子化などの状況もあり学園の卒業生数は2000人前後から増加する傾向は考えにくく、これまでの会費収入の増加は見込めない。一方で永年会費を保護者に納めて貰った会員がその後、自ら会費を納めることなく後輩が納入した会費に同窓会の活動費のすべてを依存するというのは道義的にも受け入れがたい状況ではないか。

〔議論〕

会員総数1万3千人、消息判明者約7千人、この会員消息掌握率は今後高めなければならぬ。

今後、会員に一定年数後に会費を納入することを依頼するためには払った人と払わない人の差別化を図るべきだという意見と、会員の権利もあるので、差別化は難しいのではないか、という意見もあった。

会員消息掌握率を高める目的でも、会員名簿の更新とか、インターネットを紹介したアクセスなどをいかに保証するかなど、検討すべきだという主張もあった。

専従を雇用するというのも財政的な保証があつて始まることであつて、会費徴収を始めてからその状況を見て判断することも必要だ、という発言もあった。

〔結論〕

「4. 会費の考え方、会務と財政」は大筋で合意された。

会費は新たに徴収する方向とする。

専従も雇用する方向とする。但し、財政状況を見て判断する。会務などは支部組織の事務代行なども考えるべきだとされた。

5. 同窓会と函館ラ・サール学園との関係のあり方

トークセッションEでは次のようなことが了解された。

5. 1. 同窓会と学園とは基本的には対等の関係であり、同窓会は学園の

従属団体ではない

5. 2. 学園側から発せられる文書はほとんどが、理事長・校長名の書類だが、詳細について問い合わせても詳細が明らかになることがないので、通常なので、今後は通知内容に責任を持つて回答・説明が可能な学園側の責任者（担当者）の明示が必要

5. 3. 同窓会から学園、学園から同窓会への連絡は、あらゆる必要な「付度」を排除するため、すべて文書によるものとすべき。同窓会は会長と事務局長が受信窓口になるべき。学園側も日本人責任者（担当者）が受信窓口になるべき

5. 4. 同窓会事務局として学園に二室を借りるよう、同窓会は学園に交渉すべき

〔議論〕

この項目の内容はほとんど問題なしとされた。

〔結論〕

「5. 同窓会と函館ラ・サール学園との関係のあり方」は大筋で合意された。

「5. 1.」の記述は「…対等の関係である」と表現を結ぶべきだ、後半の従属団体は削除すべきだ、とされた。

「5. 2.」および「5. 3.」についてはもつともなことで認識された。

「5. 4.」の同窓会事務局として学園の一室を借りる件については旧校舎の職員室（会議室…母の会でも使用している）を同窓会のために残しています、という学園側の発言もあり、今後、借用について協議の上、結めることにした。

Ⅲ. 「あり方委員会」の人選については齊藤会長に一任することとした。

議事録文責…伊藤恒敏

2月に約束された「あり方委員会」はこれで正式に立ち上がることになった。一部の支部役員からあり方委員会の委員の人選は会長一任をしていない、などと明らかな事実誤認に基づくクレームが出されたが、議事録

通り、齊藤会長が委員の人選を行い、第1回のあり方委員会が2011年1月30日に開催されることが決まった。齊藤会長が選んだあり方委員会委員は次のとおりである。

齊藤裕志会長、佐藤友康副会長、川口孝徳氏、菅野剛造氏、伊藤恒敏、品田義雄氏、仲屋裕樹氏

4. あり方委員会と新同窓会の概念・構想およびロードマップ

第1回のあり方委員会が予定通り招集された。大雪の降った直後で、真冬の函館は私には久しぶりの体験だった。下記の議事録にあるように、成り行き上、委員の互選により私があり方委員会の委員長になった。トークセッション以来の事案なので、その提言を踏まえてあり方委員会に対しては、腹案を第1回のあり方委員会のために準備していた。それを「新同窓会の概念・構想」およびポンチ絵で説明した「スキーム」、および新体制発足までのロードマップ（工程表）を提案し、概念・構想は今後の議論の問題提起とし、スキームは少しの訂正の上、承認。ロードマップも諒とした。

新同窓会の概念・構想

トークセッションEの「提言」+11/27理事会議事録

1. 新同窓会の概念

同窓会の目的を共有

同窓会会員相互の親睦

函館ラ・サール学園の健全な発展への協力・支援・貢献

組織体として学園と対等であるという立場を貫く

事業計画を立てる

全国の同窓会の本部という考え方

全国の支部をまとめる形

同窓会本部では総会を最高議決機関として開催しない
評議員会と理事会をおき組織としての意思決定と業務の執行に当
たる

総会は各支部において個別に開催するものとする

同窓会本部の意思決定、業務執行

理事が執行役員

評議員が本部活動（理事会提案予算決算事業計画事業報告など）
の審議

2. 新たに会費を徴収する

今後の作業の中で詰めなければならない点

卒業後、何年目からの徴収にするのか

本部会費と支部会費の案分

徴収方法など

3. 専従の事務職員をおく

学園側が同窓会のために旧校舎内に二室を提供

資料の収集、事務作業の効率化、集中化

各支部の事務（名簿管理、通信の配送）作業なども専従職員に

当たらせる

専従職員は学園側が提供した「同窓会室（仮）」で種々作業に当たる

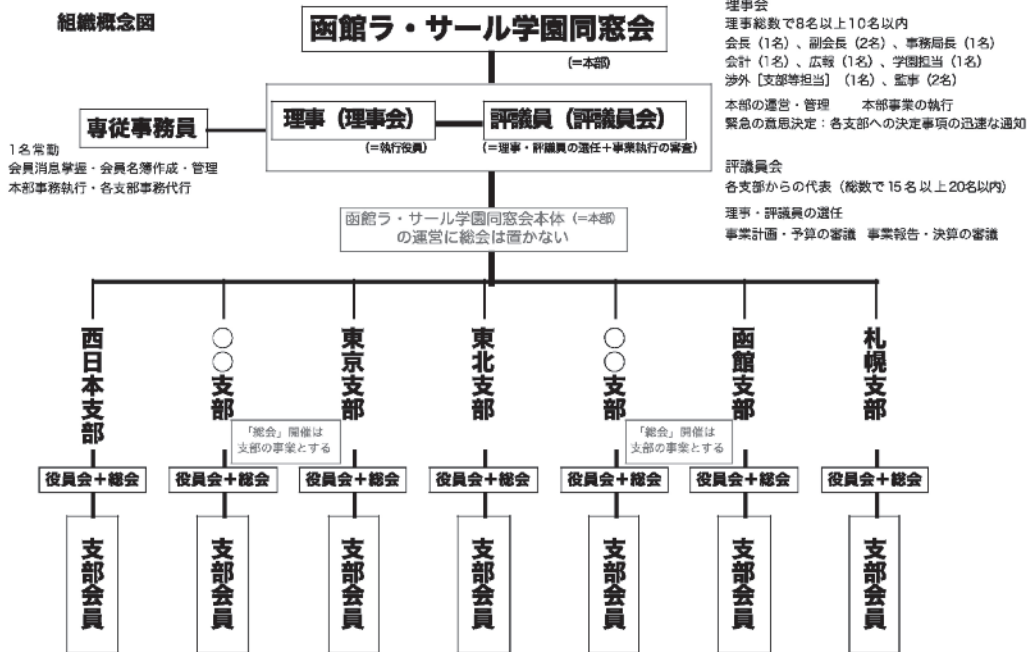
予算との関係など今後、詰める

4. 組織体として対等の関係を築くために

学園側の連絡窓口、同窓会側の連絡窓口を決めておく

必要な付度、誤解を生まないために、すべて文書による連絡とする

「新」函館ラ・サール学園同窓会
組織概念図



函館ラ・サール学園同窓会運営改革作業ロードマップ

作成・文責…伊藤恒敏

1. 第1回あり方委員会開催…委員の紹介と委員長の互選 2011.1.30
2. 「新同窓会会則」決定までのプロセスの決定…ロードマップの決定 2011.1.30
2. 新しい同窓会の構想（「改革構想」＝ポンチ絵も）の決定 2011.1.30
3. 「新同窓会会則」決定までのプロセス、ロードマップ、「改革構想」およびポンチ絵についてメールでの審議のため、全理事に送信 2011.2.1
4. 改革プロセス、ロードマップ、改革構想およびポンチ絵について、各支部の意見の集約 2011.2.28
5. 第2回あり方委員会開催…改革構想とポンチ絵に対する各支部の意見のフィードバック作業 2011.3.19
6. 支部長会の開催…改革構想本決定 2011.4.23
7. 改革構想の要素分割 2011.5.14
8. 「要素」の「新同窓会会則」への落とし込み 2011.5.21
9. 「新同窓会会則」の構想…「新同窓会会則」の条文（案）作成作業 2011.6.4
10. 第3回あり方委員会開催「新同窓会会則」の条文（案）完成 2011.6.25
11. 「新同窓会会則」（案）についてメールでの審議のため、全理事に送信 2011.7.2
12. 「新同窓会会則」（案）についての各支部からの意見の集約 2011.7.30
13. 「新同窓会会則」（案）に対する各支部の意見のフィードバック作業 2011.8.6
14. 第4回あり方委員会開催「新同窓会会則」の条文の「最終案」完成 2011.8.19

15. 支部長会の開催…「新同窓会会則」本決定(新役員人事も決定)

2011.8.20

16. 「新同窓会」正式発足

2011.8.20

(上記の日程は諸般の事情により変更があり得ることをご了承下さい)

第1回あり方委員会 議事録

2011.1.30(日曜日)午前10時から午前11時30分まで

函館ラ・サール学園

修道院会議室

出席者…齊藤裕志、佐藤友康、川口孝徳、菅野剛造、伊藤恒敏雄、仲屋裕樹

欠席者…品田義

1. あり方委員会の開始

齊藤会長が簡単に挨拶をした。会長は特に、このあり方委員会は2010年11月27日の理事会で承認されたものであり、2010年11月27日の理事会で承認された枠組に沿って、同窓会が特に権力闘争の場にならないよう、新たな同窓会のあり方に向けて、具体的な作業に入りたい、と述べた。引き続き、委員の紹介をし、委員長の互選を行った。伊藤恒敏東北支部事務局長が互選された。

2. 議事

伊藤委員長の進行のもと、議事に入る。これまでの経緯(「提言」、「議事録」)を確認し、あり方委員会の今後の議論の方向、予定(ロードマップ;資料)などを議論した。「新」同窓会の概念(スキーム)について素案をもとに議論し、あり方委員会としての今後の枠組となる「概念」と「スキーム」(資料2および資料3)を決定した。今後の論点整理などをロードマップに沿って議論した。

第1回あり方委員会の議事録を早急に作成し、各委員が書面による審議・承認の後、全理事にメールを通じて送付することも確認された。

3. 次回あり方委員会開催予定

次回のあり方委員会をロードマップに従う形で2011年3月19日の開催予定とした。

5. 東日本大震災

第1回あり方委員会の議事録にあるように第2回委員会を2011年3月19日に設定し、新同窓会の概念・構想とそのスキームを各支部長宛に送付し、各支部からの意見集約を開始した。私はすべて事前に3月18日のための列車のチケットなど手配していたが、ご存知のような大災害が2011年3月11日に起こった。大袈裟に言えば、仙台にいて地震当時、大学の研究室(10階建て鉄筋コンクリートの9階…2003年竣工)にいて、研究室が壊滅的な被害に遭って、後片付けに必死になっており、余震に怯える毎日だった。電気は2日後に復旧したが、コンビニは開かず、スーパーマーケットにも商品はなく、ガスの供給は停止状態が続き、ガソリンはスタンドに行っても3月一杯買えなかった。新幹線なども4月一杯、不通だった。とても他に関心を向ける余裕がなくなっていた。当然、3月19日の予定はキャンセルとなった。

5月の連休過ぎからは感覚的に余震が少なくなってきたし、大きな余震もなくなってきた。齊藤会長から「もうそろそろ」と促され、ロードマップを改訂した上、11月を目途に新体制を発足させる(当初の予定より約3ヶ月遅れ)計画を立てて、会長からも承認を得、5月22日にあり方委員に2011年6月18日に第2回あり方委員会を開催する通知を流した。

これより前の6月4日、東京支部総会に出席した折、宮永雅己氏(札幌支部長)から次のようなことを耳打ちされた。「あり方委員会の委員に札幌と東京から一人ずつ委員を加えてほしい。」6月18日の第2回あり方委員会で提案することにした。

6. 改訂版ロードマップ

東日本大震災以降、初めて家族と離れたのは、すなわち初めて出張したのは5月13日の金曜日、東京駅の近くで学会のための常任理事会への出席だった。正直、家族と一瞬たりとも別れるのがこんなに恐怖になっているとい

うのは自分でも驚きだった。とにかく、離れている間にどちらかに何かが起こったでしょう、またあの巨大地震でも起きてしまったら再び家族に会えないかも知れない。うまく表現しているかどうか分からないが、そうした恐ろしさが強烈だった。

もちろん、5月13日は何事もなく自宅に戻れた。恐怖感がその分だけ、少しだけ、遠のいた。

6月18日、あり方委員会。下記の震災後のロードマップ改訂版を提案し、承認を得る。

函館ラ・サール学園同窓会運営改革作業ロードマップ 震災後改訂版

作成・文責…伊藤恒敏 2011.5.15

1. 第1回あり方委員会開催…委員の紹介と委員長の互選 2011.1.30
2. 「新同窓会会則」決定までのプロセスの決定…ロードマップの決定 2011.1.30
2. 新しい同窓会の構想(「改革構想」≡ポンチ絵も)の決定 2011.1.30
3. 「新同窓会会則」決定までのプロセス、ロードマップ、「改革構想」およびポンチ絵についてメールでの審議のため、全理事に送信 2011.2.1
4. 改革プロセス、ロードマップ、改革構想およびポンチ絵について、各支部の意見の集約 2011.2.28
5. 第2回あり方委員会開催…改革構想とポンチ絵に対する各支部の意見のフィードバック作業 2011.6.18
6. 支部長会の開催…改革構想本決定 2011.7.9
7. 改革構想の要素分割 2011.7.23
8. 「要素」の「新同窓会会則」への落とし込み 2011.7.30
9. 「新同窓会会則」の構想…「新同窓会会則」の条文(案)作成作業 2011.8.13
10. 第3回あり方委員会開催「新同窓会会則」の条文(案)完成

11. 「新同窓会会則」(案)についてメールでの審議のため、全理事に送信 2011.9.3

12. 「新同窓会会則」(案)についての各支部からの意見の集約 2011.9.10

13. 「新同窓会会則」(案)に対する各支部の意見のフィードバック作業 2011.10.1

14. 第4回あり方委員会開催「新同窓会会則」の条文の「最終案」完成 2011.10.15

15. 支部長会の開催…「新同窓会会則」本決定(新役員人事も決定) 2011.11.4

16. 「新同窓会」正式発足 2011.11.5

(上記の日程は諸般の事情により変更があり得ることをご了解下さい)

その上で、その時点までに第1回あり方委員会で大筋合意された新同窓会の概念・構想、スキームなどについて各支部長などから了解が取り付けられたことを報告し、あり方委員会でも再度、了承された。これで新同窓会の「構想」についてはほぼ確定した。「母校が函館に存在する十函館がホームグラウンド」などの理由で新同窓会の会長は函館地区から選出するのが望ましい、という合意もえられた。

第2回あり方委員会 議事録

2011.6.18(土曜日)17時から19時半まで…函館ラ・サール学園修道院会議室出席者…齊藤裕志、佐藤友康、川口孝徳、品田義雄、仲屋裕樹、伊藤恒敏
欠席者…菅野剛造(翌日、齊藤会長と伊藤が議事内容説明)

1. 齊藤会長挨拶

2. 第1回あり方委員会議事録の確認(資料1)

3. 議事

3. 1. これまでの経緯とロードマップの変更…新たなロードマップの承認(資料2)

3. 2. 「新」同窓会の概念(スキーム)と主な意見…「新」同窓会についての考え方

3. 2. 1. 概念とスキームについてあらためて承認(資料3と資料4)

同窓会本部についてのイメージを確定

同窓会本部は事業を行う意思を持った主体的組織

本部と支部を定義する…今後の作業

事業計画を立てる…同窓会本部の事業の整理

(1) 函館ラ・サール学園卒業生の消息把握と名簿作成およびその管理のための事業

卒期単位で束ねる努力も…卒期の代表者を決めてもらう…代表者を組織する手だてを考える…今後とも学園に対し情報提供の要請

(2) 函館ラ・サール学園、仙台ラ・サールホームおよびラ・サール会の要請に応じた寄付事業

(3) 函館ラ・サール学園の在校生に対する奨学金助成事業

(4) 函館ラ・サール学園同窓会員に対し会報を発行する事業

(5) 函館ラ・サール学園同窓会員から会費を徴収する事業

(6) 函館ラ・サール学園と函館ラ・サール学園同窓会が共催する

種々の記念事業の企画実行

(7) その他目的を達成するために必要な事業

3. 2. 2. 理事会と評議員会について

理事会は執行役員…理事は適材適所

評議員は ①同窓会の業務執行の審査のための「議員」

理事会が提案する種々の細則、内規などの審議・承認

②評議員会が理事・評議員の選任

評議員は全国の支部から会員数に応じて選出(資料5)

支部からまず一人の評議員十会員数500人に一人の評議

員(端数切り捨て)十函館支部には特別評議員の設置

どの支部も評議員は過半数を占めない

3. 2. 3. 目的と政治的中立性

目的…この会は、函館ラ・サール学園同窓会員相互の親睦を図り、函

館ラ・サール学園の健全な発展へ協力し、支援を行い、貢献する

ことを目的とする。

今後予想される懸念を払拭するためにも強く政治的中立性を謳う

同窓会の目的を幅広い会員の協力によって達成するため、本

会はどんな状況のもとでもいかなる党派にも所属しないし又

本会の名においてあらゆる選挙においていかなる候補者の支援もしない。本会の名において個々の会員が政治的圧力を受

けることがあつてはならない。

3. 2. 4. 会長人事

母校が函館に存在する十函館がホームグラウンドなどその他の点

も考慮し会長は函館地区から選出するのが望ましいというあり方

委員会の結論(資料6)を得た

3. 2. 5. 事務局

これまでの議論の通り事務局体制を確立する…学校内の一室を事

務局として借り受ける

3. 2. 6. 会費と予算、事業、専従職員

会費を徴収することを新たに発足する同窓会の重要な事業とする

詳細については11月に発足する新執行部の中で考える

3. 2. 7. 規約(会則)と細則

骨子は少しずつ議論しているが規約・細則は次回支部長会以降の

作業予定とする

・評議委員の数の配分、選任に関するもの

・新たな支部の承認手続き

3. 3. あり方委員の追加要請について

宮永氏からの要請に基づき、検討した結果、札幌支部、東京支部および西日

本支部から各1名を加えることを次回支部長会(2011.7.9予定)で提案…追加されるあり方委員の旅費は各支部で負担することとする

3. 4. 支部長会への対応、準備

本日議論した内容を支部長会で提案

3. 5. ロードマップに沿った議案の整理、作業予定の確認

4. 次回開催予定

2011年9月3日(土曜日)の予定…規約の作成作業が主な議題となる予定

新同窓会のイメージについてあり方委員会でもかなりの進展が見られたので、2011年7月9日に支部長会・理事会を開催し、これまであり方委員会でも合意されたことを支部長会・理事会に提案し、ここまでの内容を全同窓会で確定したいと考えた。すなわち、基本的に第2回あり方委員会の議事録と関連する資料を支部長・理事に送付し、支部長・理事に報告し、支部長会・理事会の議論を経た上で、ここまでのあり方委員会での決定事項を可能な限り同窓会全体の決定としたいと考えた。

7. 2011年7月の支部長会・理事会

支部長会・理事会ではあり方委員会の合意事項に対し、比較的激しい議論が行われた。

函館ラ・サール学園同窓会支部長会 議事録

2011.7.9(土曜日)16時から…函館ロイヤルホテル

出席者…菅野剛造(1)、植木清三郎(4)、古旗達夫(4)、齊藤裕志(5)、伊藤恒敏(6)、宮永雅己(7)、島本肇(8)、塚谷善次(9)、山本政友(10)、佐藤友康(12)、林完自(14)、清水昌明(14)、大山慎介(19)、川口孝徳(20)、仲屋裕樹(22)、十文字正樹(26)、永澤大樹(29)〔以上17人〕

1. 齊藤会長挨拶

2. 議事(資料等については再掲しない)

2. 1. これまでの経緯とロードマップの変更

当初のロードマップ作成以降、東日本大震災により予定の変更が余儀なくされ、ロードマップの改訂版が提示され、了承された…これによって例年通り8月20日(土)に予定されていた函館ラ・サール学園同窓会定期総会は順延となり、順延された定期総会と、「新同窓会」発足の承認を求める臨時総会が、11月5日(土)に開催される予定となった…下記3. 参照

2. 2. 「新」同窓会の概念(スキーム)と主な意見…「新」同窓会についての考え方

2. 2. 1. 概念とスキーム

原案通りほぼ了承された

ただし、理事会と評議員会を対等の関係にすべきとの意見があったので、スキームを変更

同窓会「本部」の事業も概ね了承された…同窓生が在校生に講演する「寄附講座」の開催も考えて良いのではないかと

2. 2. 2. 理事会と評議員会

理事会と評議員会の設置、役割などあり方委員会の提案通り了承された

評議員数の支部の配分数については各支部とも

支部長+各支部1人+会員数500に対して1人とすべきとの変更

ただし、支部長以外の評議員最大人数は会員数割り当て分以内とする…下記参照

支部についてはあり方委員会からの提案はなかったが、あり方委員長の私見(会員数50名以上で過去5年以上の活動経歴があるものを支部と認める)に対しおおよそそうした規準で構わないだろうとの了解が得られた…ただし、支部として申請を受ける時には規約の提出も明示すべきとの意見もあった…今後詰める

2. 2. 3. 目的と政治的中立性

目的も政治的中立性の文言も規約に盛り込むことで了承された営利行為を禁止する旨も明示すべきとの意見があり、規約に盛り込むか申し合わせにするかは今後検討することとした

2. 2. 4. 会長人事

あり方委員会の結論（会長は函館地区から選出するのが望ましい）に対して

①会長にふさわしい人物を全国から選出すべき…支部に持ち帰り協議したい（東京支部）

②あり方委員会提案に大体賛成だが「べき」ではなく「望ましい」という表現にすべき（札幌支部など）

③函館だけで常任理事会のようなものを作って活動してもらうことも考える必要あり、まして同窓会長が函館在住者なのは当然（東北支部役員会）

等の意見が出た

東京支部の考えは会員1、700名の総意だと主張する場合もあったが、一方、会員1、700名の総意ということは現実的にはあり得なく実体は東京支部の幹事会の意見であること、また東京同窓会が毎年300人近くの会員を総会に結集させるのは首都圏が交通の便が良いだけの話だ、との反論もあり、さらには東京支部役員の発言には過去にも問題（あり方委員選任に関する件…会長に「任すると支部長会で決定された問題を「聞いていない」と東京が一蹴した」と…後に東京が謝罪）があつて、東京支部の発言には最大の配慮と注意を払うべきだとの東京支部に対する強硬な「注文」も出された…函館本部にしろ、各支部にしろ「意見」というのは会員の総意と言うことはあり得ず、役員会あるいは幹事会の意見であるという「限界」を相互にわきまえる必要があるとされた

今回は結論を出さずに次回のあり方委員会ですらに検討することとした

2. 2. 5. 事務局

事務局長は理事の一人とすることが了承された

2. 2. 6. 会費と予算、事業、専従職員

検討状況の報告のみ

2. 2. 7. 規約は現在鋭意作業中

規約の検討は次回の支部長会になるが次回あり方委員会（9／3予定）を8／27に繰り上げできないか（支部での検討のための時間捻出のため）と意見あり検討することとした

一部の細則「評議員の旅費支給に関する細則」

（再掲）評議員数の支部の配分数については各支部とも

支部長＋各支部1人＋会員数500に対して1人とすべきとの変更

ただし、支部長以外の評議員最大人数は会員数割り当て分以内とする

2. 3. あり方委員の追加要請について

原案通り承認され次のあり方委員が決定…東京支部林氏、札幌支部大山氏、西日本持ち帰り

3. 次回支部長会（および定期総会・臨時総会）開催予定…上記2. 1. 参照

2011年11月5日の予定…（函館での順延となった定期総会および新同窓会発足のための臨時総会会場の予約・設定などのため）現時点で11月5日新体制発足を目標として進めることを了とするものの、今後の検討の進捗状況によつてはロードマップの変更もあり得る

4. その他（議事進行の都合上、議事より先に説明があり）

マニラで開催される第5回世界ラ・サール同窓会大会についての説明が清水事務局長よりあつた

マニラ大会本部へ開催地域となるアジアが負担をシェアするという意味で鹿児島・函館両同窓会が25万円ずつ合計50万円の支援金を拠出することを同意した

函館から20人ぐらい参加して欲しいという要請があるが、困難ではない

か、という雰囲気が大勢を占めた

上記の議事録でも明らかなように、新同窓会の概念、スキームが問題なく承認され、理事会が同窓会の執行機関であり、評議員会が同窓会のいわば最高意思決定機関である、という枠組みが支部長会・理事会でも了解された。激しい議論になったのは会長人事の件。あり方委員会原案は会長は函館地区在住者から選ぶべきである、ということだが、東京支部が会長人事を函館に限定することに反対、札幌支部は「べき」を「のぞましい」という表現に変えろという。東北支部は会長が、母校が存在する地区と同じ地区から選出されるのはきわめて当たり前だ、という意見だった。引き続きの検討事項となった。

8. 新同窓会のスキームと理事会と評議員会

これまでの議論の中で、(1)新同窓会は全国支部を束ねる連合体であること、(2)函館地区にも新たに函館支部を結成すべきこと、(3)新同窓会の執行機関は理事会、(4)新同窓会の最高意思決定機関は評議員会である、(5)従って、従来の意思決定機関としての「総会」を本部は開催しない、等が少なくとも2011年7月の支部長会・理事会で合意された。これで行った新同窓会の枠組みに関する問題で「後戻り」することはない。

細かな点は省くことにするが、残された問題は会則と関連する細則・内規等の制定と会長人事の件を残すだけになった。とは言え、曖昧な点をできるだけなくした誰から見ても恣意的判断ができないような会則を考えるのは相当にしんどい作業になるかと思われた。

9. 会則、細則、内規、申し合わせの制定

2011年7月の支部長会・理事会の審議内容を受け、またロードマップ

震災後改訂版の予定に従ってあり方委員長としては会則、細則、内規、申し合わせ等の条文化成や、それらの間の整合性確立の作業を進めた。第3回あり方委員会が2011年9月3日に開催となった。私はそれまでに作成した「会則」、「評議員の選任と旅費支給に関する細則」、「支部の承認などに関する細則」、「会費に関する細則」、「会長が出席すべき式典に関する内規」、および「会長選出に関する申し合わせ」(巻末に規則の類は掲載してあるので参照してもらいたい)を提案し、あり方委員会の審議過程の中で一部訂正も受けたが、「会費に関する細則」以外についてはほぼ提案通り、承認された。「会費に関する細則」は時間切れで新体制発足以後に検討することとなった。

次の手続きはロードマップに従えば、「新同窓会会則」等(案)についてメールでの審議のため、全理事に送信することである。議事録の確認を取った後、私はすぐに全支部長へこれらの「新同窓会会則」等(案)を送信し、意見を待った。

第3回あり方委員会 議事録

2011.9.3(土曜日) 16時30分から20時まで…函館ロイヤルホテル

出席者…齊藤裕志、佐藤友康、川口孝徳、品田義雄、仲屋裕樹、菅野剛造、大山慎介、古旗達夫、伊藤恒敏

1. 齊藤会長挨拶(省略)
2. 議事録の確認(特段の指摘もなかったので省略)
3. 議事

3.1. 会則

提案された会則に対し逐条的に種々議論と意見交換が行われ、原案に對して必要な修正が加えられた。第3回あり方委員会としては資料(函館ラ・サール学園同窓会会則「案2011.9.4版」)の通り結論を得た。今後、各支部への周知を徹底し、第4回あり方委員会(2011.11.4)

で最終的に審議し合意を得た上で、翌日に予定される支部長会(2011.11.5)および総会で提案していくこととした。

下記の「3.2.1. 評議員選任に関する細則」とも関連するが、評議員会は委任状が認められない仕組みとなる(理事会も同様)ので、評議員会における評議員の出席を確保するためにも、各支部選出の(正)評議員に対してあらかじめ「予備評議員」を何人か登録しておいて、(正)評議員が出席できない場合に「予備評議員」をもつて代理出席をさせることが可能な仕組み(「評議員会規則」)を発足までに考えることとなった。理事会における代理出席制度は認められなかった。

議事録作成人(伊藤)の注…会則の条文によると、「評議員会規則」を定めるのは「評議員会」である。評議員会が設置されるよりも先に評議員会が定めるとされる評議員会規則が存在するのは論理矛盾になるのではない。従って、予備評議員問題については「評議員の選任と旅費支給に関する細則」の中に予備評議員の制定とその定義、予備評議員の定数、およびその登録についての定めを盛り込んだ方が、周辺事情との整合性を取りやすいのではない。従って、評議員会規則を提案せずに「評議員の選任と旅費支給に関する細則」の修正を添付の資料のように提案する。

議事録作成人(伊藤)の注(2)…会議後に委員の一人より指摘があり会則の条文中の「又は」をすべて「または」にあらためた。

3.2. 細則

3.2.1. 評議員選任に関する細則

委員長提案の「評議員の選任と旅費支給に関する細則」に対し、札幌支部から、「函館支部に対する特別評議員はゼロにすべきだ(これ以上、函館の会員に負担をかけることは難しいのではないか」との理由で)」との反論がなされた。委員長はこれからも函館の会員に世話にならざるを得ないのであるから、尚更函館の会員にはその分、運営に関わってもらわなければならない、との提案理由が再三、説明された。侃々諤々議論が行われたが、①前回の支部長会(2011.7.9)での議論はこれで良いという意見が大方を占めていたという事情や、②今回の議

論で函館の委員が特別評議員を3人引き受けることは負担ではない、という意見表明もあり、特別評議員については提案通り(資料「評議員選任に関する細則2011-9-4版」参照)とした。この細則に関してはその他の意見はなかった。

3.2.2. 支部に関する細則

一部、修正が加えられたが、ほぼ委員長提案通り(資料「支部の承認などに関する細則2011-9-4版」参照)可決した。なお、東京支部を東京同窓会と呼称するのは鹿児島県の例を見ても問題が多いので、「東京同窓会」という呼称を止めてもらえないか、という要請が東京支部になされた。東京支部は要請を受けたことを東京に持ち帰って審議するとした。同窓会の新しい会則では東京支部は正式には「支部」という定義となる。

3.2.3. 会費に関する細則(資料は添付しない)

会議が予想以上に長引いたこともありこの問題については新体制発足後に検討を開始すべきとの意見で一致した。

3.3. 内規…(資料「会長が出席すべき式典に関する内規」)

3.4. 申し合わせ…(資料「会長選出に関する申し合わせ」)

3.3. および3.4. に相互に関連することとして、札幌支部が「会長選出に関する申し合わせ事項」を敢えて「申し合わせ」にまでして残すべきことなのか、と疑義を訴えた。委員の大半はこの「内規」と「申し合わせ」は前回の支部長会(2011.7.9)での議論を踏まえた提案であり、特に「会長を函館地区在住者から選ぶのが望ましい」という表現にすべきだと主張したのは札幌支部自身ではないのかと反論した。先の支部長会で札幌支部が主張したことに加え、さらに今回の会議では札幌の委員を除くすべての委員が、この申し合わせで異議はないという状況であったことを斟酌し、札幌支部には再考を促すこととなった。あり方委員会としては、上記のように一部に反対はあったが、多数の委員が異議を特に唱えることもなかったため、「内規」と「申し合わせ」については提案通り認めるという結論に至った。

3. 5. 新体制の人事構想

齊藤会長、伊藤あり方委員会委員長を中心に人選を進め、次回のあり方委員会(11月4日予定)よりはかなり早めに各支部、あり方委員会委員に提案することとし、各支部などの意見を集約することとした。審議中の新会則の付則にあるように、(形式的には)会の改編初年度は改編申請者(現同窓会長)が推薦した評議員役員で体制を組むことになる。

3. 6. 11月5日の「総会」の準備

これまでの同窓会本部の決算をどう処理するか、について話があった。2011年8月までの決算と、2011年8月から11月までの分を11月5日開催予定の「総会」で承認を受ける必要があるので、その手続きを進めることが承認された。2011年8月から11月までの分については決算処理に十分な時間的猶予がないことも考慮し、決算予定を提示し、決算手続きを現会計係に二任してもらい、その後ホームページなどで公開して事後の承認を受けるものと考えるべきとされた。

4. 次回開催予定と今後のロードマップ

現時点で震災後改訂版のロードマップに変更はないことが確認された。

5. その他

新体制のスキームについて、評議員会と理事会が対等の関係であるとの認識になるように変更すべきとの支部長会の議論を踏まえて訂正するよう、注意を受けた。指摘通り訂正することとした。

10. 反論など

2011年10月に入って東京支部、札幌支部から意見が寄せられた。

詳細は省略せざるを得ないが、東京支部の意見(A4で3ページ分)は、あり方委員会がロードマップで約束した手続きである、「新同窓会会則等(案)についての意見を寄せる」ということを外れて、2011年1月以降のあり方委員会の審議全体に關しての意見が大半を占めたものだった。まず、「理事会および評議員会の体制」を見直すべきだという。「会の運営や

事業の執行に關する会員の意思の反映」についても新同窓会のあり方としては再考を促すものになっている。会長人事についても独自の考えを述べてきた。

私は、今回の意見聴取は第3回あり方委員会が合意した会則等についての意見聴取であり、新同窓会の概念や体制やスキームについては既に、2011年7月9日の支部長会・理事会で了承済の案件であること、会長人事等についてもあり方委員会でも再三、問題提起をし、論点も整理して審議してきた議題であり、2011年7月9日の支部長会・理事会での議論を受けて、再度2011年9月3日の第3回あり方委員会でも合意した事項であり、これだけ手続きを踏んで審議し合意された事項であることを重く受けとめるべきではないか、と反論した。さらに東京支部は、新体制移行は2012年度総会終了以降にせよ、と言う。ロードマップはこれもあり、翌月に新体制発足を考えて手続きを考えられる限り遺漏のないように準備を進めているものからすれば、とても認められないものだ。私はこれも強く反論した。

札幌支部の意見も新体制発足を遅らせよ(移行時期については、今しばらくお待ちいただきたい)、というものだった。東京への反論と同様の意見を申し上げて、札幌にも反論した。

私の反論に対しては、その後、両支部から一切の意見の開陳はなかった。

11. 新体制発足

2011年10月26日からマニラでのUMAE世界大会が開催されることになっており、最初は渋谷ではあったが、それでも函館の同窓生が18人参加することになり、私はマニラとの交渉で、函館ラ・サール学園同窓会の紹介のためのプレゼンテーションまで引き受けて、あつちもこつちも大変だったけれども、多くの人の応援と支援とをいただきながら、2011年

11月5日の、いわば最後の総会の開催を、センチメントだということは百も承知だったが、1年にわたる作業の連続、議論の連続、反論に反論の連続、を振り返って考えて、あまり興奮せず静かな感慨を持って、待った。

11月5日の総会直前の支部長会・理事会はすべての案件を了承し、何事も論争はなかったかのように、終了した。総会も問題なく、終了した。同窓会が新体制となった。

大事なことは何のために同窓会改革をしたのか、という原点を忘れてはならないということだ。同窓会を発展させるため、学園の発展を願っての話である。会則の目的や事業のところに明確に記載したつもりだ。そして各支部の純粋な思いが同窓会全体に反映できるように、支部間の既得権益の争いとか、覇権争いだとかというような矮小化されたことにこの同窓会の活動が利用されることが決してあってはならない。

同窓会のありようから逸脱しないように私の個人的な思いを述べれば、会則に定めたようにこの同窓会が運営され、目的に沿った事業が執行され、同窓会のみならず、学園本体が今以上に活気を取り戻し、あらためて社会からその存在の重要性を認識されるようになることが、同窓生としての一番の希望、期待である。

世界同窓会報告…ラ・サール同窓会 日本連盟結成の経緯

函館ラ・サール学園同窓会 事務局 局長

伊藤 恒敏

6期

1. UMAEL…宿命
2. ラベル先生からの強い勧め
3. 函館ラ・サール学園のアピールの機会
4. 21世紀委員会からの牽制、そして震災被害地からの声として
5. プレゼンテーション
6. La Salle at Green Hillsでの会議
7. 議事録
8. 連盟の骨子案
9. 両同窓会長による合意
10. 今後のあり方：“It's a long way to go”
11. 余録…世界大会見聞
11. 1. マニラとの交渉：Quick Responses
11. 2. 大会運営の規模の大きさと鷹揚さ…楽天主義
11. 3. フィリピンラ・サール会の歴史
11. 4. パトカー先導と「缶詰」と…この国の治安状態
11. 5. フィリピン国民の経済格差
11. 6. カトリックの国

1. UMAEL…宿命

皆さんは知っているだろうか、われわれ「ラ・サールの学校」を卒業したも

のことは決して取り去ることの出来ない宿命が少なくとも二つはあることを。一つは大変重要なことだが、好き嫌いに関わらず、われわれが「函館ラ・サール学園」の卒業生であるという経歴は消せないし、書き換えることも出来ない。当たり前のことだ。でも、国籍を変更できることを「一方で容認している立場から考えてみると、重い話だ。二つ目は、われわれが意識しようがしまいが、「函館ラ・サール学園」の卒業生だということは、同時に全世界の「ラ・サール学校」の同窓生でもあるということだ。別な表現でいえば、われわれは函館ラ・サール学園の同窓生であると同時にUMAE L (L'Union Mondiale des Anciens Élèves Lasalliens : 「直訳」ラ・サール同窓生世界連盟)の一員でもあるのだ。

2. ラベル先生からの強い勧め

昨年の初めあたりからラベル先生がマニラで2011年10月に開催される4年に1度の第4回UMAE L世界大会に参加してほしい、という強い調子の要請が繰り返された。一部の会員を除いておそらく、UMAE Lというのは馴染みがなかったと思うし、UMAE Lの世界大会に参加する必要性や必然性は感じられなかったと思う。第一、費用もかかる。

しかし、繰り返されるラベル先生の要請が次第に会員を動かし、鹿児島同窓会からの参加者が函館の勝手な予想よりも多くなりそうだとこのことが明らかになってくるにしたがって、函館からも参加者を送らなければ、という気運が高まり、齊藤同窓会長も各支部に派遣費用として補助金を出すことを決定するに及んで、最終的に函館卒業生の参加者が18人にもなった。

3. 函館ラ・サール学園のアップルの機会

色んな方の話を聞くと、これまでもUMAE Lの世界大会には函館ラ・サール学園の同窓会員が「個人的」に参加はしていたらしい。しかしなが

ら今回のように函館の卒業生が18人も「大挙」して参加するのは初めてのこととなる。鹿児島からも30数人が参加し、日本からのいわば「派遣団」は併せて50余人、結果として国単位として50数人というのはフィリピン国内からの参加者を除くと、最多となった。

こうした貴重な機会だから、どうせ参加するならば、これが函館にとって組織的に参加する初めての世界大会でもあるのだから、我々の同窓会を認知してもらうための大会にしましょう、プレゼンテーションを行う機会をもらえるのであれば、ぜひ、我々の同窓会をPRしましょう、と強く、齊藤会長に働きかけ、会長は快く同意してくれて、我々の意向をマニラに申し入れることにした。

4. 21世紀委員会からの牽制、そして震災被害地からの声として

函館同窓会が組織としての参加を決めた時点で、かなり早期からマニラへの参加を呼びかけている東京の21世紀委員会があつて、その代表の方(A氏とする)が多くの情報をメール上で流していたので、当然のように、マニラに交渉する前にA氏に、誰に對しどのように働きかけをしたら良いのかを尋ねた。ところが、A氏から「我々はAll Japanとしてのスタンスで、挨拶やプレゼンを行うべきとの考えに立っていますが、函館としては、函館は函館というスタンスなんですか」との牽制意見が小生のところに届いた。早期から情報を流しているのにそれに返答もせずに、切羽詰まってから函館は何を言い出すのか、と言われてるように思えた。函館同窓会はA氏の呼びかけに對し誠実に返答を出さなかったという責めは負うが、返答がないことを理由に代表権は我々にあるというA氏の主張も受け入れ難いものがあった。

A氏の意見に對して、函館同窓会の組織替えをあり方委員会の委員と議論や作業に精魂を傾け、多少の事情を知る立場にいた小生としては、次のように反論した(7項目述べたうち、3点だけ記す)。「①まず、最初に申

し上げたいのはAさんが関与する組織への、函館ラ・サール学園同窓会からの正式な参加とかコミットメントとかはないはずです。函館ラ・サール学園同窓会の会員が参加しているかも知れませんが、参加・コミットメントに関して、函館ラ・サール学園同窓会としては公式的な機関決定を行ったことが全くありません。②Aさんのおっしゃる『All Japan』についても全く同様のことが言えます。いつどのような合意・同意形成の上で『All Japan』なる概念が結成されたのか、函館ラ・サール学園同窓会では公式に誰も分かりません。(中略)⑦最後になりますが、本年3月の大震災に関して世界中から日本は支援を受けました。Aさんのおっしゃるように日本からのdelegationはどんな人たちであれ、世界からの支援に対して心からの御礼を述べなければならぬと思います。その点は諸手を挙げて賛同いたします。その点でさらに小生の立場で付け足させていただければ、小生は仙台におります、被災地のまさに中心の県にいます、その上、ラ・サールホームがある街と同じ街に居住しており、被災後のラ・サールホームとかなり早い時点で直接連絡も取り、訪ねていった一人です。そうした立場のものをこそ、今回のマニラのプレゼンテーションでは機会を与えられるべきではないでしょうか。」

A氏からはすぐに次のような返答が来た。「挨拶などの時間は、100(A氏のこと)」に与えられた時間ではなくJapanに与えられた時間ですし、私が仕切る立場にはありませんので、今までの流れを踏まえて判断しマニラの事務局に直接ご連絡頂ければ良いのではないのでしょうか。」

私は躊躇なくマニラに申し入れを行い、世界大会の「組織委員長」の立場におられたHenry Atayde氏および彼の弟であるLeandro Atayde氏から、申し入れに対し即日のうちの返事で快諾を得た。

5. プレゼンテーション

10月29日の午後、日本からのプレゼンテーションということでA氏と函館の私に30分間の時間があてがわれ、予定よりは3時間も遅れての発表とな

った。A氏が先に登壇し、大震災への支援のお礼とご自身の関与する21世紀委員会の活動を中心に発表された。私は、大震災の支援に対する御礼を(軽度の)被災者として述べ、函館ラ・サール学園の創立のいきさつ、同窓会設立の経緯、ラ・サールホームとの関わりなどを説明して、私たちの函館ラ・サール学園同窓会をより良く認識をしてもらえるようにした。

プレゼンテーションのスピーチ(抄)(原文は英語)

マニラのスタッフの皆さんに衷心より、この素晴らしい会、そしてすべてにとって大変意義深い会の準備をしてこられ、また私たちに貴重な紹介発表の場をつくってくださり、さらにはどんな場合でも何か頼むとすぐに対応してくださったことに対し感謝を申し上げなければならぬと思います。これらの私たちに対する真摯な思慮深い親切な態度には深く感動を覚えます。重ねてありがとうございます。

まず、第一に今年の3月11日の信じられない巨大地震とその後の大津波による信じがたいほどの大災害に直面した私たちに押し送られた世界からのすべての支援に対して深き感謝の念を表明したいと思います。私たちは皆さんの温かさ、親切は決して忘れません。

私はラ・サールホームのある仙台に住んでおります。仙台は宮城県の県庁所在地です。宮城県は東北地方の中でも最も災害がひどかった県地域です。福島県ではご存知のように、原子力発電所がメルトダウンし、引き続き水素爆発で放出された目に見えない放射能で苦しんでいます。一部の住民は強制的に避難を余儀なくされ、今でも自分が住んでいた町から離れていつかは町に戻るという希望を持って暮らしています。

日本にはラ・サールの機関は3つあります…鹿児島ラ・サール中学高校、函館ラ・サール中学高校および仙台ラ・サールホームです。

函館ラ・サール学園同窓会紹介をはじめるにあたり、1932年に4人のかナダブラザーが函館にやってきたところから始めたいと思います。実

際に、彼らが日本にきた最初のラ・サール会の修道士でした。彼らは函館に学校を設立するという使命を携えてやってきました。彼らは学校設立のための土地を購入しましたが、警察や市役所との間で問題となり、土地を取り上げられ、学校設立の使命は頓挫せざるを得ませんでした。そしてほとんどの修道士はカナダに戻るしかありませんでした。戦争中だったのです。仙台に行った修道士もおり、それが後のラ・サールホームの礎になったと聞いております。

戦後になり、鹿児島県がラ・サール会に学校設立のための土地を提供するという話があつてラ・サール会は鹿児島に赴き、学校を設立しました。1950年のことです。彼らが函館に初めてやってきたからおよそ20年が経っていました。鹿児島に学校を開設してもなお、彼らは最初に開設しようと考えた函館に学校を開きたいという希望は捨てませんでした。1955年、ラ・サール会本部は函館に学校を開設する決定を下し、モントリオール管区が翌年1956年、許可を出します。1958年に学校建設着工、そして1960年に最初の入学試験が施行され、その4月に最初の生徒達が入学しました。鹿児島島の学校開設から遅れること10年、4人のブラザーが最初に函館に来た時から30年が過ぎていました。最初の校長はローラン・ルエル修道士、1932年に函館にやってきた4人の修道士の一人です。昨年、2010年に私たちは学校創立50周年の記念式典をお祝いしました。

1960年当時の校舎です。最初に購入した土地に建てられました。この方々は1960年学校開設時の教職員です。私は個人的にはレナード修道士を見ていただきたい。私が1964年、函館ラ・サール高校に入学する半年前に、中学の時に出場した函館市中学英語弁論大会で、彼は審査員の一人でした。入学試験の直前の日、学校を訪れた私に、「あなたのことを覚えていますよ。」と言ってくださったことをはつきりと覚えています。それ以上のことはありませんが、私に話しかけてくれたということに当時の私は大変感動したのです。

われわれの同窓会は最初の生徒達が学校を卒業した時に始まりました。1963年のクラスの生徒です。最初の総会が函館で1966年か1968年に開催され、以降、毎年開催されています。同窓生の名簿が苦心の末、1971年に刊行され、以降5年ごとに刊行されています。支部が1991年から2000年にかけて自然発生的に結成されました。同窓会は会報(年1回)も2000年から発行するようになりました。昨年、同窓会は学校とともに学校創立50周年を祝いました。私たちは今、同窓会改革の最終段階において、新体制は来週の11月5日に発足の予定です。

現在、函館ラ・サール学園同窓会の会員数は13,000人を越えています。最年長は67才。(新しい枠組は)函館本部に5つの支部の体制です。函館支部、札幌支部、東京支部、仙台支部に、西日本支部です。現在の同窓会長は齊藤裕志、5期の1967年クラスです。

われわれの現在の主要な事業は

1. 毎年数人の学園の生徒への奨学金の給付
2. 1995年以来、毎年仙台ラ・サールホームへの寄附
3. ラ・サール会から要請があつた際の寄附…タイのパンブースクールのため、あるいはハイチのラ・サール会の支援のためなど
4. 同窓名簿の発行(5年ごと)
5. 毎年の会報の発行
6. UMAELを通じての世界との連帯の促進
となっています。

最後ですが、仙台ラ・サールホームのことを紹介させていただきます。もともとは仙台に戦後すぐに設立された孤児の施設だったのです。これが日本におけるラ・サール会の最も古い機関・施設となっています。現在ラ・サールホームは親が面倒を見ない子供達、親から無視される子供、虐待を受けている子供などを受け入れて面倒をみています。故井上ひさしさんは有名な小説家・劇作家ですが、ラ・サールホームの卒業生です。

われわれの同窓会はようやく50才になったばかりです。われわれはDe LaSalleの精神が導くように、UMAE Lが導いてくれるように今後も活動を続けていきます。

世界のラ・サール卒業生の皆さん、私たちは日本での信頼できるそして頼れるパートナーであり、同胞であることをどうぞ、ご認識いただきたいと思います。清聴、ありがとうございました。

9. La Salle at Green Hillsの全議

函館の齊藤会長も実はA氏との関係に悩んでいた一人で、マニラに着いて早い時期にA氏にこの際だからお互いに腹を割って話し合いをしようと思っていた。A氏も野田会長もその呼びかけに応じてくれて、10月29日の午後日本からのプレゼンテーションが終了した時点で、会場となったLa Salle at Green HillsのCampusの中庭で、ラベル先生を入れて、鹿児島(支部長が複数出席)、函館の10人余り(この時間帯はアズマシモンズの各位は夜の部に歌を歌うことになっておりその準備で忙しく、参加しなかった)の会議を敢えて開催し、次の項に掲げるような同意事項をまとめることができた。

7. 議事録

LS Green Hillsの会議のメモ

出席者：鹿児島：野田健太郎会長、黒木秀敏(東京支部長)：17期)、高田和彦(24

期)、福岡支部長)、津曲貞利(24期)：副会長)、長尾俊幸(28

期)：大阪支部長)

函館：齊藤裕志会長、伊藤恒敏(6期)：東北支部事務局長)、宮永雅

己(7期)：札幌支部長)、島本肇(8期)：本部理事)、宮本雄大(30期)：西日本支部)

ブラザー・ラベル

2011年10月29日17時30分頃から30分弱

海外との連絡の窓口が混乱していることについての話し合い

これまでの混乱についてはいろいろ理由(①21世紀委員会の両同窓会との関係、位置づけが曖昧・②誰も海外のことに関心を払わないから21世紀委員会ですらざるを得なかった)があるが、今後については次のように対応していきたいということで、鹿児島ラ・サール同窓会参加者も函館ラ・サール学園同窓会参加者も合意した。

1. 今後は鹿児島ラ・サール学園同窓会と函館ラ・サール学園同窓会が話し合つて窓口を一本化する

野田会長と齊藤会長が話し合う

今後は鹿児島と函館で交互に窓口業務(これをいわば「連盟」とする)を務める

次のUMAE L大会(開催地未決定)までは函館か、あるいは鹿児島のどちらかが代表として務める

それ以降はその次の世界大会まで(次のUMAE L大会まで函館が務めたとすればその次の4年間は鹿児島というように)

会長と事務局長がセットで交代する(連盟会長は函館会長が、連盟事務局長も函館から、連盟副会長と連盟事務局次長が鹿児島から)

2. 東京の21世紀委員会は、今後は両同窓会の決定に従って行動する

東京の21世紀委員会の今後のあり方は、21世紀委員会と新しい連盟との関係など、今後時間をかけて議論していく

上記の2点に関しては野田会長と齊藤会長が早急に相談する。函館の伊藤が新しい連盟のあり方の骨子案を両会長に提示し、了解が得られたものを両同窓会に公式に提示して、新しい連盟を立ち上げるように取りかかるものとする。

8. 連盟の骨子案

私は早速、議事録を作成し、両会長にメールで送った。ところが、両同窓会役員への周知には鹿児島、函館で多少の時間差が生じてしまったことなどもあり、A氏からは「東京の21世紀委員会は、今後は両同窓会の決定に従って行動する」の点に関してそのようには決まっていない、という異論が出された。私は骨子案もほぼ同時に作成したのであるが、議事録に異論が出た時点で骨子案は初期の案では合意が得られないだろうということで、敢えて出さないことにした。函館ラ・サール学園同窓会の気分としてはこの時、いざとなれば日本連盟結成は無理かも知れないと感じ、齊藤会長と私は連盟結成ができない時の覚悟を密かに決めていた。

9. 両同窓会長による合意

齊藤会長はそれでも粘り強く鹿児島同窓会に働きかけ、A氏に対してなぜ、議事録に異論が出るのか、電話で話し合った。議事録は会議で話し合われた通りのことを記録したに過ぎず、それに異論を唱えるというのはどうということかとA氏に問いただした。A氏は件の組織の役職を辞することを野田氏にその後表明。齊藤会長はさらに骨子案を修正して野田会長に提示し、その上で函館の覚悟も話し、その修正案ではどうか、と交渉した。その結果、鹿児島同窓会も骨子案の修正版を持ち回りの理事会で承認されたことを宣言し、2011年12月20日、両同窓会長が日本連盟設立に最終的に合意した。最終的に合意した際の修正版日本連盟についての骨子案は以下の通りである。

鹿児島ラ・サール学園同窓会と函館ラ・サール学園同窓会の「連盟」組織について

鹿児島同窓会および函館同窓会 両会長 合意事項

野田鹿児島ラ・サール学園同窓会会長および齊藤函館ラ・サール学園同窓会会長

は2011年11月28日電話で会談をし、以下の事項について合意した。両同窓会の「連盟組織」の件に関する事態を一刻も早く終息させるために、両同窓会の会長は下記の合意事項をできるだけ速やか(2011年12月末日まで)に各同窓会に諮って、その是非について機関決定をそれぞれ行うものとする。

鹿児島ラ・サール学園同窓会会長 野田健太郎
函館ラ・サール学園同窓会会長 齊藤 裕志

記

1. 日本のラ・サール学園と海外との正式な連絡窓口である「連盟組織」を作る

1. 1. ラ・サール関係の海外との連絡窓口は二本化する

1. 2. 二本化する窓口が日本の正式な「連盟組織」とする

この「連盟組織」以外の連盟組織は正式のものではない

1. 3. 「連盟組織」は両同窓会が「機関決定」をした上で、形成する

2. 「連盟組織」の概要

2. 1. 「連盟組織」の代表および事務局長はUMAE Lの世界大会に合わせ
て4年ごとに交代する。マニラ大会から次期大会までは、函館同窓会が、
その次は鹿児島同窓会が、連盟組織代表となる

2. 2. 「連盟組織」の代表および事務局長は4年ごとに両同窓会が交互に交
代する

2. 3. 「連盟組織」の役員構成は、この両同窓会の会長合意事項が両同窓会に
よって正式に機関決定された以降、両同窓会の審議によって正式に決定す
る

3. 「連盟組織」における意思決定…両同窓会から逸脱しない、意思決定の透明
化を徹底させる

3. 1. 「連盟組織」は両同窓会から独立に動く組織とはしない

3. 2. 「連盟組織」は両同窓会から全く独立に意思決定を行う組織とはしな
い

3. 3. UMAELその他の世界組織からの要請などの審議事項は必ず両同窓会に正式に諮った上で両同窓会の決定を基礎とし「連盟組織」で最終的に方針を決める

3. 4. 「連盟組織」は毎年度、事業計画、予算書を作成し、両同窓会に諮る

3. 5. 「連盟組織」は毎年度、事業報告、決算書を作成し、両同窓会に報告し、承認を得る

4. 21世紀委員会との関係

4. 1. 今後、21世紀委員会は海外団体との折衝に当たって両ラ・サール学園の代表であるかのような「日本代表」あるいは「All Japan」を名乗ることを固く禁ずる

4. 2. 今後、21世紀委員会は（日本代表といわなくとも）両同窓会の名前を語って両同窓会の会員から募金行為をすることも、両ラ・サール学園の代表であるかのような「日本代表」あるいは「All Japan」を名乗っての募金行為をすることも固く禁ずる

4. 3. 上記4. 1. および4. 2. の事項以外の21世紀委員会の活動については、両同窓会は一切関心を持たず、関与することも一切しない

（実際には2011年12月20日を持って正式に合意した。）

10. 今後のあり方：“It's a long way to go”

鹿児島および函館ラ・サールの学校を卒業した我々は同時に世界のラ・サールの同窓生と連帯することを義務づけられている、と考えるべきなのだ。遅ればせながらマニラに参加してその思いを強くしている。したがって、世界連盟に対し、日本がどのように付き合うのか、その際の意思形成をどうするのか、それも真剣に考えていかなければならない。意思決定は透明に、公明正大に行わなければならない。世界に対する日本のラ・サール同窓会の自覚、そして世界市民としての責務をどのように果たしていくのか、単なるパターンリズムでなしに、どのような考えで連帯していくのか、

ラ・サールスピリットを世界との連携のかなでどのように体现していくのか、我々が今後の活動の中で答えを探していかなければならない大きな課題である。

11. 余録…世界大会見聞

ここまでラ・サール同窓会日本連盟結成の経緯という面からUMAELの世界大会のことを書いた。しかしそれだけでは編集子の期待に十分沿ったものではない、という思いもある。ここでは余録として、UMAELのマニラ大会参加で驚きを持って遭遇したこと、体験したことを述べ、同窓会から旅費の補助をいただいたものとしての責任を果たしたい。

11. 1. マニラの交渉：Quick Responses

第4回UMAEL世界大会（UMAEL世界大会は4年に一度の開催）は2011年10月26日から。参加を決めてから9月以降、マニラの大会実行委員会委員長Henry Ataydeさん、その弟のLeandro Ataydeさんとメールでやりとりすることが頻繁になった。日本からメールを彼らに流していたのは鹿児島同窓生の東京の件のA氏、やはり鹿児島同窓でA氏と同年生の馬渡五郎氏、仙台の伊藤、マニラ大会で歌を披露することになっていたアズマシモンズのいわばマネージャー役の函館同窓生の佐藤秀樹氏などだったと推察するが、それ以外にも世界中の参加者達から頻々とメールが飛び込んでいたに違いない。ところが、驚きだったのは彼らの反応がきわめて速かったことだ。マニラと日本ではほとんど時差がない（マニラが日本より1時間遅い）ことも理由の一つだが、例えば私がメールで問い合わせすると早いものでは2-3分後に返事が返ってくる。日本時間で夜中の1時2時にメールを出しても同じ調子だった。Henry Atayde氏とLeandro氏も年格好が40代前半と若く、エネルギーが豊富だとは言え、彼らがこの世界大会に掛けるパッションは尋常ならざるものだったと実感したものだ。

11. 2. 大会運営の規模の大きさと鷹揚さ…楽天主義

われわれは大会2日目夜にマニラに到着。大会3日目からの参加予定だった。マニラに着いてからようやく分かったことだが、大会はマニラとその周辺のラ・サール関連の大学や学校の施設を日ごとに巡回するような形で開催だった。われわれが参加した大会3日目はマニラ郊外の医学部を併設する大学が会場だった。午前が記念講演会。大きな体育館風の施設に長机と椅子を並べての聴衆席だった。会場の雰囲気を見ると、若い学生風のスタッフの数がべらぼうに多いのに気づく。講演会が昼近くに終了するとバスを使って同じ大学の別のキャンパスに準備してあった昼食会場に全員で移動。

外は暑い。昼食会場にバスが到着すると、会場前で若い人たちが太鼓の演奏と歌で参加者を歓迎している。暑い中での太鼓と歌と踊りは、考えただけでも大変だ。本場にこれらの若いスタッフの数はどれほどになるのだろうか。日本でもしも開催することになったらおそらくこの人数の5分の1も動員できないだろう。そんなことまで考えさせられた。

昼食はビュッフェスタイル。人数も多く、必ず列に並ぶ。料理は日本人の口に合わなくはない。食事が終わりがける頃、大会実行委員長の挨拶があつて、その後アトラクションが始まる。アトラクションは言ってみれば「歌と踊り」。しかし、還暦を過ぎたわれわれには年齢差を十分感じてしまうような速いビートを刻んだもの。ステージでの踊りはそのうちに大会参加者も招じられてステージ前はさながらダンス場のような様相になった。

それらも終わると会場に案内が流れて、再びバスでの移動。午後は大学が保有管理する植物園でのピクニックが、大会の息抜きとして計画されていた。この植物園は昔の大富豪の庭園を大学が買い取ったものだとのこと。植物園に着いて日本から行った参加者達は一様に驚いたに違いない。機関銃を持った護衛のための警察官(あるいは衛兵?もしくは雇われた10-20人ほどのUMAE L参加者のための「ボディガード」)が2人1組

であちこちに立っている。これがこの国の治安状態をもっともシンボリックに表していたかも知れない。植物園のあちこちで少数民族による「歌と踊り」が様々に披露されていた。

われわれはそのときそのときの実行委員会のスタッフに促されて行動はするものの、予定されたスケジュール表や、どの場所でもどんな催し物が行われるのか、のあらかじめの予定にほとんどが疎いことに気がついていた。要するに詳細に知らされていないのである。通常のいわゆる「世界大会」などでは大会の概要が印刷された宣伝用のリーフレットなどが配付されるものだと思うが、そういうものは一切配信されて来ないのである。1日目にどんなことがあり、2日目にはどの会場でどんなことがあり、というおおよそのものは分かっていたが、おおよその予定で最後まで終始し、会場に着くまで大会の詳細な内容は知らされなかった。プログラムもプリントアウトしたもののコピーが手渡される程度だった。だから、かなり切羽詰まった状況で函館のプレゼンテーションをお願いしたにもかかわらず、大丈夫ですよ、ということだけで快諾してくれたのかも知れなかった。

11.3. フィリピン・ラ・サール会の歴史

フィリピンにはヨーロッパから1911年に6人の修道士達がやって来た。フィリピンにおけるラ・サール会の歴史の始まりである。マニラでの第4回のUMAE Lの世界大会はラ・サール会来訪100周年を祝う催しでもある。もちろん、マニラに着いてから知ったことだ。日本にラ・サール会が最初に来たのはカナダから、1932年のことである。フィリピンに20年遅れることとなる。

11.4. バトカー先導と「缶詰」と…この国の治安状態

さて、第3日目の植物園でのピクニックが終了した。またバスに乗る。どこに連れて行かれるのか分からない。バスは走り出したが、すぐに尋常ならざる事態に気がついた。朝、函館同窓会の4人の面々とタクシーで会場に乗り付けたときには渋滞、渋滞でとにかく時間がかった。東アジアとい

うのはみんな群れて暮らすのが共通の特徴かな、と感じていたのに、この夕方のバスはなんだ。子供じみた表現だが、ビュンビュン飛ばす。反対車線は渋滞である。われわれより先に到着していた鹿児島・サールの方が言った。「昨日も今朝もこうだった。パトカーと救急車がバスを先導しているんだ。普通に走行している車を蹴散らしてバスを高速で走らせている。」パトカーと白バイは分かるが、救急車は詐欺ではないか。「アキノ大統領でさえ、今年からこんな風に町中を走ることとは止めることにしたそうだ。」「それをフィリピンのラ・サール同窓会はやっている。」「何でもフィリピンではラ・サール大学を卒業したのは相当なエリートになるらしい。」「警察首脳部もラ・サール同窓生が多数いるらしい。」「午前中のラ・サール大学付近では駐車違反をしても、ラ・サール関係のものだと分かるとすぐ不問になるらしい。」

夕方の会場が近くになるに及んで、パトカーも、白バイも、救急車も姿を消した。

さてさて、夕方の会場はそれほどバスをぶつ飛ばしてしばらく走った先にあるラ・サールの学校の施設らしい。建物も新しい。幼稚園や小学校などの複合的な教育施設だとのこと。そのアリーナのようなところで夕食会があるらしい。ミサも行われた。耳の聞こえない生徒達による静かな「宗教的な、カトリック的な」踊りがとても印象に残った。

この辺まで来て何となく、あることが理解されてきた。われわれUMAE世界大会参加者は朝からずっと、「缶詰」状況なのだ。夕食会でも参加者は「解放」されない。アリーナでの夕食会で、どのようにホテルに帰ったらよいかも案内がない。あるのは日本人が多く宿泊しているホテルへのバスは何時頃、この会場から出発するか、だけである。ふらっと会場外に出るわけにも行かない。結局、この日、ホテルに戻ったのは夜9時半を過ぎていた。

翌日、大会の最終日だが、この日もマニラ市内にあるLaSalle at Green Hillsという大学が会場だったが、ここは市内にある施設ということもあり、入り口のゲートの検問が厳しく、「一旦ゲートより中に入るとタクシードでも呼

んでいなければ外には出られない、というところだった。所々にはガードマンが立っている。

最終日にはUMAEL次期会長の選挙や、われわれのプレゼンテーションも午後から予定されていた。昼食は前日と同じように大きなホールでビュッフェスタイル。ラベル先生がお代わりをされるのを見て、元気なことに、若いことに驚いた。昼食中の軽いアトラクションでは参加者の中での最長老ということでもラベル先生が紹介されるのを聞いていて、最長老がお代わりというのもしずいずい、と疲れ気味に思った。当方は暑い外と、クーラーが強力に効いている室内とのあいだを出たり入ったりを繰り返して消耗しており、食欲も今ひとつだった。

一つ一つのセレモニーがどんどん予定より遅くなり、選挙も終わって、われわれのプレゼンテーションがようやく始まったのは、予定よりもなんと3時間も遅れたことだった。いい加減、待つことに疲れ果てての登壇であった。

プレゼンテーションも終わり、例の会議、鹿児島と函館の日本連盟結成に向けての話し合いが、ラベル先生を入れて夕方5時半頃に始まり、一時間で終了。その後、大会締めくくりのミサが聖堂で行われるためにみんなでキヤンドル行列をして移動。厳かにミサが始まり、マニラのBrother Victor Francoによる「COMMUNION IN MISSION(ラ・サール会創立者との、世界の同窓生との)使命の共有」のスピーチを聞き、終わった後、夕食会場ビールと夕食をいただいて、バスで、ホテルに戻った。

結局、この日もやはり、会場のLaSalle at Green Hillsから一歩も街中に出ることはなかった。

11.5. フィリピン国民の経済格差

タクシードで会場に向かうときにも、パトカーと白バイと救急車に先導されてバスで移動する際にも気がついていて、とんでもないスラム街のような場所を通ったり、瀟洒な豪邸が並んでいる住宅街を通ったり、町の様子がめまぐるしく変わる。瀟洒な豪邸というのは日本の通常の住宅街で見かける

住宅よりも遙かに高価に見えた。さすがにテレビ報道などに出てくるマニラの山の斜面にへばりつくような庄倒されるようなスラム街を見ることはなかったが、かねてから聞いているように、フィリピンの事情として、国民のあいだにはわれわれが考える以上の経済格差があるように感じた。

11. 6. カトリックの国

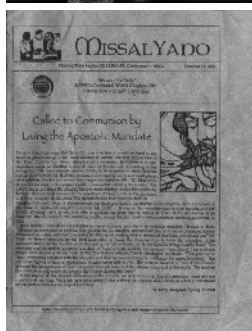
フィリピンはカトリックの国だ。二つの点でそれを強く感じた。

一つは、UMAEの行事に毎日のようにミサがあったことだ。ミサでは必ずといって良いほど、重要な、マイルストーンになるようなスピーチ(説教、あるいは)が修道士からなされる。ラ・サール会そのものがカトリックの修道会だということを考えれば当たり前だが、日本でラ・サールのことを考えたり、話したり、ラ・サールのことで集まったりするときはだいたい雰囲気が違うものだと感じた。フィリピンはさすがにカトリックの国だな、との印象を強めた。

二つ目はバスで移動中、車窓から街の景色を眺めていたが、庶民が暮らす街の角かどで沢山の子供達が遊んでいるのが目に入った。最近の日本の街中ではこんな風に子供達が夕方、街角で遊んでいる光景には出会えない。もちろん、環境がそうならないということもあるが、少なくともマニラには明らかに子供が多い。私たちが育った頃の田舎の子供を取り巻く風景と少し重なって、車窓から目を凝らして一人で不思議なノスタルジアを感じていた。フィリピンの人に聞くと、確かにフィリピンでは子供の数が多いとのこと。経済的に貧困な人々の方が多く子供を作る、ということがあるのかも知れないが、私個人としては、これもおそらく、多くの敬虔なカトリック信者が多いせいなのだろう、と目の前の光景を確実に視覚で捉えながら、頭の中では、自分の幼少の頃に対するノスタルジアと入り交じったうまく説明のつかないイマジネーションの世界の雰囲気浸っていた。







来年度以降の同窓会会費について

執行部としては来年度以降、新たに同窓会費を徴収する方針ですが、その考え方を説明したいと思います

函館ラ・サール学園同窓会事務局長
6期

伊藤 恒敏



1. トークセッションでの議論
2. 同窓会の現在の事業
3. 会員数の増大と従来の会費収入のバランス
4. 今後も継続しなければならない事業
5. お願い
6. 今後、1年間をかけて徴収額やその方法などについて詰めます

1. トークセッションでの議論

2010年10月23日の50周年記念行事の中で開催された「トークセッション」。その中で「同窓会運営のあり方」というテーマでパネルディスカッションが行われました。そのトークセッションで話し合われ、おおよそコンセンサスが得られたものから「提言」がなされましたが、その中に同窓会費に関して次のような記述があります…

4. 会費の考え方、会務と財政

以下の二つの理由から、トークセッションEでは卒業時の永年会費以外に卒後、一定の期間を経た会員から新たに会費を徴収すべきだという結論になった。

金額や卒後何年で降から会費を徴収するか、また支部会費との整合性、仕分けなどについては今後の「あり方委員会」に議論を委ねる。

①全国横断的な同窓会本部体制とするためには、現在、卒業生総数が13、000人を越えている現状、今後の会務の仕事量(会員の消息の掌握)などを考慮すると、専従を置いて会務を処理する必要性に迫られる。専従を雇用するためには、現在の会費収入(卒業時に納入する永年会費)では不足を生じることが明らかなので、新たな収入を考えなければならない。専従に割り振るべき会務については今後のあり方委員会に検討を委ねる。

②今後、少子化などの状況もあり学園の卒業生数は2000人前後から増加する傾向は考えにくく、これまでの会費収入の増加は見込めない。一方で永年会費を保護者に納めて貰った会員がその後、自ら会費を納めることなく後輩が納入した会費に同窓会の活動費のすべてを依存するというのは道義的にも受け入れがたい状況ではないか。

提言にこうして会費問題が盛り込まれたもつとも象徴的な支配的な気分であり、トークセッションEでの議論の本質的なものの一つは、「保護者に納めて貰った永年会費(卒業時に1ヶ月分の月謝を払い込む…本人が払うのではなく保護者が支払う)のみで同窓会運営というのは道義的にあり得ないのではないか」というものでありました。

あり方委員会が2011年1月に立ち上がってほぼ1年間をかけて新同窓会について議論しました(本誌「同窓会組織改編と会則の改定について」を参照)が、この会費問題だけ、あり方委員会で時間切れとなり「先送り」されてしまいました。

トークセッションから同窓会運営のあり方問題に関わってきた私としては、同窓会費問題はどうしても避けて通れない重要な問題だ、という認識が強くあります。それにトークセッションで述べられた重要な気分、「保護者に納めて貰った永年会費のみで同窓会運営というのは道義的にあり得ないのではないか」が強烈な意識として頭の真ん中を占めています。何とかしなければなりません。

2. 同窓会の現在の事業

新体制となって新しい会則が制定されました。その第6条に次のように本同窓会の事業を謳っています。

第6条 この会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 函館ラ・サール学園卒業生との消息把握と名簿作成およびその管理のための事業
- (2) 函館ラ・サール学園、仙台ラ・サールホームおよびラ・サール会の要請に応じた寄付事業
- (3) 函館ラ・サール学園の在校生に対する奨学金助成事業
- (4) 各支部に対する補助金交付を通じての支部活動支援事業
- (5) 函館ラ・サール学園同窓会員に対し会報を発行する事業
- (6) 函館ラ・サール学園同窓会員から会費を徴収する事業
- (7) 函館ラ・サール学園と函館ラ・サール学園同窓会が共催する種々の記念事業の企画実行
- (8) ラ・サール学園同窓会（鹿児島）および世界ラ・サール同窓会との連携事業
- (9) その他前条の目的を達成するために必要な事業

従来の規模で考えますとこれらの事業におおよそ、700万円が必要となります。これが当然ではありますが、会費収入で賄われています。収入も約190人の卒業生が支払った700万円弱がほとんどすべてです。

3. 会員数の増大と従来の会費収入のバランス

よく考えれば分かることではありますが、この状態が続けるということとは、同窓生数が増えているのに対して毎年の卒業生数は一定数で変化しない。卒業生数はむしろ、在校生が減少を続けている状況では卒業生は減少しているのです。こうした現実を直視すると、収入は減る、しかし、支出

は増える、という状況が続くことになります。

日本人男性の平均余命が約78歳です。この年齢まで全員が生存すると非常に粗く仮定しますと、現在50期が卒業した時点での同窓会員数が13,419名であることを考えれば、少なくともあと11年間同窓生数が増え続け、同窓生数全体では15,000余名になると考えられます。現在よりも2,000名同窓生が多い状態の同窓会を現在よりも少額の収入で運営しなければならぬ、ということになるのです。どう考えてもギリ貧状態であり、収入を増やさないのであれば、経費を切り詰め、事業を大幅に縮小せざるを得ません。

青天井の予算増は決してあり得ないことですが、一方で手を拱いてギリ貧になる同窓会運営を続けるわけにもいかないと強く考えるものです。

4. 今後継続しなければならない事業

会則第6条に謳われた事業のうち、会員の消息管理、学園やラ・サールホームへの寄附事業や、在校生への奨学金助成事業、世界ラ・サール同窓会との連携事業などは今後も同窓会が続く限り、特に継続していかねばならない事業だろうと思われまます。

話を分かりやすくするために、(3)の母校の在校生に対する奨学金助成事業を考えてみます。これ以外の事業がほとんど一般会計の中で扱われるのに対して、(3)奨学金助成事業だけは、「奨学金会計」で扱われています。

問題は現在のシステムでは「奨学金会計」に予算が流れ込む装置が作られていないのです。バブル時代には預金に対して十分な利子が付いて、その利子だけでも奨学金助成事業を運営できた、と聞いていますが、低金利時代が延々と続く現状ではとてもかかつてのような状況は期待できません。低金利になって以来、奨学金助成に当てられる預金を補充するシステムが作られていないのです。当然、預金を取り崩して助成されているこの奨学金は、預金が無くなればそれで終わり、のシステムとなっています。このまま

の状態で推移すれば早晚、この「奨学金会計」は消滅することになります。

奨学金助成事業以外にも推して知るべし、の状況です。

5. お願い

新同窓会が発足したばかりの時期ではありますが、既に述べたような同窓会の財政状況であり、また近い将来、予算不足が予測される事態に、同窓会事業の継続を考えるとすると、どこかの時点で、同窓会費を、現在以上に集める必要に迫られるのです。

最終的には理事会で考えたことを、評議員会に充分に説明して評議員会の審議を経て承認してもらわなければなりません。現時点(2012年4月17日)では、理事会としては同窓会員に対し、会費徴収をお願いをしたいと考えています。

もちろん、卒業時に「永年会費」として徴収している現状も重く考えた上で、どのようにすべきか、詰めていかなければなりません。現在考えています「試案」は、卒業後、一定の年限を経過した時点で、同窓生に会費徴収をお願いするというものです。「一定の年限を経過した後」というのが具体的には卒業後20年を経過してから、とか、あるいは年令が40歳となった時から、あらためて会費の納入をお願いする、ということになるのではないかと考えています。

当然のことながら額はどれくらいが適切か、ということも考えるべき重要なポイントだと理解しております。同窓会員にとって心理的負担とならない額が望ましく、一方では同窓会運営にとって望ましい額であることも考えなければなりません。

いずれにしても難しい判断ですが、状況から判断して、決断は早晚、しなければならぬと考えております。

6. 今後、1年間をかけて徴収額やその方法などについて詰めます

既に述べましたように、このお願いの原稿を執筆している時点では、会費を徴収する方針は理事会で決定されましたが、評議員会はまだ開催されておらず、評議員会での承認はされておりません。今後、1年間をかけて、徴収額や、徴収を始める時期、具体的な徴収方法などについて多くの会員の賛同を得られるように、案を詰めていく予定です。1年後に、より具体的な案を理事会および評議員会で議論することになります。多くの同窓会員の意見を集めるためにも、具体的な案がまとまった時点で早期に各支部を通して提案をしたいと考えています。

この稿で述べた内容はまだ会員に対しての具体的な提案の形にはなっておりません。が、ここで述べました事情、状況をご理解いただいて、来年の提案の際には、同窓会員の深く暖かい理解を賜りたく、事務局からのあらかじめのお願いを申し上げる次第であり、心からのお願いの予告といたしたいと考えております。

母校創立50周年記念 募金活動結果報告

募金活動実行委員長

1期

菅野剛造

早いもので、あの感激の母校創立50周年記念祝賀会からもうすぐ2年になりますが、その際、母校の要請により、同窓会会員各位を対象に、高校寮新築費用の一部に充当をすべく寄付金を募りました。昨年発行の会報にて昨1月末時点での途中経過をお知らせいたしました。今回、会報発行を機に、改めて、結果を報告します。

結果として、締め切り期日とした昨年3月31日現在の寄付金総額は1億2,637万4千円、募金者数は958名でした。寄付金は目標の3千万円を大きく上回るもので、母校の要請に応えるに

十分な額です。募金に応じて下さった会員の皆様に心から感謝いたします。

ただし、事実を申せば、この総額は、たった1人の同窓生が1億円もの巨額を寄付してくださったことによるものであって、この分を除くと、寄付額は僅か2,637万円であり、目標の88%に過ぎません。しかも、更に残念なのは、募金者が958名に止まったことです。物故者を除く同窓会会員は既に1万3千人を超え、うち約7千8百人の消息が判明していますが、募金者はその僅か12%余に過ぎないのです。

母校としては、同窓会が目標額を大幅に上回る1億円以上を集めてくれたことに満足しているかも知れませんが、委員長の間を離れて、同窓生として振り返ってみても、残念でなりません。

同窓会としての募金活動は昨年3月末で終了しましたが、母校は今も募金を受け付けています。同窓生の皆様には1人でも多く寄付金をお振り込みいただきました

く、お願いします。

◆振込先

・北洋銀行 湯川支店

普329—3441875

口座名義

学校法人函館ラ・サール

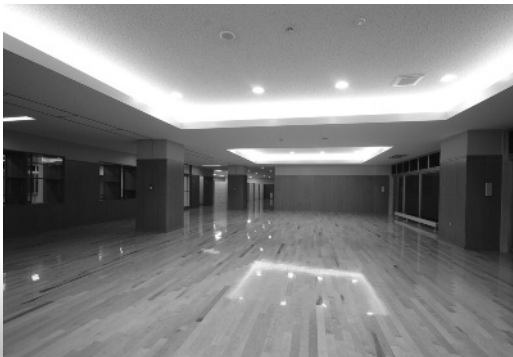
学園50周年記念事業口

理事長 ラベル・アンドレ

・その他、郵便振込も可能です。

※振込の詳細は、

☎0138—52—0365へ



高校新寮



札幌支部

札幌支部 支部長
7期 宮永雅己

札幌支部は平成3年11月アンリ・ラクロワ校長をお招きし、吉澤慶信氏(1期) 当時北海道庁勤務)を会長、長谷川裕崇氏(8期) 当時札幌市役所勤務)を事務局長として発足を見ましたが、間もなく世話役の長谷川氏の転職により一時活動が停止状態となりましたが、平成7年6月に田村政志氏(4期)が北海道副知事に就任された事を契機として1期生より14期生合わせて108名が集って祝う会を開催し、坂丈敏氏(4期)を会長、枋内佑之氏(4期)を幹事長、長谷川裕崇氏(8期)を事務局長として再出発をみました。

平成9年8月9日に開催された同窓会本部総会において坂会長が本部の副会長に就任することが決定されました。以来、佐藤

〈日時〉	〈担当〉	〈会場〉	〈講師〉
平成10年6月12日	(X5 期)	ホテルアルファサッポロ	
平成11年6月26日	(X6 期)	札幌クラブハイツ	
平成12年9月1日	(X7 期)	札幌後楽園ホテル	
平成13年9月21日	(X8 期)	"	丸谷智保氏 (11 期)
平成14年9月7日	(X9 期)	ホテルライフォート札幌	山田寿彦氏 (18 期)
平成15年9月13日	(X0 期)	ホテルノースシティ	田中士郎氏 (9 期)
平成16年9月11日	(X1 期)	"	西村孝司氏 (10 期)
平成17年9月10日	(X2 期)	"	梶谷恵造氏 (13 期)
平成18年9月9日	(X3 期)	"	玉山和夫氏 (10 期)
平成19年9月15日	(X4 期)	センチュリーロイヤルホテル	宮田昌利氏 (17 期)
平成20年9月20日	(X5 期)	ホテルノースシティ	石川知裕氏 (30 期)
平成21年9月26日	(X6 期)	センチュリーロイヤルホテル	津嶋徳一氏 (16 期)
平成22年10月22日	(X7 期)	京王プラザホテル札幌	辻 昌宏氏 (9 期)
平成23年9月24日	(X8 期)	"	(50 周年パステアー) 守 真氏 (8 期)

正知氏(5期)、石原 観氏(6期)へと会長が引き継がれ、平成13年9月より私、宮永雅己(7期)が会長を務めております。

再出発以来、支部総会は毎年開催され、当初は総会・懇親会の流れで行っていましたが、平成10年より総会の運営を下一桁を

同じくする期で担当する事とし現在も続行しており、平成12年から総会・講演会・懇親会の企画で定着し毎年9月に開催して参りました。その間、平成15年6月28日には「北海道副知事 吉澤慶信さん(1期)・北海道新聞社社長 菊地育夫さん(1期)」を囲む会「ホテルライフォート札幌にて開催を主催致しました。また、平成18年より支部体制の強化に務め、各期の代表幹事を構成員とする幹事会を2ヶ月毎に開催するところとなり、30期・31期の若いメンバーも参加するところまで拡大して参りました。平成24年より原則9月第1土曜日に固定して総会を開催することと致しました。

同窓会員の親睦と交流を深める為の新規事業としてゴルフ会を企画し、「函館ラ・サール高校同窓会札幌支部 宮永会長杯争奪ゴルフ大会」と銘うって、ハッピーバレーG.C.(当別町)で開催することを決め、平成20年6月7日に第1回目を開催し、8回目を終了しました。

- 平成23年度事業計画
(23年9月～24年8月)
1. 総会開催準備(幹事期X9期)
平成24年9月1日(土)
 2. 同窓会「あり方委員会」
への積極的関与
 3. 幹事会開催(原則2ヶ月
に1回)

[宮永会長杯争奪ゴルフ大会 結果] (於) ハッピーバレーG.C.

	〈日時〉	〈優勝〉	〈準優勝〉	〈ブービー〉
第1回	平成20年6月7日	宮永雅己(7期)	太田徳昭(7期)	表 辰悟(24期)
第2回	" 10月11日	太田徳昭(7期)	坂 俊英(31期)	中川道広(5期)
第3回	平成21年7月4日	宮永雅己(7期)	一瀬博美(5期)	佐々木貴年(31期)
第4回	" 10月4日	宮永雅己(7期)	菅野 隆(7期)	斉木祥則(5期)
第5回	平成22年7月3日	石原 観(6期)	小川賢一(6期)	守谷保夫(5期)
第6回	" 10月16日	(大雨の為中止)		
第7回	平成23年6月18日	石原 観(6期)	宮永雅己(7期)	斉木祥則(5期)
第8回	" 10月16日	一瀬博美(5期)	武者主信(6期)	斉木祥則(5期)

平成23年度(23年9月～24年8月)収支予算

(収入)

	金 額	備 考
前年度繰越金	710,498	
同窓会本部支援金	300,000	
幹事会参加費	100,000	
総会返戻金・益金	10,000	
雑収入	5,000	
(計)	(1,125,498)	

(支出)

	金 額	備 考
幹事会	300,000	
同窓会対策費	200,000	
PTA札幌支部交流費	50,000	
東京支部同窓会参加費	120,000	
函館本部同窓会参加費	60,000	
親睦事業支援金	120,000	
札幌支部事務局費	50,000	
雑費	10,000	
予備費	50,000	
翌年度繰越金	165,498	
(計)	(1,125,498)	

4. 他支部総会への役員派遣
(参加・人事交流)
函館本部総会への派遣
(平成23年11月5日)
5. 東京支部総会への派遣
(平成24年6月16日)
6. ラ・サール世界大会(マニラ)
への派遣(平成23年10月27
日～30日)
PTA札幌支部との交流
親睦会(ゴルフ大会)の開催
平成23年10月16日
平成24年6月30日

- 函館ラ・サール学園同窓会
札幌支部
【平成23年度 役員】
- ▼支部長(会長) 宮永雅己(7期)
 - ▼副会長 長谷川裕崇(8期)
 - ▼事務局長 玉山和夫(10期)
 - ▼事務局次長 津島伸次(15期)
 - ▼幹事 藤田 倫(17期)
 - ▼監査役 大屋知之(12期)
 - ▼顧問 アンドレ・ラベル理事長
 - ▼事務局員 津嶋徳一(16期)
 - ▼小田 厚(16期)
 - ▼高橋 司(23期)
 - ▼表 辰悟(24期)
 - ▼久保 光之(25期)
 - ▼白戸 康一(25期)
 - ▼畑 貴裕(27期)
 - ▼坂 俊英(31期)
 - ▼(各期)

平成24年度 札幌支部総会

日 時：平成24年9月1日(土)

総 会 16:30～ 講演会 17:30～
懇親会 18:30～

場 所：アートホテルズ札幌

北海道札幌市南9条西2丁目
TEL.011-512-3456

- ▼会計 藤田 倫(17期)
- ▼監査役 大屋知之(12期)
- ▼顧問 アンドレ・ラベル理事長
- ▼事務局員 津嶋徳一(16期)
- ▼小田 厚(16期)
- ▼高橋 司(23期)
- ▼表 辰悟(24期)
- ▼久保 光之(25期)
- ▼白戸 康一(25期)
- ▼畑 貴裕(27期)
- ▼坂 俊英(31期)
- ▼(各期)

函館支部

函館支部 支部長

12期 佐藤 友康

新参者、それは函館支部

昨年の11月に同窓会の組織が大きく変わりました。

その一番が函館支部発足です。母校に一番近い支部です。概ね渡島半島にお住まいの卒業生をもって構成します。

同窓会発足以来の函館の地での同窓会総会は、今年から函館支部総会として函館支部管内の同窓生の皆さんにご案内を申し上げます。40年以上にわたり諸先輩のお骨折りの上に続けられてきました総会、懇親会をさらに発展させるべく、支部役員を始め支部会員の方々に良い思案をお願いしている最中です。

いまだ実績のない支部活動ですが、今年の総会、懇親会に向けた話し合いの方向性をここに表し、重ねて支部の皆さんのアイデ

アもお願いしたいと思つて居ります。

今年は2012年でありますので、下二桁が2の期の卒業生に、総会、懇親会の開催のための実行委員をお願いしたく、連絡を差し上げました。今のところ、「俺がやる」と言う方がいないので、今年は役員を主に企画、実施する予定です。

懇親会に先立ちまして、講演会を実施の予定です。母校に近い立地を生かし、同窓生のみならず、昔や今の先生も講師の候補の中にと考えているところです。

話は戻りますが、支部活動の手始めとして、支部の存在を明らかにする事に努めます。多くの同窓生に総会、懇親会に出席するように促すためのハガキを出したいと考え、住所の確認を各期の皆さんの協力の下実施致しました。協力をいただいた方々にこの場をお借りして感謝を申し上げます。

支部ができたとはいえ、当初は同窓会本部からの「仕送り」のみが活動の原資という脆弱な財政

基盤の上にあり、自ずと限られた活動になりそうですが、無駄をせず、無理もせず、無茶もせずに支部活動を行っていきたいと思つて居ります。そして、函館支部の同窓会は、旧・現教職員、PTAが一体となった運営がなされているということが特徴の一つにしていこうとできれば、と考えているところです。

そのためには、支部総会、懇親会に多くの同窓生にいらしていただいて、ご意見をいただき、且つまた支部会費を負担していただく事により、活動の幅を徐々に広げて行きたいと考えております。

また、他の支部との交流も大切ですので、他の支部で総会がある時には役員の派遣をし、情報の交換等を通じて支部間の連携を図りたいと考えています。

他の支部の皆さんにも「函館支部」を覚えていただき、函館支部の皆さんには、総会、懇親会に気楽に出席してもらい、「ああ、同窓会だなあ」と思ってもらえるような企画を考え、今年初めての支部

総会を迎えるつもりで居ります。

今年の函館支部総会は8月25日(土)です。

午後5時 〃支部総会
午後5時30分 講演会
午後6時30分 懇親会
午後8時30分 終了予定

是非、函館支部の第二回目の総会、懇親会に、多くの同窓生が集まっていたくことを、函館支部役員一同期待しております。

平成24年度 函館支部総会

日時：平成24年8月25日(土)

総会 17:00～ 講演会 17:30～
懇親会 18:30～

場所：ホテル函館ロイヤル
北海道函館市大森町16番9号
TEL.0138-26-8181

東北支部

東北支部 事務局長

6期 伊藤 恒敏

東北支部の活動報告

1. 東北支部の歴史
2. 東北支部の誕生…本部との接触
3. ラ・サールホームとのかかわり
4. アイディア
5. 東北支部総会
1. 東北支部の歴史
東北支部の活動報告をするのに、まずはわれわれの支部の歴史から始めたい。下記に50周年記念行事の際に作成した東北支部の歴史を記す。

函館ラ・サール学園同窓会東北支部(前身は仙台ラ・サール会)の歴史

1993年	9月	第1回 函館ラ・サール高校同窓会仙台支部 開催:懇親会のみ 函館出身者の会が仙台で活動:函館ラ・サール卒業生に勧誘がありそれを契機に函館ラ・サール高校卒業生の仙台同窓会を呼びかける
1994年	10月	第2回 函館ラ・サール高校同窓会仙台支部 開催:懇親会のみ
1995年	10月	第3回 函館ラ・サール高校同窓会仙台支部 開催:懇親会のみ
1997年	10月	第4回 函館ラ・サール高校同窓会仙台支部 開催:懇親会のみ
1998年	9月	第5回 函館ラ・サール高校同窓会仙台支部 開催:懇親会のみ
1999年	9月	第6回 函館ラ・サール高校同窓会仙台支部 開催:懇親会のみ
2001年	9月	第7回 函館ラ・サール高校同窓会仙台支部 開催:懇親会のみ
2002年	10月	第8回 函館ラ・サール高校同窓会仙台支部 開催:懇親会のみ 函館ラ・サール高校同窓会仙台支部(仙台ラ・サール会)として会則を了承→ラ・サールホームへの寄附のための口座開設のため
	12月	仙台ラ・サールホームへの寄附(クリスマス会)
2003年	9月	第9回 函館ラ・サール高校同窓会仙台支部 開催:懇親会のみ
	12月	仙台ラ・サールホームへの寄附
2004年	2月	臥牛会でラ・サールホーム 石井恭一理事長の講演を依頼
	10月	第10回 函館ラ・サール高校同窓会仙台支部 開催:懇親会のみ
	12月	仙台ラ・サールホームへの寄附 (クリスマス会)
2005年	9月	第11回 函館ラ・サール高校同窓会仙台支部 開催:懇親会のみ
	12月	仙台ラ・サールホームへの寄附 (クリスマス会)
2006年	10月	第1回 函館ラ・サール高校同窓会「東北支部」 設立総会(通算12回)開催 遠藤八郎氏が2006年4月の東京同窓会で講演を依頼され、函館ラ・サール高校同窓会仙台支部のことを紹介:伊藤事務局長が出席していたところ、齊藤会長、星野事務局次長から東北支部を立ち上げてほしい旨、勧められたことによる 来賓:アンドレ・ラベル理事長、フェルミン・マルチネス校長、ロドリゴ・テレビーニョラ・サールホーム園長、石井恭一仙台ラ・サールホーム理事長、齊藤会長、清水事務局次長、星野事務局次長
	12月	仙台ラ・サールホームへの寄附 (クリスマス会) 東北支部全体へ寄附のお願いを広げたと、約50万円が集まる
2007年	10月	第2回 函館ラ・サール高校同窓会「東北支部」 総会(通算13回)開催 浅井泰博氏(5期)講演「遺言書の書き方」 来賓:アンドレ・ラベル理事長、フェルミン・マルチネス校長、ロドリゴ・テレビーニョラ・サールホーム園長、石井恭一仙台ラ・サールホーム理事長、齊藤会長
	12月	仙台ラ・サールホームへの寄附 (クリスマス会)
2008年	10月	第3回 函館ラ・サール高校同窓会「東北支部」 総会(通算14回)開催 番地英夫氏(14期)講演「最近のお墓事情」 来賓:アンドレ・ラベル理事長、フェルミン・マルチネス校長、ロドリゴ・テレビーニョラ・サールホーム園長、齊藤会長
	12月	仙台ラ・サールホームへの寄附 (クリスマス会)
2009年	10月	第4回 函館ラ・サール高校同窓会「東北支部」 総会(通算15回)開催 藤村朗氏(10期)講演「癌の治療法ー化学療法を中心にー」 来賓:アンドレ・ラベル理事長、フェルミン・マルチネス校長、ロドリゴ・テレビーニョラ・サールホーム園長、齊藤会長
	12月	仙台ラ・サールホームへの寄附 (クリスマス会)
2010年	10月	第5回 函館ラ・サール高校同窓会「東北支部」 総会(通算15回)開催 開催月が50周年記念式典と重なるため、書面での開催
	12月	仙台ラ・サールホームへの寄附 (クリスマス会)
2011年	10月	第6回 函館ラ・サール高校同窓会「東北支部」 総会(通算16回)開催 ラ・サールホーム見学会開催 8名が参加 松村利己氏(JSA認定 ソムリエ、SSI認定 利き酒師)による講演 「ワインを楽しく学び、ビジネスでも活用する方法」 来賓:アンドレ・ラベル理事長、ロドリゴ・テレビーニョラ・サールホーム園長、齊藤裕志会長
	12月	仙台ラ・サールホームへの寄附 (クリスマス会)

われわれの支部は前記にあるように、仙台にある「函館の会」（宮城県函館臥牛会）に参集を誘われたことを契機に「同窓会」（前身の「仙台ラ・サール会」）の結成を呼びかけ、最初の懇親会を1993年にもったのが活動の嚆矢となる。

2. 東北支部の誕生…本部との接触

その時点で、函館ラ・サール学園の卒業生が宮城県内に70名ほど、在住している、ということが分かった。その方々に連絡を出して、懇親会を呼びかけたところ15名程度が参加された。

その後、毎年のように（途中、2年ほど、開催を見送った年があるが）懇親会には15名から20名程度の同窓生が参加していた。この頃、同窓会函館本部と連絡を取るべきだ、取らなければならぬ、という議論は自然発生的には起こらず、本部からはまったく孤立した状態で数年以上、活動を続けていたことになる。

歴史の項に記載したとおり、われわれ「仙台ラ・サール会」が本部とコンタクトをもったのは2006年以降。私が東京支部の総会に出かけ、その際に仙台にも頻繁に参加していた遠藤八郎氏（3期）が講演の中で、仙台の活動を紹介していただいたのがきっかけとなり、懇親会の時に、その東京支部総会に同じく参加していた齊藤裕志会長（5期）や、星野裕事務局次長（5期）が私に接触を求めてきた、というのが端緒となった。齊藤会長も星野事務局次長も実に熱く、仙台に東北支部を作ってほしい、と私に訴えた。

仙台に戻ってから馬場亨氏（3期）や、滑川明男氏（18期）、あるいは小笠原博信氏（26期）等に相談し、翌年には東北支部としての総会開催を何とかしよう、ということになって、早速、函館の本部に東北地方在住の名簿を送ってもらうようにし、東北支部立ち上げの準備が始まった。支部となることで、思いもかけ

ず、年間30万円の補助金も交付してもらえなくなった。一部有志からの寄付金を貯金としてそのわずかな貯金を取り崩す形で「仙台ラ・サール会」を運営していたものにとっては、予期せぬ天からの恵みであった。

3. ラ・サールホームとのかかわり

話を少し前に戻す。

仙台という街にはラ・サールホームがある。個人的なことは傍らにおいても、われわれ函館ラ・サール学園の卒業生が、この養護施設に恒久的に無関心でいることは道義的にあり得ない。推察だが、こうした意識が働いたに違いない。懇親会だけの同窓会活動に問題を感じたのか、同窓会で寄附を募り、集まった金額をラ・サールホームへ贈ることにしてはどうか、という意見が出て、反対もなく、意見はすぐに実行されることになった。2002年頃の話である。郵便局に寄附のための口座開設のため、その届出に「仙台ラ・サール会」とし

ての会則を提出しなければならぬことが分かって、急遽、会則を作成し、集まった同窓生に承認してもらって、早速募金活動に入った。ラ・サールホームへの寄附を集める口座はそれまでの会が持っている口座とは全く別のものにした。寄附と言って集めた金額からはそれ以外の目的には決して流用しないように、というのが理由だった。寄附を集めるための費用は会が保有するもう一つの口座に徴々たるものではあるがストックされていた預金から拠出された。

とは言っても宮城県内にしかその活動範囲を拡げていなかったので、懇親会への参加者が毎年、15人から20人前後、名簿上には70人前後の名前が登録されているものの、毎年の寄附総額は15万円前後にとどまるものだった。集まったものをまとめて年末のクリスマス会に時期を合わせる形で差し上げていた。真にラ・サールホームの役に立ったか、は額が些少すぎて疑

問だったが、しかしできることをやるしかない、という考えで続けた。

そこに、函館本部から東北支部を立ち上げてほしい、という要請が入った。2006年のことである。函館の本部から東北地方に在住する約500人近くの名簿を預けられ、一気に扱う人数が増えた。それでも何とか名簿に登載されている同窓生全員に總會の通知の度に「ラ・サールホームへの寄附」をお願いを続けた。

2006年7月頃までに方針を決めて、早速、「東北支部」としての総会案内を500人の同窓に送った。もちろん、ラ・サールホームへの寄附もお願いした。

予想は全くできなかった。宮城県以外の人にはラ・サールホームは馴染みが薄いだろうし、宮城県内に在住する1000人弱の同窓に呼びかけて約15万円。額が問題なのではないのだが、それでも気になっていた。

結果として、東北地方在住者から約50万円の寄附が集まっ

た。喜ばしいことだ、と一人で喜んだ。中にはお一人で10万円を寄附する方もいたのには大変驚いた。われわれの同窓会はたいしたものだ、同窓の中にはこんなに立派な方がいる、素直に純粋に思った。

翌年からはラ・サールホームと相談し、寄付者の名簿およびその金額のリストをお渡しし、各寄付者に免税の措置ができるラ・サールホームからの領収書を送付してもらうことにした。さらにその翌年からはロドリゴ・テレビニョ園長にお礼状も添えてもらうことにした。

以後、ラ・サールホームへの寄附を毎年東北支部の同窓会員にお願いし、集まった額を12月のクリスマス会にお届けしているが、2006年以降、毎年おおよそ50万円前後の寄附をお贈りしている。お一人で10万円を寄附された方はこれまで毎年10万円を寄附されておられる。頭が下がる思いだ。昨年、東日本大震災関連で、年度途中でラ・サールホ

ームへの寄附が呼びかけられた際にも東北支部のある方が何十万円かの大金を寄附された。私はラ・サールホームの職員ではないけれども、実に喜ばしい気分を一人で味わうことができた。こうした喜びを多くの方と共有したいけれども、一種の守秘義務であり、ここに記した以上のことはお伝えできないのが残念である。ただ、東北支部がその地域にラ・サールホームと共にある、という連帯は果たせているかな、と喜んでいる。

東北支部となつてからこれまで、あまりラ・サールホームをご存じない方のために総会開催当日にラ・サールホーム見学会を何度か開催している。2011年に再開し、今後は多分、毎年見学会を開催する予定である。

4. アイディア

東北支部ではあるアイディアをもつていて、もしラ・サールホームにいる子供の中で成績優秀者がいて、函館ラ・サール学園に入

学できる学力を持っているのであれば、そうした子のために特別の奨学金を作つて、4・5年に一度のそうした子供のために、本人が函館ラ・サール学園への入学を希望するのであればその希望をかなえられるよう、何とかしたい、と考えている。まだまだアイディアの状態だが、何とか準備したいと切望している。

もう一つの東北支部のアイディアは、東北支部のこのような毎年の寄附を、ぜひ、全国の函館ラ・サール学園の同窓の皆さんに呼びかけて、寄附を募る運動を拡げたい、と考えているということだ。同窓会本部からは毎年ラ・サールホームへの50万円の寄附を予算として執行しているが、同窓生一人一人がラ・サールホームのために、ある種の思いを1年に1度、表しても良いのではないかと、思っている。東北支部で考えたアイディアであり、まだ本部執行部にも提案していないが、近い将来、是非具現化したい、と強く考えている。

5. 東北支部総会

東北支部の総会のことの後回しになったが、年に一度、10月の第2土曜日を開催予定にしている。東北支部には前にも述べたが約500人が名簿に載っているが、総会にはそのうち、多いときで40人程度が参加している。東北6県をカバーしているつもりだが、青森から仙台、あるいは秋田から仙台に移動するためには、よそで考える以上に時間を要する。仙台で一泊を考えなければとても参加できるものではない。そういうこともあつて参加者はなかなか増えていかない状況にある。

総会はいしかし、継続することが重要だ。今年度も2012年10月13日の土曜日に開催することが決まっている。秘策があるわけではないが、意気込みとしては、例年以上の参加者を呼びびみたいと考えている。

これまで、会員の「掘り起こし」の意味で青森市と盛岡市に出かけて懇親会を開催したこと

があるが、そうした会員の掘り起こしに秋田県、山形県、福島県に出向かなければならないと痛感している。

今後もうこうした東北支部の、地味だが、重要な活動をしているつもりなのれわれに全国からの支援をいただければと、東北支部の同窓会員は強く念願している。



総会全体



総会での記念講演



総会での岡村会長



テレビニヨ園長

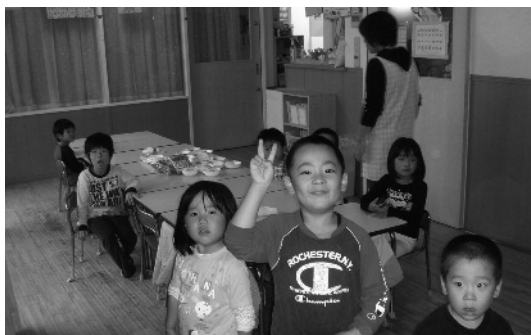
平成24年度 東北支部総会

日時：平成24年10月13日(土)

総会 17:00～ 講演会 17:40～
懇親会 18:20～

場所：江陽グランドホテル

宮城県仙台市青葉区本町2丁目3-1
TEL.022-267-5111



ラ・サールホーム見学会で

東京支部

東京支部 事務局長
14期 林 完自

■活動状況(平成23年度)

【総括】

平成23年度、東京支部の活動は実質10年目を迎えました。今期は、「東京支部らしい活動の拡充」に力点を置き、東京支部としての役割を果たすべく活動しました。

6月の総会は、「函館ラ・サールのここがすごい!」というテーマで開催され、OB212名、来賓、鹿児島校東京同窓会から計244名にご参加いただきました。恒例の講演会は、放送作家・作詞作曲家として活躍される11期植竹公和氏にご登壇いただきました。巧みなお話とともに恩師たちの貴重な授業音源、メッセージから、「母校のすごい」を感じるとともに、我々に脈々と流れるラ・サール遺伝子を確認することができ

ました。また、演奏会では、11期藤井眞吾氏、川村裕司両氏というビッグプロ奏者によるクラシックとジャズの協演という、「母校のすごい」を五感で感じるひと時となりました。

学生OBを支援する活動としては、第2回「就職について考える会」を1月に開催し、大学生と社会人OBアドバイザーによる熱いディスカッションを行いました。学生の方々が、ご自身の将来を考える上で、社会人OBの経験、業界の将来の見方、業界の慣習などを提供する場となりました。

今年度の部会活動として、音楽部会においては、鹿児島校東京同窓会の賀詞交換会での南北コラレーション、函館校東京支部総会、鹿児島校東京同窓会総会での披露をはじめ、10月には第5回ラ・サール世界大会の晩餐会にて、日本からの総勢60名のコラレーション演奏に参加し、その成功への推進に貢献いたしました。PTA関東支部との連携活動としては、恒例となった「卒業生

から保護者へのメッセージ」が11月に開催され、14期佐藤秀樹氏の基調講演、OBパネラーとのパネルディスカッションを通じてさらに連携を深めております。

このほか「ラ・サール育英基金委員会」「海外交流委員会」で南北交流活動が継続しています。

【1】役員会

月 日	項 目	活 動 内 容
平成23年4月15日	第1回役員会	2011年総会準備
平成23年5月6日	第2回役員会	2011年総会準備
平成23年5月20日	第3回役員会	2011年総会出席者最終集計、総会役割分担
平成23年6月4日	第4回役員会	定例役員会
平成23年7月15日	第5回役員会	2011総会反省会(決算等)
平成23年9月16日	第6回役員会	2012年総会準備 他
平成23年10月14日	第7回役員会	2012年総会準備 他
平成23年11月11日	第8回役員会	2012年総会準備 他
平成23年12月16日	第9回役員会	2012年総会準備進捗報告 他、忘年会
平成24年1月13日	第10回役員会	2012年総会準備進捗報告 他
平成24年2月17日	第11回役員会	2012年総会準備進捗報告 他
平成24年3月16日	第12回役員会	2012年総会準備進捗報告、案内状発送 他

【2】ミニ講演会 (講演要旨は <http://www.geocities.jp/hlstokyo> に掲載)

月 日	講 師	テーマ
平成23年9月16日	古旗達夫氏(4期)	ショッピングセンター(SC)の今・・・ ～その活用の仕方から～
平成23年10月14日	佐藤秀樹氏(14期)	被災地日立のガス事業者の対応と これからのエネルギーマネジメント
平成23年11月11日	佐藤正彦氏(12期)	現場で見るガラパゴス化
平成24年1月13日	花田久于氏(12期)	旅行会社から見るシニア市場と マーケティングアプローチ
平成24年2月17日	高橋一浩氏(19期)	金利マーケットのプロが考える、金 利フル活用・人生のポートフォリオ 構築 題して“スマ金”

役員会(月例会)を中心とした会員同士の交流はすっかり定着しました。月例会への学生OB参加が増え始めていることは嬉しい限りです。今後も、学生OB、若い世代のOB、幅広い期からの参加を求めています。

【3】部会・研究会より

①音楽部会

(<http://www.geocities.jp/hstokyomusic/>)

平成23年度は目覚ましく忙しい活動の年となりました。1月鹿児島校東京同窓会の賀詞交換会を皮切りに始めての南北でのコラボレーションを行いました。初めての参加者も多く40期辻博之氏の指導のもと練習を重ねました。双方の母校で歌い慣らした「ラ・サール賛歌」〔It's a Long Way〕に続き、アズマシモン同窓会歌「ラ・サールの庭」〔風そよぐ丘〕を鹿児島バージョンに変えて披露し、多くの声援をいただきました。

5月の鹿児島校東京同窓会総会、6月の函館校東京支部総会での披露に続き、7月には行徳の夏祭りに参加し、震災復興の祈りの曲も合唱いたしました。10月には、鹿児島14期の会にお招きいただき、定番曲以外に、「小原節」や「グリーンフィールド」などを公表しました。

そして10月には、本年度の最大

のイベント、第5回ラ・サール世界大会(於…マニラ)に参加しました。6日間に及ぶセレモニーの最終日の晩餐会において、南北グリーOBメンバーをはじめ、日本からの参加メンバー計60名のコラボレーションとなりました。世界のラ・サリアン1,500名を前にして1時間の大ステージを披露し、アジアでの初めてのイベントに日本から代表として大きな記念の1ページを刻みました。ステージはラベル先生の熱いラ・サールコールで締めくくりました。参加者は「大舞台に大いに貢献できたことは感慨無量」と述べています。

②ラ・サール研究会

今年度は、趣旨に賛同するメンバーが集い、聖ラ・サールが目指したものの、成し遂げたものの、ラ・サールと教育、私たちや社会にとってラ・サールとは何か、ラ・サリアンとして何をなすべきかについてメンバー各人が研究を深めています。今年度のオープン勉強会として、4月にラベル先生にご講演い

ただき、ラ・サールスピリッツFaith Fraternity Service の理解を深める場となりました。

▼平成23年4月27日

ラベル先生とともに
ラ・サールスピリッツの理解を深める

③ゴルフ部会

(<http://www.geocities.jp/hstokyogolf/>)

年2回の親睦コンペを開催いたしました。

▼平成23年6月18日

第12回コンペ

白鳳カントリー倶楽部

14名参加

▼平成23年11月19日

第13回コンペ

喜連川カントリー倶楽部

12名参加

【4】その他の活動

平成23年5月21日	鹿児島校東京同窓会総会	役員、アズマシモンほか約10名参加
平成23年6月19日	東京支部総会	244名参加
平成23年7月9日	同窓会理事会	役員ほか3名参加
平成23年10月26日 ～30日	世界ラ・サール同窓会同盟 世界大会(マニラ)	14名出席
平成23年10月29日	白楊ヶ丘同窓会東京支部 親睦大会	役員2名出席
平成23年11月12日	PTA関東支部連携企画	佐藤秀樹氏(14期)による基調講演 「①震災を受けた日立、②培われたラ・サールスピリット」 パネルディスカッションにOB3名がパネリストとして参加
平成23年11月5日	同窓会理事会	役員2名出席
平成24年1月23日	鹿児島ラ・サール東京同窓会 賀詞交換会	役員、アズマシモンほか約10名参加
平成24年1月30日	第二回就職について考える会	大学生(14名)とアドバイザー(17名)による カンファレンス

東京支部の今後の活動

2011年11月5日に改正された新たな同窓会(本部)会則は、新たな全国横断的な活動の目的の一つとして「函館ラ・サール学園の健全な発展へ協力し、支援を行い、貢献すること」を挙げています。これは、東京支部がこれまで展開してきた活動の中で育まれ、脈々と引き継がれてきた考え方そのものであり、まさにラ・サールスピリットの現れであると考えられます。

東京支部では「同窓会活動は、思いを」にする会員が相互の協力、共同作業を通じて作り上げていくもの」という考え方に立ち、月例会、ミニ講演会や部会活動の支援を積極的に行っていました。1,600通におよぶ総会案内状の発送なども会員が集い手作りで行っています。また、同窓生の著作を母校図書室に整備する「知の集積」、「創造の森」等、母校への貢献に資する会員の活動を積極的に支援し、取り込んできま

した。

今後も、多種多様な業界で活躍するOBの数や交流機会の多さ、卒業生の進学先や在校生の出身地としての関東地区の重要性、交通の便がよいことによる活動の広がりやすさ等、東京支部の地域特性を最大限に生かしつつ、同窓会活動全体を盛り上げていきたいと考えています。

平成24年度 東京支部総会

日時：平成24年6月16日(土)

総会 13:45～ 講演会 14:45～
懇親会 16:50～

場所：ロイヤルパークホテル(箱崎)

東京都中央区日本橋蛸殻町2-1-1
TEL.03-3667-1111

1964年から1969にかけて函館ラ・サール高校で国語を教えられた津田洋行先生の「横井小楠－東アジア型近代の構想とその現代的意義」と題した特別講演を9月15日に明治大学にて開催いたします。

「横井小楠－東アジア型近代の構想とその現代的意義」 津田洋行先生特別講演会

日時 | 平成24年 9月15日(土) 14:00～17:00

会場 | 明治大学(御茶ノ水校舎)

演題 | 横井小楠－東アジア型近代の構想とその現代的意義

出席・問い合わせの連絡先

1) 後藤誠司(3期): gs094659@kentaku.co.jp

2) 川原光徳(7期): mkawahara@hotmail.com

3) 工藤博己(8期): k-garden@room.ocn.ne.jp

〒111-0032 東京都台東区浅草5-28-9

TEL/FAX.03-3876-0513(自宅) 携帯.090-7289-1167

※会場等の詳細につきましては、6月東京同窓会の総会時の告知や東京同窓会ホームページ(<http://www.geocities.jp/hlstokyo/index.html>)の案内板、函館ラ・サール高校同窓会ホームページ(<http://www.h-lasalle.com/>)にてご連絡致します。

西日本支部

西日本支部 支部長

9期 諸戸 樹一

ご挨拶—できれば先ず

「つなぎ」に徹して

本誌では初めとなりますので、先ずはご挨拶申しあげます。

2011年9月24日(土)に大津市浜町の琵琶湖ホテルにて開催されました支部総会におきまして支部長の任を賜りました9期生諸戸樹一です。道南北部生まれの「道産子」の一人ですが、大学入学時に上洛してそのままこちらに居つくに至り、関西在住期間のほうがもはや倍の長さとなった一人であります。

西日本支部では創立より12年、数越英昭先輩(4期)が支部長として支部を統括されるところに、函館本部との連絡も密に保つてくれましたが、ご体調を崩され、(2011年)4月に退任

をお申し出にされました。ご療養に専念していただくのがいちばんと考え、他の幹事ともども了承はいたしました。誰がどのように引き継ぐかについて同困惑したのは申しあげるまでもありません。「4期生が12年務められたのだから、次は16期生だ」との高説に当方も乗ずればよかったのでありますが、他支部のほとんどの長がまだ二桁台の中で、二桁台の後のほうにまで「飛ぶ」のは忍びないとの思いを抱いたがため、二桁台最後の期の当方に「お鉢が回る」に至りました。ご面倒をおかけしますが、何卒よろしくお願い申しあげます。

このような二代目でありますから、「23年度の活動報告、決算、24年度の活動予定、予算など」の他に「新支部長としての抱負や同窓会への提言など」も本稿において求められておりますもの、先の総会から半年が過ぎた現在も何か特別な抱負や提言が胸中に去来しているわけではありません。ただ、何とかして「つなぎ」の

役割は果たしたいと考えております。それは「家康」から「家光」に「つなぎ」という意味でありますとともに、現在の支部構成においては最遠の支部の同窓生を本部に、そして何よりも母校に「つなぎ」役割を果たしたいという意味でもあります。同窓生は卒業後、年を経ますと自分がよく知る教職員も母校からは少なくなり、直接母校に連絡するのはなかなか難しくなるかと思えます。そのような同窓生に対して、間接的にも母校とつながる機会を、また、同窓生同士や同期生と、鹿児島校はじめ世界のラ・サール同窓生とつながる「入口」を、たとえ年に一度でも継続して提供していくことができればと思っております。

単に往時を懐かしむだけに留まらない同窓会活動のあり方、とりわけ聖ラ・サールの理念に基づくラ・サールボーイに課せられた使命、そしてラベル理事長が提唱されたラ・サール式万歳三唱(Faith! Fraternity! and Service!)

平成24年度 西日本支部総会

日時：平成24年9月8日(土)

追悼の集い 17:00～ 総会 18:00～
懇親会 18:30～ ※時刻は予定

場所：ホテル京阪ユニバーサル・タワー
大阪府大阪市此花区島屋6丁目2-45
JRゆめ咲(桜島)線ユニバーサルシティ駅隣
TEL.06-6465-1001

の意義を自分なりに理解しておりますが、それもこれも同窓生がつながってこそ達成されていくものと考えております。

「つなぎ」の役割のためにも、当面の課題は支部会員の皆様の連絡用メールアドレスの把握であります。

mototo@kyotogakuen.ac.jp
までお知らせください。

ご挨拶の最後に現在の支部役員を紹介いたします。西日本支部の領域はいったいどこからどこま

でなのか、会則の改訂原案を考えた。くれた宮口真介君(36期、現在アメリカ在住)がその地域を条文に盛り込もうとしてくれましたが、結局、自分を西日本支部所属と思う人であればすべて歓迎しようとの結論に至り、厳密な規定は改訂案からは省きました。次の役員諸氏いずれかへのご連絡もお願いします。

副支部長 南 八郎(16期)、丸木智(8期)、佐藤 宏(9期)、山本政友(10期)、山本真司(12期)、竹腰直樹(16期)、成田憲司(16期)、稲田勝司(21期)、宮本雄大(30期)、倉知久嗣(48期)。

2011年度活動報告

2010年9月25日(土)大津市浜町の琵琶湖ホテルにて第12回西日本支部総会及び懇親会を開催後は、何度か幹事会の日程調整を試みるも不首尾に終わり、支部長のご体調もあり、長く幹事会を開くことができませんでした。

ようやく2011年4月17日

(日)に年度第1回の幹事会を大阪の軽食喫茶「ニートーキョー」にて開催。薮越英昭支部長の退任の件並びに仙台商・サルホームへの震災支援金(10万円)の件を了承した他、同窓会会則の改訂案を検討し、次に2011年の度総会及び懇親会を9月24日(土)琵琶湖ホテルにて開催するという行事日程確認を行いました。

6月18日(土)に年度第2回の幹事会をホテル京阪京都の喫茶「ピエモンテ」にて開催。新支部長推薦の件にて長時間の協議の後、総会まで10期山本政友幹事が代行し、総会では9期諸戸樹一幹事を推薦することに決定。その他、改訂規約を最終確認し、総会及び懇親会次第の確認を行いました。が、副支部長の選任は総会後の課題として先送りしました。

7月9日(土)に開催された鹿児島県西支部総会には12期山本真司幹事と30期宮本雄大幹事の2名が参加しました。

また同日に函館にて開催された同窓会理事会及びあり方委員

会には10期山本政友幹事(支部長代行)が参加しました。

9月10日(土)には、薮越英昭支部長宅に支部長を見舞い、総会及び懇親会準備状況等について報告の後、近くの喫茶店にて年度第3回幹事会を開催し、総会提起内容等の確認を行いました。

9月25日(土)、大津市浜町の琵琶湖ホテルにて第13回支部総会及び懇親会を開催しました。函館より理事長ラベル先生に、鹿児島県同窓会よりは長尾俊幸関西支部長様にご列席いただきまし

た。三連休中日での開催が影響してか、残念ながら参加者数が例年よりは1テーブル少ない結果(23名)となりました。

西日本支部会計報告

函館ラ・サル高等学校同窓会西日本支部 会計報告

●2010年度総会期(2010.9.25~2011.9.23)

収入の部(円)		支出の部(円)	
I 前年度繰越金	410,333	III 当期運営費	562,100
		(内訳)	
II 本年度収入	566,032	2010総会費用	368,780
(内訳)		通信費	37,800
同窓会本部より	300,000	会議費	6,940
総会会費収入	266,000	慶弔費	5,250
預金利息	32	交際費	43,000
		寄付金	100,330
合計	976,365	IV 次年度繰越金	414,265
		合計	976,365

注)2010総会費用(宴会費(二次会共一式)344,000+花束、出席者土産24,780)、通信費(総会連絡費37,800)、会議費(幹事会2回お茶代)、交際費(PTA関西支部、鹿児島大阪支部出席費用)、寄付金(4/15 ラ・サルホーム震災寄付金)

●2011年度総会期予算(2011.9.24~2012年総会前日)

収入の部(円)		支出の部(円)	
I 前年度繰越金	414,265	III 当期運営費	370,500
		(内訳)	
II 本年度収入	444,030	2010総会費用	210,000
(内訳)		通信費	50,000
同窓会本部より	300,000	会議費	40,500
総会会費収入	144,000	慶弔費	10,000
預金利息	30	交際費	40,000
		総務費	20,000
合計	858,295	IV 次年度繰越金	487,795
		合計	858,295

注)2011総会費用(宴会費180,000(招待分、写真代含む)+景品他30,000)、通信費(総会連絡費等)、会議費(幹事会1,500×9名×3回)、交際費(他支部等会費)、総務費(事務用品)

平成23年9月24日 函館ラ・サル高等学校同窓会西日本支部

支部長 薮越英昭(4期)
会計幹事 山本真司(12期)
監査担当幹事 丸木智(8期)

函館ラ・サル
高等学校同窓会
西日本支部之印

上記 2010年度総会期の決算会計監査をいたしました結果、収支とも正当であることを認めます。

平成23年9月24日

恩師訪問



谷口巖先生を 訪ねました

金谷 誠

4期

11年12月中旬に、私は瀬戸市の谷口巖先生のところへ、訪問したい旨の電話をかけた。

「金谷君だね。…… じつは、知っていると思うけれど、僕はちょっと神経の病気でね……」

私が直接に谷口邸に伺うことになった。

旅行日程が決まると、私はすぐに谷口先生に手紙を出した。①ラ・サール50周年のときの4期生原稿等②三橋美智也・川内康範のプリント③3・11大地震、八戸の被害のようす④詩集『ひと休みの空』以降の私の詩等も同封した。

12月18日早朝、私は名古屋駅

構内を歩いていた。地下鉄で名古屋駅から2つめの「栄町」に行く。そこで名鉄瀬戸線に乗り換える。小一時間乗って、「新瀬戸」で降りた。私は、沿線の景色を、街と郊外が交互に繰り返されるものと想像していたのだが、それは東北人の発想に過ぎなかった。どこまで行っても街並みが続き、どこまでが名古屋市でどこからが瀬戸市なのか区切りがつかない連続都市だったのである。駅に降りてから、谷口家歩いて探してみることにした。駅前からバスで2つ目の停留所が「苗場」なのだが、そこから先は聞いた方が早いと思い、谷口家に電話を入れた。「金谷君ね。僕の家はセブンイレブンの方が近いです。西松屋という子ども服の専門店があつて、その坂を上って……」どうにか谷口家にたどり着くことができた。

先生はひとまわり小さくなった感じだった。33年生まれというから78歳になられると思うが、髪を短く整え、日に焼けて、笑顔が輝いていた。そう、昔のままに年を

とった感じだった。私たちは、およそ40年ぶりの再会だった。八戸と瀬戸の距離を考えると面白いひとしおのものがあつた。これで時々、早口と尾張アクセントがそろえば、昔そのものだった、そちらの方はだいぶフラットになっていた。というより、私がほとんど一人でしゃべっていたようなものだった。11年の秋のラ・サール50周年式典のことから、私は話し始めた。この件についても手紙を送っていたので、話を端折って、先生に関わりの深い部分を中心に説明した。私は、話の一文を短くし、大事なところは重ねて話すなど、職業病が出てしまっていたが、先生はそんなことを気にせずに熱心に私の話を聞いてくれるのだった。私は話しながら、大学生の頃に、先生から伊藤整の文学理論の講義を受けていた頃のことを思いだしていた。「文学」などという生産性のない学問のなかで、あの授業、あの理論は光っていたと思う。あの時分はたくさん未来があり、その未来が光っていたのかもしれない。

式典の分科会の時間帯に、私は何か所かのぞき見をして歩いた。3か所目の分科会で私は腰をすえた。講師の講演のあと質疑の時間が持たれた。私の真後ろの人が挙手して「1期の竹内伝史ですが、」と質問をした。私はその名前に覚えがあつた。以前、私の詩集の送付先を谷口先生に相談したときに、そのリストに入っていた方だった。質疑応答が終わると、私はすぐに竹内さんに話しかけた。「4期の金谷ですが、竹内さんはたしか愛知県にお住まいですね。谷口先生のことについてお聞きしたいのですが。」

谷口先生が神経の病気であること、言葉がすぐに出てこないこと等を私は知ることができた。私が、「訪ねていつてもだいじょうぶでしようか」と言うと、彼は「だいじょうぶです。喜んでくれると思いますよ」との返事だった。

夕方から懇親会だった。各期ごとにテーブルが用意されていた。私は、会が始まる前に、1期の大誠さんのテーブルに行った。私

と大さんは、手紙のやりとりがかなりあり、八戸の函館会の方にも共通の知人がいるので、複層的に情報の流れがあった。その時点で、竹内伝史さんはまだ会場に来ていなかった。竹内さんから聞いた話の内容を大さんに伝えていると、谷口先生という単語を聞きつけて、何人かが集まってきた私を囲んだ。「ガンさんがどうしたって？」

私は、竹内内容を繰り返した。

式典のあいさつ部分が終わって歓談時間に入ると、1期生は一刻も早く自分たちの時間を持ちたいらしく、移動の準備を始めた。私は、まだ加藤、林先生（ともに元学担）にあいさつをしていなかったで、あわててあいさつに行く。と、1期生の一人が「これから加藤先生を（2次会に）連れて行く。いいな」と私に言った。「（良いも悪いも）1期生が言うのなら、誰も逆らえないでしょう」と私は苦笑いした。

そういったことを、私は谷口先生に報告したのである。「あの頃

はぼくの名前から、ガンさんと呼ばれていたんだよね」と谷口先生は懐かしそうだった。

それから、私が直接に会ったラ・サールの先生たちの話になった。私は自身が国語教師をしていた関係で、おもに海川、津田先生の話をしたが、加藤、金井、鈴木、鈴木、野本、村本等の先生方も話題になった。

三橋美智也についても軽く説明をした。「なぜ金谷美智也の時代があるのですか？」「実父が上磯町の落盤事故で亡くなってから、実母が金谷氏と再婚したからです」「青森に記念館があるとか……」谷口先生は三橋プリントをさつとしか読んでいないようだった。本筋の話でもないのに、私もすぐに切り上げた。

私は、函館の街のようすを説明した。松風町の飲食店街が3分の1ほどになったこと、観光客は訪れてはいるが、これといった産業のない函館はやはり不景気で、全体として、静かな街になったことなどを話した。ラ・サールのレベルに

ついて「今はどうなの？」と質問をしてくる。

私は、北海道の公立高校が大学区制になったことが直接の原因で、今は昔ほどの勢いがなくなかった。私は、それでもいいんですよ、私たちが学んだのは昭和40年代の時代でした、と過去形で言った。静かになった函館の町に風格が出たように、時間を経たラ・サールもやがて違った見方がされるだろうという思いが、私にはあった。

あとは雑談になっていた。先生が、たまに庭いじりをするということもあるが、長いことやっていると体がしびれてくるなどと話した。2時間近くもおしゃべりしていたことに気づいて、私が、そろそろ帰りますと言うと、私の子どもについても質問をしてきた。私の詩集に数編、子どもを題材にしたものがあったので、それを氣にとめておいてくださったのだろう。

「この間、本（同人誌のこと）送ってもらったけれど、感想言っていない」「この間、本（同人誌のこと）送

先生がそれ以上何も言わないので、また私の方から解説をした。「お世辞もあると思うんですが、皆さんおもしろいと言ってくださいますよ。そのおもしろいには、文学的視点は入ってなくて、話の自身がおもしろいという意味だと思っんですけど」。なるほどというように先生は笑っていたが「いや、おもしろいですよ」と応えてくれた。「ところで先生、津軽弁の部分わかりましたか？」。彼は、少し間をおいてから、「分かりますよ。若いころ……10年もあの辺に居たのですから……」

先生の瞳が夢を見ているような表情になっていた。そして何かを思い出している様子だった。

私が退出するときに、先生が大通りまで出て見送ってくれた。30mほど歩いたとき後ろを振り返ったら、先生が見送っている。100m進んだときもまだ見送っていた。私は、李白の詩を思い浮かべていた。「孤帆の遠影 碧空に尽きただ見る 長江の天際に流るるを」。李白が友人を見送ったと



きの詩である。200mほど進んだときは、さすがにもう彼の姿は見えなかった。私は、人生にまたひと区切りをつけたのだと思った。

北教函館卒、青森県教職員(71
08年)、松越文雄の筆名で詩と
短編を書いている。

2012.1.9 記

恩師訪問

及川先生を囲む会が
開かれました

福澤

純 17期

平成24年3月24日、及川潔先生が北海道剣道連盟のお仕事で来札された機会をお借りして、高校時代に先生から指導をうけた下記(敬称略)札幌(旭川)在住のOBが集まりました。

4期 及川潔 先生(導心館岩見剣道場)
11期 丸谷智保(株式会社セイコーマート)
16期 野中 雅(特定医療法人札幌脳神経外科病院)
17期 福澤 純(医療法人北農会恵み野病院)
19期 衣笠泰秀(北海道電力株式会社)旭川から参加

20期 上新雅人(株式会社電通北海道)

23期 川村英樹(北海道厚生農業協同組合連合会札幌厚生病院)

23期 野村佳正(札幌ビール株式会社)旭川から参加

23期 宮崎恭介(みやざき外科・ヘルニアクリニック)

25期 杉澤 憲(さっぽろ厚別通内科)

30期 高島俊裕(NTT東日本)

33期 橘 一俊(医療法人北農会恵み野病院・4月から北海道公立大学法人札幌医科大学に異動)

及川先生の(昔)話の合間に自己紹介を行い、高校時代の思い出、現在の剣道への取り組みなどを話題にして語り合いました。

11期から33期と幅広い年代の集まりで、面識のある参加者は各々半分以下、出身地(中学)も別々、またいろいろな職種の集まりにもかかわらず、

「剣道及川組」をキーワードと

してすぐに打ち解けあい、楽しい会話がはずみ、5時間(1・2次会あわせて)があつという間に過ぎました。

在職中の40年間に40回全道大会に行かせてくれた先生は退職後、函館市内で剣道場の館長として小中学生の指導にあたっています。



集合写真：及川潔先生の退職記念の会で配られた手ぬぐいを前にして。

同期会だより



3期生同期会

額賀康之^{3期}

私たちは、昭和37年(1962)新生函館ラ・サール高等学校に三男坊として180数名が入学、そうして全学年が揃って学校は本格的なスタートを切ることになりました。建学の精神に燃える1期生、後輩の入学でほっとしている2期生、そして何かおっとり刀の3期生と言う図式でしょうか。開学当初からの自由闊達な雰囲気の中、のびのびした学校生活を過ごしました。春には、授業中の教室の窓から漂う匂い、何かとおもって外を見ると、近くの肥溜めから汲んだ人糞を畑に播いている匂いでした。冬には、下校時湯の川の電停に向かう途中、農家の馬

ソリの荷台に乗せてもらうなど、牧歌風景の中で育った私たちでした。教員は、金井先生、鈴木進先生、加藤先生、海川先生などなど若さと情熱に満ちた先生方で、ブラザーはBrアドリアン、Brレナードと今思えば非常に個性的な方々でした。これらの教員に育てられた私たち3期生は、他のラ・サール生もそうであるように、個性と自我を持って卒業し、それぞれの道に進んでいきました。全体的には各分野での活躍は勿論ですが、比較的着実、地味、でしゃばらずの人間が多いような気がしています。団塊の世代直前の特徴でもあると思います。

さて、同期会ですが、私たちの時代は東京オリンピックが終了して高度経済成長の時代から、一気に第一次オイルショック、それに引き続き再びの経済回復、はたまたバブルの崩壊など、社会の中枢で馬車馬のように働く者が多く、毎年1月2日のホテル函館ロイヤルで開かれる同期会への参加もままならない状況でした。そのためか、

当初は市内在住の同期が10数名集まることもありましたが、それも徐々に参加者が減り、5名ほどになってしまいました。それでも故人になられましたが金井先生、鈴木進先生などに顔を出していたことができ、楽しい時間を過ごすことができました。全国的には50周年以前に盛岡、熱海、函館、定山渓と4度の同期会を開催し数10名の参加があったと記憶しています。そして50周年の際に開催された同期会で、今後8月下旬に日程を移し、65歳の年齢を考えると毎年でも集まろうと、昨年8月27日海川先生、金井先生の奥様、元事務職員の二本松さんの参加を得て開催されました。そろそろスローライフにシフトする私たちですが、子供の話、孫の話に花を咲かせる会でありたいと思っています。函館在住以外の同期の皆さんの参加をお待ちしています。まだまだ懐かしい函館の原風景が残っています。



なつかしい旧校舎、正面玄関だけは、当時のまま移築されました。

同期会だより



われらの時代の
函館ラ・サール
そして愛すべき
同期生たち

中島 俊雄

7期

昨平成23年10月1日に7期の還暦同期会が函館で開かれました。

還暦を待たずして他界せざるをえなかった同期生14人の追悼の式を執り行いました。函館ラ・サール学園・理事長のブラザー・ラベル先生の御指導・御指南のもとにラ・サール聖堂にて追悼ミサが行われ、かつて机を並べ互いに啓発しあった同期生たちに祈りを捧げたのでした。

思い起こせば、われわれ7期生が卒業した1969年頃は激動の時代でした。われわれが卒業する直前には、東大安田講堂攻防戦があり、結果として東大入試が

中止となり、何が正しくて何が間違っているのかよくわからないような混沌とした時代でした。

ラ・サール生の多くは、入学したばかりの頃は親元を離れホームシックなどもあり、心細い思いをして暮らしていたと思います。が、次第に同様の境遇の生徒がスポーツやら対話を通して互いに交遊を深め助け合い刺激しあうようになり、自我形成をしながらちよつぱり早く大人になっていくのではないかと思います。いわゆる「親離れ」をしていったのだろ

うと思います。そして3年生にもなると、学校にもすっかり慣れ、最上級生としてちよつとあつかましくらいのふてぶてしさを身につけてくるようでした。この過程で互いに寝食を共にし、同じ釜の飯を食ったという経験により、その後の人生において不思議な親和性や仲間意識がはぐくまれてきたような気がします。

中止となり、何が正しくて何が間違っているのかよくわからないような混沌とした時代を迎えたということは、われわれにもいろいろな衝撃や動揺を与えました。

後にラ・サールの職員室では「7期」という言葉はタブーであったとか聞かされましたが、確かに、われわれ7期生は「とても生意気で鼻っ柱が強く、口ばっかりたつしやで年齢のわりにはませ」ていたと思います。今振り返れば、私から見てもそのように見えますから、当時の先生がたから見れば相当腹が立ったのではないかと推察されます。

卒業式の直前2、3日の出来事、「団交」という名目で、卒業式を開催するか否か、開催するとすれば、どのような形で行うかをめぐり夜更けの11時頃まで、「真の教育とは何か」というテーマで、先生方と話し合いが持たれました。振り返って今思うと、こんなに先生と生徒が「こころ」と「こころ」をぶつけて対話したというような経験をしたことがなかったように思われますが、卒業式後の謝恩会でラクロワ校長を涙させたという話は後で知ることになり、今と

なつては、ただただラクロワ先生ごめんなさいと言うしかありません。

ラ・サールに入ってくる生徒は、おおよそ中学生の頃は秀才、ときに田舎では神童と呼ばれた生徒が多かったようです。しかし、一旦入学してしまつと、過去の秀才や神童たちも実力試験でむりくり1番から2百何10番までランク付けされ、なんとなく無意識の序列がつくりあげられていく雰囲気がありました。

しかし、試験の成績がそのまま人間の序列であるはずもなく、今思うと、故郷を離れて来ている生徒たちにとっては、むしろ、学校生活を互いにいかに楽しく過ごすかということが、至上命題であったような気がします。学校というものは、もし授業しか行われなかったら、登校するのが大変苦痛になるところだと思いました。級友と会つて話をするとか、先生にお願いして、1時間はサッカーの時間をつくりボールを蹴りあうとか、そんな些細なことが、学校

に行くとても大きなモチベーションであつたような気がします。

ラ・サール高校に入学して最大のメリットは何だったと言われれば、このような屈託のない同期生に出会え、混沌とした大変な時代でもありましたが、同期生同士は仲良く学校生活をおくれたということだと思えます。そして、今だから言えるのですが、寛容な精神でこのような生意気な生徒にも、のびのびした成長環境を与えてくださった先生がたに心より感謝申しあげたいと思います。

また、私学独特の特異な先生もおられました。単に教科書を事務的に教えるのではなく、教科書を離れ、自分でものを考えることを教えてくださった先生もいらつしました。こうやって自我形成の重要な時期に、同期生や先生たちに刺激を受け、自分でものを考える習性を会得したのはその後の人生において大変意味深いものだったような気がします。

さて、還暦同期会の方ですが、

その後、教室において、恩師倉橋基夫先生の記念授業を拝聴いたしました。退職なさった倉橋先生は、わたしたちが学んでいた頃と変わらずお若くお元気で、相変わらず「声が大きい」のでした。

「判別式！すなわちい！」と来るかなと思つたのですが、「秘湯巡りと花火」のお話でした。

北海道の秘湯はほとんどすべて、日本の遠方まで秘湯を巡られたとのこと。どこにこんなにパワーがあるのかと驚くばかりでした。

授業のポイントは「秘湯に男二人で入浴していたら、山ギヤルの集団に乱入され恐ろしかった（？）」というお話と、「世界最大級の四尺玉の花火が破裂したら、花火の直下にいる人間も爆風と振動でみんな吹っ飛ぶ」というお話でした。

記念授業の後、東京同期生を中心に作られたDVD「風に吹かれて」の上映。高木鉄平君や、三島卓君、加藤洋史君、鈴木秀典君らの力作でした。彼らは50周年記

念で作られたラ・サール師の伝記映画日本語版字幕版「WHO ARE MY OWN」の制作にも力を尽くしてくれたのでした。

さて、学校でのメイン・イベントは、同期の世界的カメラマン渡邊博史君の「写真展示とギャラリートーク」でした。渡邊君は2006年、アメリカで「写真のいま、100人の作品集」に日本人としてただ一人選ばれた実績を持つ世界的カメラマンで、今回の同期会ではじめてこんなに素晴らしい写真を撮れる同期生がいたのだなと、ただただ驚き、彼を誇りに思いました。

素晴らしい写真集が何冊もあるのですが、やはり「See Angels Every Day」はわたしにとつてとても印象に残る写真集でした。たまたま彼がエクアドルのホテルの窓から眺めて見つけたサンザラロ精神病院に入院していた女性が、「わたしは毎日、天使を見ている」と言つたらしい。何ともいえない味のあるモノクロームの銀塩写真である。司会の三島卓君が渡邊君

の写真集に潜むモチーフをうまく訊きだしてくれていました。

今回の同期会は昨年50周年祝賀行事に参加された方もいるので、23人ほどの少数の同期会になつてしまいましたが、とても心に残る会でありました。

夜は、中越先生と倉橋先生を囲んで、懇親会を開き、少人数であつたこともあり、和気あいあいと話が尽きない会となりました。

その後、中締めをし、二次会となつたのですが、二次会でも夜更けまで話が続き、昔の学生時代を彷彿させてくれました。

久しぶりにお会いした昭和新山の真ん前で店を開いている阿野洋二郎君は今では北海道でも残存する数少ない「熊の木彫り」名人だと言われているらしい。今では木彫り職人も少なくなつたとのこと。

米沢で歯科医を開業していた同期の三宅君が数年前に不治の病で逝去されたのですが、三宅君が入院していた折に、阿野君は丹誠を込めて熊を彫り彼に贈つた

のでした。三宅君は、亡くなるまで病室の枕元にその木彫りの熊を置いて眺めていたらしい。阿野君はあのときから、熊を掘る姿勢というか、魂が変わったと言っていた。

また今ではトップ・クラスのジャズ・サックス奏者である同期の高橋知己君も三宅君を見舞ったと聞いていました。

最後に、これまで知らなかった話に胸をうたれたりしましたが、あのnotoriousな7期生もみんな還暦を過ぎ、櫛の歯が欠けるようになっての仲間が世を去っていき寂しいものだと感じましたが、翌日、もし生きていれば2015年にまた会おうと誓い合って別れたのでした。



ギャラリートーク



渡邊博史さんと作品



同期会だより

2011年8期

函館「アラ還」同期会

そして…

野呂春樹 8期

「私たちが60歳になった時、青春の思い出の地、私たちの原点の地・函館で、「卒業式」を実現できればという想いもあります。それが実現した時が、本当の意味で私たち8期生の「それぞれの卒業、そして出発」する時かもしれない」と結んだ、唯一「卒業式」のなかった8期生の中で賛否両論のあった卒業証書授与式を行った2008年東京同窓会（8期生70名参加）後の二次会で、函館から出席した島本肇君・遠藤俊二君が「2011年、函館で還暦同期会を計画します！」の一声から、2011年函館「アラ還」同期会が動き始めました。

函館在住の同期生たちは「飛行機で来て、湯の川温泉の旅館で宴会して次の日帰るのでは、せっかく函館に来たのにモッタイナイ。住みたい街No.1に選ばれた函館の街を知ってもらい、家族も楽しめる、思い出に残る還暦同期会にしたい」と考え、学校や湯の川周辺しか知らない寮生や下宿生だった多くの同期生に、西部地区のベイエリアのホテル・屋上温泉付きのラビスタ函館ベイに宿泊し、元町の開港以来のレストラン・五島軒での懇親会（函館山山頂の展望レストランという案もありました）を計画してくれました。

東京・札幌でも「函館「アラ還」同期会実行委員」を募り、函館の実行委員と連絡を取りながら、全員写真の載った案内状を作成し、準備・進捗状況等を8期メーリングリストで連絡してきました。

函館「アラ還」同期会の骨子は①「卒業式」はしない。その代わり何を書いてもOKの「卒業文集」



案内パンフレット

を作る(↓)『自由の揺籃』を作成。

寄稿・同期生17名、加藤雄一先生、海川敏雄先生、津田洋行先生(函館回想の短歌や1967年、校内誌「独活」に書いた文も)、2008年東京同窓会での「卒業証書」授与式のシナリオ、クラス写真など掲載。

②恩師の津田先生(1963~1968年国語科教師、明治大学文学部教授、2010年3月退職)を招待して、記念授業をしてもらう。

③同期生のカナダ在住の日本語学者・金谷武洋君(モントリオール大学東アジア研究所日本語科科長)の講演を行う。在校生・同期生・同窓生ほか聴講を呼びかける。

④家族も参加でき、函館を楽しむ

観光(前夜祭・元町散歩・バスによる五稜郭・当別トラピスト男子修道院観光・函館山夜景・ゴルフコンペなど)を企画する。

⑤学校で物故者の追悼式・記念授業・校舎・図書館・寮見学を行い、バスで元町の五島軒にスムーズに移動する。

2011年7月1日金曜日から3日日曜日まで3日間にわたって、8期「アラ還」還暦同期会が開催されました。

7月1日 16時45分から金谷武洋君が「カナダで日本語を教える」と題した記念講演を行い、巧みな語り口で在校生・同期生など40名超の参加者に研究の成果を披露。その後19時30分頃より松風町の料理店で函館の同期生たちがセッティングしてくれた「前夜祭」。彼らの心遣い(美味しい魚介類と酒の差し入れ)に感激感謝。その後、函館山の夜景を見に行つた人もいました。何人かでホテルの屋上露天風呂に入り、

バーでの一杯も最高!でした。

7月2日 9時30分から希望者はバスで五稜郭へ。元町に戻り、ハリストス正教会周辺を散策。昼食後、女性たちは当別トラピスト男子修道院へ、「女人禁制」の修道院の中に入れて感動、エキゾチックな函館の魅力を十分満喫していました。「また何度も函館にきたい!」

13時からは学校聖堂での追悼式後、津田先生による幕末の思想家・横井小楠をテーマに記念授業が行われました。高校時代と変わらぬ、授業に全力投球する独特の名調子と黒板いっぱいに板書する津田先生に、聴講した久保田瑛夫先生・遊佐悦大先生はじめ、同期生・5期生・7期生の参加者も感激しました。授業の後、短時間でしたが、校舎・図書館・寮を見学。すっかり変わった校舎や寮に感慨深いものがありました。寮の屋上で集合写真を撮った時、そこから見た函館山と津軽海峡も私たち8期生の来函を歓迎してくれているよ

うでした。

18時からは五島軒にて懇親会が催されましたが、女性たち多数の参加により華やかで心温まる会となりました。出席者は先生、家族含めて110名以上。女性たちには校章が入った特製ラ・サールクッキーがプレゼントされました。オープニングビデオ上映に始まり、物故者への黙祷の後、函館在住者を代表して小田千里君が歓迎の挨拶を述べ、アンドレ・ラベル理事長の祝辞に続いて、懇親会が始まりました。3人の同期生の挨拶、恩師のスピーチ、寺下誠君(ジャズピアニスト)の演奏など、多彩なプログラムが行進中、あちこちで再会を喜び合い、恩師と語る輪ができました。

最後に島本肇実行委員長の発声で乾杯し、寺下君のピアノに合わせ「It's a Long way」を全員で歌い、閉会となりました。その後、近くの店で深夜晩くまで二次会・三次会が続きました。懇親会はアツという間の3時間でしたが、出



大懇親会

席者一同、心から感激し、こんなに楽しい時間を過ごしたことはないと思われるほど「至上の時」を過ごしました。

7月3日 睡眠不足も何のその、ゴルフコンペも行われました。

懇親会のエピソードをいくつか。

①学校関係者の集まりには出席しないという久保田先生に「原則」を破って「8期だけは特別だ

から」と出席していただけたことは、津田先生の出席ともども大きな喜びでした。久保田先生の（ずーっと胸に秘めていた、今だから話せるという）1969年12月、学園紛争による冬休み繰上げ、卒業式中止等の秘話に「同聞き入っていました。久保田先生も8期の還暦同期会に出席して、良かったと思っているはずです。



久保田瑛夫先生

②70歳過ぎても学校で週10時間英語を教えている加藤先生に感動！60歳はまだまだ雛っ子ということを認識させられました。恩師の先生たちから元気をもらいました。「還暦でもエイジレス、還暦過ぎてでもエイジレス！」

③「事務室のマドンナ」山谷（橋本）京子さんからの、ある先生からプロポーズされた話に驚きの喚声が

あがっていました。

④名札は学校から借りた当時の写真とクラスの襟章付き。『現況』との違いに同期生だけでなく、本人までも大笑い。実行委員長の島本君の奥様が徹夜して90個近く作ってくれました。ありがとうございます。この名札は次回同期会のパスポートです。

「アラ還」同期会で撮った何千枚の写真・動画や高校時代の写真などを編集して、DVD『自由の揺籃』を作成しました。

「前夜祭」のもてなし、学校や懇親会の準備・受付・進行・車の手配、ゴルフ場への送迎など、函館の同期生たちの「函館」を再発見・満喫した「アラ還」同期会の企画・運営に、各地から集まった同期生とその家族は大感激！大感謝！何から何までお世話になりました。

個人的には2008年の東京同窓会の企画・運営から5年近く、この函館「アラ還」同期会にかかわってきましたが、やっと終わっただという実感と、この間、充実の

時を過ごさせてもらったという感謝の気持ちです。



寺下誠君のピアノ演奏



金谷武洋君の講演



記念DVD



プログラム

東京同期会の文学散歩にも触れておきます。

2010年2月、「浅草の若旦那」工藤博己君が家族も参加できる「観光化されていない浅草散歩」を計画、同期生に呼びかけたところ、北海道・九州からの参加



津田先生の文学散歩

者も含め、総勢32名が参加しました。

「江戸・東京散歩の会」は2010年10月の2回目より、津田先生に文学散歩の講師+その後のミニ授業をお願いして、家族も参加できる「文学散歩の会」に発展しました。この会は千駄木をこよなく愛する塩崎浩志君がナビゲーターの、昭和の香りが残るノスタルジックな谷中・根津・千駄木でした。森鷗外・夏目漱石・高村光太郎の旧

宅などの散歩のあと、鷗外がかつて住んでいた、今は旅館になった鷗外荘でのミニ授業のテーマは「鷗外の恋愛」。その後の懇親会は津田先生の明治大学文学部定年退職を祝う会でもありました。

2011年10月、第3回目の文学散歩は樋口一葉が住んだ本郷界限。ミニ授業のテーマは「樋口一葉の文学は社会性を持つ!」。一葉文学の新たな発見でした。

2012年10月の同期会は湯島界限を計画中です。津田先生は、私たち8期生にとって、いつでも高校時代の先生です。気軽に文学散歩の講師&講義を引き受けていただける私たちはほんとうに「生徒冥利」に尽きます。こんな幸せな「生徒たち」は日本中探してもいないでしょう。津田先生、いつまでもよろしく願います。

「Back to the Future 函館」

時空を超えて持ち続けていく「青春のエッセンス」を大切にしたい同期会を、8期生はこれから函館・東京・札幌で続けていきます。「還暦を過ぎてもエイジレス!」



函館ラ・サール高等学校8期生還暦同期会 in 函館「自由への揺籃」平成23年7月2日 於 母校&五島軒本店

同期会だより



卒業30周年を過ぎて…

大山 慎介

19期

○4人での会話

6年前の春、札幌で同期4人が集まった際のこと、「そう言えば、今年で、卒業して25年が経つんだなあ」「諸先輩の中には、節目には函館に集まる期もあるらしい」「云々、「じゃ、声かけてみようか」という他愛無いスタートだった。

整理された同期の名簿もなく、どうしようか?という手探りだった。

「まずは、とにかくメールリングリストを作ろう」とのことになり、4人でスタート。アドレスを知っている友人に少しずつ、そしてその友人がまた友人に…。その結果、3カ月で100名を超えるMLと

なった。

25周年は、函館に遠くは海外からも含めて80余名が参集した。

○卒業30周年

25周年を終えると、面白いように各地でミニ同期会が頻繁に開かれるようになった。

「なんだお前、近くにいたのか。じゃ飲むか」という具合。そして5年が過ぎて、30周年。ミニ同期会に加えて、MLでの情報交換も活発になったので、開催しようかどうか迷ったのだが、「いや、やはり5年に1度のペースを守ろう」「例えば10人の参集でも続けよう」「やはり、恩師に会いたい」とのことです、開催が決定。結局、昨年の夏、50余名の参加に加え、恩師の方々が10名余も参加して戴き函館で開催。時を超えた至極の時間を過ごすことができた。

○これからのこと、同期会と同窓会

校舎に加えて、あの寮も新しくなった。母校での思い出は、現実

に見える建物から惹き起されるのではなく、それぞれの胸中・脳裏、同期との会話、恩師との交信、と内発的なものになった。

我々19期も、多くは今年50歳を迎える。諸先輩の活発な同期会の様子を仄聞するに、これからが楽しみでもあるし、6年前にそのベースの作成に奔走した同期の畏友達に頭が下がる。同期毎の活動・情報連絡が活発になれば、他の期との連携も容易になり、同窓会そのものの活性化に繋がるということは良く言われること。隠しようにも無い長期低落傾向の母校を憂い、「10年後に母校は存在しているのだろうか?」との会話が、年々真剣に語られるようになった現実を考えると、同期会、同窓会支部、そして同窓会全体が、有形無形に繋がりが、語らい、動く。こうしたスクラムが、少しでも母校の発展にお役に立てばと願う。

母校の求心力とは、そうしたものだと思える。

同期会だより



23期生の同期会が開催されました

加藤 成史

23期

平成23年10月22日、湯の川温泉の湯元啄木亭にて、23期の同期会が、倉橋先生、寺島先生、品田先生の3人の恩師をお迎えして開かれました。

学年全体での同期会は初めてとあって、卒業して27年という中途半端さ、荒天にもかかわらず、全国から74人の同期が集まりました。

宴が始まるやすぐに、並べられたお膳を無視して話し込む車座談義があちこちで開かれ、飲食も忘れて高校の思い出をなぞっていました。

二次会、三次会に流れる人も多数あり、朝帰りも居たよう

す。

翌日は学校側のご尽力で、聖堂で物故者の追悼式、そして新校舎の見学会を開きました。

自分たちが学んだ環境との雲泥の差に驚きの連続で、とても楽しい有意義な1泊2日でした。

同期会後、しばらく「仕事が手につかない」という人続出でした。

次回、何年後に開催するか、検討中です。

▼23期で同期との連絡が不通になつてゐるかた、加藤(斜里)までご連絡ください。

katou.m-ia@i.softbank.jpです。



函館ラ・サール高等学校 第23期同窓会 2011/10/22 函館市湯の川温泉 湯元啄木亭



同期会だより

タイムカプセル 発掘の顛末

大森 義範 34期

皆様こんにちは。札幌医大を7年かけて卒業(50期)、現在砂川市立病院で地域脳卒中医療に従事しております。入局したところ、上司(函館ラ・サール卒)にGWの休みつてあるんですねえと寝ぼけた事を言つてしまい、「脳外科のカレンダーには赤い文字は無いんだ!!」という名言を生ませてから10年たとうとしています。なんとか脳外科専門医と学位を取得し、ささやかな次なる仕事上の目標も立てています。

本題ですが、高校2年生のころ(1994年)、2Fクラスで17

年後に掘り出そう(と言ったはず...)と埋めたタイムカプセルは、卒業後も2Fのメンバーに会うたびに口にしてましたが、X年が近づいてきても、どこからもタイムカプセルを掘ろうという話が出てきません。

連絡をとれる2Fメンバーも10人もいなく、しかも全国に散らばつています。これは無理かなーと思つていましたが、そんな頃フエイスブックをはじめたところ、あれよあれよと数十名の同期の連絡先を発掘し(2012年4月23日現在84名)、仕事が終わった後、毎日1人は同期をグーグル検索してみるという偏執的な作業を経て、2Fだけではなく同期も巻き込んだタイムカプセル企画を2011年10月1日に行うことができました。

「タイムカプセルを掘り越すので、10月1日は脳外科待機機の免除をお願いします。」と上司に間抜けな陳情をして、「タイムカプセルを掘り起こすのに休み使う

から今月の家族サービスは厳しいのかい？」と白い目で家族に見られつつ、いざ函館へ。品田先生に開けておいて頂いた・サール館に向かうと、懐かしい面々が集まっていた。発掘部隊が集まったところで、タイムカプセルを埋めた傍に植えた桜の木を頼りに周囲を掘り起こしますが、全く出てくる気配がありません。桜の木が予想以上に（予想できるだろう！というツツコミもありましたが…）大きく根を張っており、まさか桜の直下に埋めてないよね？なんていう気が滅入るジョークをしながら、おっさん連中が息を切らして校庭を掘り起こしている光景は、通りすぎる後輩達にいったいどういう目で映っていたのか…。あきらめかけていた時、鈍い金属音が…。

結局は、目的を達成することができず終了してしまい、品田先生はじめ学校に多大な御迷惑をかけることになってしまいました。この場を借りましてお詫び申し上げます。

失敗に懲りつつも、同期の輪を広げつつ、タイムカプセル発掘に再チャレンジしようと考えています。単科大学を卒業して医療業界という狭いところに住んでいると、外の世界を知る上では高校の同期は人生の宝物だと思っています。札幌・東京を中心に、昨年は10回以上同期で集まったと思います。北海道に帰省される方、ぜひ声をおかけください。活動報告というよりはほとんど私事の話になつてしまい申し訳ありませんでしたが、今後とも宜しくお願い致します。



同期会のご案内



4期生

山本正之^{4期}

函館ラ・サール高校4期生の皆さまには益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

2年前には、私たちの母校が創立50周年を迎え、50周年記念の行事が母校・函館の地において盛大かつ成功裡に催された事は記憶に新しいところです。

私たち4期生が卒業して、もはや半世紀近くが過ぎ、各人それぞれの道を歩んでこれ、大多数の方は人生の大きな転換期を迎えたか、あるいは当面しておられることと思います。

この節目に、全国の4期生が私たちを育んでくれた母校に集い、半世紀の人生を振り返り、歳月

を遡って往時の面影を記憶の底から掘り起こしつつ、ひたむきに過ごした3年間の思い出を語り合いたいとの思いが、関東4期会において披露され、関係各位の熱意のこもった賛同をいただき、下記要領(概略)で実施の運びとな

記

●日時：2012年10月27日(土)午後2時00分

●集合場所：函館ラ・サール学園

□スケジュール(概略)

午後2時00分 母校ツアー

在校生との交歓会

午後3時00分 礼拝堂にて追悼会

午後4時以降 交歓会

(「法華クラブ」を第一候補として立食パーティ形式で検討中)

●参加費：1万円以内(事務費、2次会費用含む)の予定

連絡先：函館ラ・サール高等学校全国4期会事務局

山本 正之

函館ラ・サール高等学校4期生関東支部の会

(代表世話人、全国4期会企画・実行委員長)

電話 090-5324-6963 (携帯)

04-2929-0618 (自宅)

e-mail: mas-ytm@mx3.mesh.ne.jp (自宅)

りました。

皆様におかれましては、諸般の事情は御有りでしょうが、万障お繰り合わせの上ご参加くださいますようお願い申し上げます。

同期会のご案内



9期生

塚谷善次^{9期}

本年の9期同期会の日程が下記に決定しました。
多数のご参加をお待ちしております。

▼日時／2012年10月13日(土)

18時～

▼会場／ニューオータニイン札幌

(札幌市中央区北2条

西1丁目1-1)

▼趣旨／9期は、4年に一度、オリンピックの年に同期会

を開催。本年は、還暦同期会となる。

▼幹事／中川原護二、辻昌宏、岩

井新治

同窓会入会式 代表生徒挨拶



平塚 崇晃

平成24年1月31日
50期生代表

厳しい寒さは和らぎを知らず、
今日も暖かい春はまだかと心待ちにする中、卒業を明日に控え、
多くの友人と別れることになんとも言いようのない寂しさを感じております。また、今日、伝統ある同窓会の一員となることを、喜ばしく思います。

さて、私達50期生はこの高校での3年間の生活で多くのことを体験しました。例えば、開校50周年という節目の年に入学したと、大学受験という大きな目標のために学習をしたこと。しかし、その中でも鮮烈に記憶に刻まれているのは、2011年3月11日に起こった東日本大震災のことです。私はその日の14時ごろ、父親と共に車に乗り、高速道路で帰省している最中でした。地震が発

生した瞬間は今でも忘れられません。大きな揺れ、轟音、全てが今までに経験したことがなく、とても恐ろしい出来事でした。カーナビゲーションのテレビで見た津波が押し寄せてくる映像には言葉を失いました。喪失感というものがある程恐ろしいものとは知りませんでした。その後、被災した方々の避難所に関する報道で「コミュニティを優先させて」という言葉を何度か耳にしました。「避難所はコミュニティごとに振り分けを：」「避難所の部屋割りはコミュニティごと：」「といった具合です。全ての避難所でそういった対応ができたのかはわかりませんが、被災された方にとっては大変心強く、安心することのできる配慮だったのではないのでしょうか。

私達は日頃のコミュニティション、人と人との繋がりとというものに関してあまりありがたみを感じることはないと思います。時には「鬱陶しい」「干渉される」と感じる事もあるでしょうし、何かと自分の思い通りにならないことも

多々あると思います。人にはそれぞれ事情があるのでしようし、致し方ない事だと思えます。ただ、人と人の繋がりとというものは自分が満足するだけのものではなく、嫌なこと、納得行かないこと、そういったことに関わる全ての人がそのことを受け入れながら、時間をかけて紡ぎ続けていくものだと思うのです。人が複数、それも長きに渡って繋がっていく以上、『絆』というものはきれいなだけではありませんし、目の前の事柄が気に入らないからと全部捨ててしまうことで、新たに関係を構築しなおせるものでもありません。

今回の震災で、『繋がり』というものについて深く考えさせられました。この学園で学んだ『ファミリースピリット』という先生や先輩、後輩、保護者の方々との繋がりが。そういったものがいかに大切で、得がたいものなのか、そのことを改めて実感しました。

私達はこれから同窓会の一員として、ラ・サールファミリーとして在校生が各分野で活躍していけるよ

うに応援していくことになると思います。また、同じ学校に学んだラ・サールファミリーが集まれば年齢に関係なく、懐かしさが沸いてくると思います。

最後になりますが、これからもラ・サールファミリーとして、この学園で学んだファミリースピリットを大切に、これからも私達が誇れる『函館ラ・サール高校』を作るため、同窓会活動に積極的に関わって、学園をより素晴らしいものにしていくため努力していくことを誓い、50期生代表の挨拶とさせていただきます。



卒業生答辞

平成24年2月1日

卒業生代表

備 仲 将

いよいよこの日がやってきました。私たち50回生が、函館ラ・サールを卒業する日です。

1年前、私たちは49回生の先輩方から、「絆」ということばを受け継ぎました。生きていくうえで、私たちは苦しみや悩みから逃れることはできません。しかし、たとえ遠く離れていても、たがいを理解し、共有できるつながりがあります。それを守り育て、途絶えぬように私たち後輩に広げていってほしい、という思いをこの絆ということばから受け取りました。そして、このことばは、不思議にも私たちが受け継いだその日から38日後に起こった東日本大震災という未曾有の災害によって、昨年を象徴することばとなりました。「絆」ということばには思いやりも

含まれています。感謝、いたわり、奉仕、分かち合い、信頼など、どのことばをとつても仲間を思いやる気持ちがなくっては成り立つものではないかもしれません。

長いようで短く、短いようで長い、3年もしくは6年で、私たちラ・サール生の間に絆が生まれたのはいうまでもありません。そして、かけがえのない仲間となりました。高校生活において、誰よりも長く時間をともにしたのは、ここにいる仲間たちです。親元をはなれ、心細かったとき、友達と衝突して苦しかったとき、進学で迷ったとき、いつも仲間がそばにいました。その存在にどれほど助けられたことでしょう。私たちは今日を限りに、ここを巣立ち、別々の道を歩むことになりましたが、ここ函館ラ・サールで共有し、培った貴重な時間と体験は、私たちをつなぐ絆となっています。そして、私たちは、函館ラ・サールをはなれても函館ラ・サールという絆でつながった仲間なのです。その絆は永遠であるということ、私たちに

いつも仲間がいるということの後輩たちに伝え、ここを巣立ちたいと思います。

昨年、本校は50周年を迎えました。この50周年の歴史の中には、長い年月が生み出したたくさん先輩方と、家族が存在します。50期と、きりのいい私たちのことを、フェルミン校長先生は「ゴールデンボーイズ」と呼びます。この呼び方には、「50年を迎えたこの学校を、よりすばらしく、活力にあふれた、輝かしいものにしてほしい」という校長先生の願いが込められていたそうです。その期待にこたえ、願いをかなえることができましたかどうか。自信はありませんが、全力を尽くしてきたつもりです。

さて、函館ラ・サールの卒業生となった後、私たちがなすべきことは何でしょうか。

それは、私たちが、社会有為の人材になることだと思います。現在の社会状況はなにかと暗い話題が多く、未来に希望を見いだせずにいる人が多いのかもしれない

ん。しかし、そうした状況下にあっても、いやそうした状況下だからこそ、私たち一人一人が志を高く持ち、自らを高めていかなければならないと思います。そうすることによって沈鬱な空気を打破し、希望を見出せるような社会に変えていくこと。それがこれから社会に旅立つ私たちの使命なのだと思います。もちろん高校を卒業したばかりの私たちは未熟ですが、志と気概を高く持ち、日々努力を続けていこうと思います。

最後になりましたが、もちろん、今の私たちがあるのは、私たちを理解し、見守ってくれた家族、熱心に指導してくださった先生方、そして第二のふるさとである函館のみなさんのおかげです。私たちはもはやラ・サール生ではありません。しかし、これからはラ・サリアンとしてそれぞれの人生を歩み、また新たな絆を広げていきます。そして、ここで得たつながりを決して忘れることなく、ラ・サールファミリーの名に恥じない人間となることをここに誓います。

大学別進学状況



国立大学

大 学 名	24年		23年		22年		21年		20年	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
北海道大	8	3	8	3	4	2	7	5	9	9
(文系)	(1)		(4)	(1)			(2)		(3)	(1)
(理系)	(5)	(1)	(4)	(2)	(4)	(1)	(5)	(3)	(4)	(5)
(医歯系)	(2)	(2)					(1)	(2)	(2)	(3)
北海道教育大					1			1	1	1
室蘭工業大	1			1	1		1		1	1
小樽商科大		2	1						1	1
旭川大	1						1			
北見大	5	2	1	4	1	1	1	2	1	2
弘前大	1	2	1	2		3	3	1	2	1
岩手大			2						1	
東北大		3	3	1	1	1	1	1	3	1
(文系)	(2)	(1)					(1)	(1)	(2)	
(理系)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)				(1)	(1)
(医歯系)			(1)							
宮城教育大			1							
秋田大	1	1			2		1		1	
山形大		1			1		1			2
茨城大										
福島大										
筑波大			4		1	1			1	1
宇都宮大	2									
群馬大										
千葉大	1		1					2	1	
埼玉大				1					1	
埼東大	1	2	2	3		2	1	2	3	2
東京大					1		1			
京大										
京外大										
京農大			1		1			1		1
京工大							1			
京業大									1	
京商大										
京学大										
京通大				1	1	1			1	
電大	3			1	1					
一橋大		2		1		2	1	3		

大 学 名	24年		23年		22年		21年		20年	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
横浜国立大		2	1	2	2		2		3	1
山梨大	1					1				1
新潟大		2						1		
福井大										
福井医大										
浜松医大									1	
富山大										
金沢大				1	1					1
滋賀大										
信州大		1		1	1			1	1	
静岡大			1	1						
名古屋大				1			1			
愛知大				1						
京都大	1		2		2				1	3
京大										
京工大	1	1						1		1
大分大						1			1	
和歌山大										1
岡山大										
島根大										
島根医大				1						
広島大		1								
山口大										
愛媛大		1								
香川大										
徳島大				1	1					
高知大		2								
九州大					1					
九州工大						1				
佐賀大							2			
宮崎大				1	1					
熊本大										
長崎大										
鹿児島大		1							1	1
琉球大				1						

公立大学

大 学 名	24年		23年		22年		21年		20年	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
札幌医科大	4		3		1	3	4	3	1	4
釧路公立大			1							
山形保健医大										
高崎経大									1	2
首都大			2	2					1	1
国際教養大	2									
横浜国立大	2						1		2	1
都立大	1						1			
静岡大					1					
京都大										
はこだて未来大	1	2	2		2		2		1	1
奈良大										1

大 学 名	24年		23年		22年		21年		20年	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
大阪市立大							2			
大阪府立大										
名古屋市立大										
京都市立芸大										
岐阜薬科大										
会津大		1								
青森公立大										
青森県立保健大										
宮城大										
金沢美術工大	1						1			
秋田県立大										
九州歯大				1						

大 学 校

大 学 名	24年		23年		22年		21年		20年	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
防衛大	1	2					2		1	2
防衛医大							1			1
職業能開大				1	1					

大 学 名	24年		23年		22年		21年		20年	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
航空保安大										1
海上保安大										1
水産大		1								1

私立大学

大 学 名	24年 現 浪	23年 現 浪	22年 現 浪	21年 現 浪	20年 現 浪
千歳科学技術大	1	1	1		
北海道情報大					2
北 農 学 園 大	2	2	4	3	1
北海道東海大					
北海道医療大	6	1	3	2	1
北海道文教大		1	1	1	
北海学園大		1	3	2	
北海学園大			2	1	
北海商大	1				1
北海道工業大			2	2	
北海道工業大			2	2	1
札幌学院大	3			1	2
札幌学院大	3	1		2	1
札幌学院大	2	1			
北天翔使大	2				
手稲学院大		1			
東北福祉大	2	4	1	1	2
東北福祉大	1				1
北北福祉大		1	1	1	
埼玉工業大				1	
神田工科大学			1	2	
獨協医科大学	1	1	1	2	1
秀明大学			1		
帝京大学		5			
工学院大			1		
神奈川工科大学			1		
関東学院大			1		
流通経済大			1		
高崎健康福祉大					
獨協医科大学			1	2	1
日本薬大		1			3
明千葉工業大			2		
城西国際大			1	1	
城西国際大		1			
千葉商大	1				
青山学院大	1	1	3	4	2
高千穂大				1	
立正大学	1			1	3
北 立 薬 大	2	1	1	1	2
北 立 薬 大	2	1	6	1	1
杏林大学		3			
慶応義塾大	2	2	7	6	8
東京学舎大				1	4
国士学院大	2	1			1
駒沢大学		1	1		1
国際基督教大		2	2	1	3
芝浦工業大	5	2	3		1
順天堂大				1	1
昭和大学	1	1	1	6	1
昭和大学	1	1	1		3
成蹊大学		1			1
専修大学				2	1
創価大学			1		
東野大			1		
大 野 大					
拓殖大学		1	1	1	1
昭 和 大			1	3	
昭 和 大			1	2	
中央大学	9	6	6	7	4
帝京大学	1	4	1	2	1
帝京大学		4	1	2	1
埼玉医科大学		1	2		
東京経済大			1	1	
東京歯科大			2	1	1
東京慈恵会医大		1	2		
東京慈恵会医大					1
東京国際大		1	2	2	1
東京国際大		1			2

大 学 名	24年 現 浪	23年 現 浪	22年 現 浪	21年 現 浪	20年 現 浪
東京農業大		4	4	2	1
東京農工大		1	1	1	1
東京理科大学	6	2	4	3	2
東京理科大学		2		2	6
東 邦 大	1	2			1
東 邦 大		3		2	1
多摩大				1	
日 本 大	4	5	3	4	7
日 本 大	3			1	1
日 本 大			2		1
星 野 大				1	
星 野 大	2				
明法大					
明法大	2	6	4	4	2
日本医科大学		1		1	
日本医科大学	1				2
東 京 大	4	10	4	7	5
明治大学	1		4	1	1
明治大学	1		1	1	2
明治大学	5	1	6	7	2
武蔵野大	1			3	6
武蔵野大	5	14	5	8	7
神奈川大					10
神奈川大					6
松 学 大				1	2
麻 布 大			3		
東 京 大				2	
武蔵野大	1				
聖マリアンナ医大		1	1		
日本社会事業大				1	
日 本 大		1			
松 本 大	1				
富 山 大		1			
金 沢 大	1		1	1	
金 沢 大	1	1	4	1	
鶴 見 大				1	1
神奈川大					1
中 部 大	1	1	2		
中 部 大					1
大阪工大			1		
愛知学院大	2				1
愛知学院大				1	
南山大学	1		1		
藤田保健衛生大		1	2		
名城大学		2			
名古屋大学	3	1	3		1
同 立 大	4	2	5	3	2
同 立 大		1		1	1
大阪芸大					2
大阪芸大	1		1		
関西医科大学			1		3
関西医科大学					1
明治国際医療大			1		
関西学院大	2		3	2	1
京都産業大			1		
京 都 大				1	
日本福祉大				1	
大阪府大			1		
近 畿 大	3	2	1	1	
近 畿 大	3				1
兵庫医科大学		1			
川崎医科大学		1			1
龍 谷 大					2
久 留 米 大		1			
神戸大学					1
神戸大学					1
福岡大学					1
宮 崎 大	1				
立 命 館 大				3	
カリフォルニア立大					
ネ バ ダ 州 立 大	1				
フロリダ工科大	1				
ウエストバージニア州立大					
ミネソタ州立大					
サウスアラバマ州立大					
カンザス州立大			1		
短期大学				1	
その他の			1	1	1

クラブ戦績



サッカー部

○高体連地区大会

2回戦 ラ・サール 4―1 八雲

3回戦 ラ・サール 0―0 稜北

(PK 6―7)

バレーボール部

○高体連函館支部大会 4位

決勝リーグ

ラ・サール 0―2 市立函館

ラ・サール 0―2 函館工業

ラ・サール 1―2 函大有斗

○全日本バレーボール高等学校選手権大会

函館支部予選 優勝

ラ・サール 2―0 市立函館

ラ・サール 2―0 函館工業

ラ・サール 2―0 江差

○北海道予選会 2回戦敗退

ラ・サール 2―0 倶知安

ラ・サール 0―2 東海第四

硬式野球部

○第93回全国高等学校野球選手権大会南

北海道大会函館支部予選

1回戦 ラ・サール 4―3 八雲

2回戦 ラ・サール 0―12 函大有斗

バスケットボール部

○高体連函館支部大会

1回戦 ラ・サール 75―66 檜山北

2回戦 ラ・サール 55―59 函館工業

ハンドボール部

○高体連支部大会

1回戦 ラ・サール 18―37 函館工業

ラグビー部

○第64回北海道高等学校ラグビーフットボ

ール大会南選手権大会函館支部予選会

兼第91回全国高等学校ラグビーフット

ボール大会南大会函館支部予選会

準優勝

準決勝 ラ・サール 24―21 市立函館

決勝 ラ・サール 12―17 函館工業

○第64回北海道高等学校ラグビーフットボ

ール南北選手権大会兼第91回全国高等

学校ラグビーフットボール北海道

予選会3位

1回戦 ラ・サール 27―17 市立函館

準決勝 ラ・サール 7―43 札幌山の手

○平成23年度第19回北海道高等学校ラグ

ビーフットボール新大会函館支部予選

会兼第13回全国高等学校選抜ラグビー

フットボール大会函館支部予選会リレ

戦 優勝

第1節 ラ・サール 85―0

第2節 函館工業・函大有斗・

函大柏稜・高専合同

第3節 ラ・サール 85―5

第3節 函館稜北・戸井・大野農合同

第3節 ラ・サール 53―26 市立函館

○平成23年度第19回北海道高等学校ラグ

ビーフットボール大会北海道予選大会予

選リーグ

ラ・サール 69―0 中標津

ラ・サール 14―7 立命館慶祥

決勝トーナメント3位

準決勝 ラ・サール 17―34 遠軽

3位決定戦

ラ・サール 64―7 帯広合同

新聞局

○平成23年度全道高等学校新聞コンク

ル 写植部門優秀賞

剣道部

○高体連函館地区剣道大会 団体戦優勝

個人戦 佐竹(3年) 1回戦敗退

舩越(3年) 8位

細川(3年) 1回戦敗退

鈴木(2年) 準優勝

○高体連全道大会

団体戦 予選リーグ敗退

個人戦 鈴木(2年) 1回戦敗退

体操部

○高体連支部大会 金高彰海 5位

○高体連全道大会

種目別跳馬 金高彰海 3位

バドミントン部

○第63回北海道高等学校バドミントン選

手権大会

団体戦

1回戦 ラ・サール 1―3 函館水産

個人戦

ダブルス 加藤主幹・仲井峻二

シングルス 仲井峻二 2回戦敗退

植木聡之 2回戦敗退

ソフトテニス部

○第64回高体連函館支部ソフトテニス競技

選手権大会

団体戦 予選リーグ敗退

個人戦

ダブルス 窪田英朗・水戸理貴

2回戦敗退

放送局

○NHK杯全国放送コンテスト道南地区大会

アナウンス部門 石山春平 最優秀

朗読部門 吉井 優良

テレビドラマ部門 優良

研究発表部門 石山春平 最優秀

○NHK杯全国放送コンテスト北海道大会

出場

○第36回全国高等学校総合文化祭(富山

大会) 出場

空手同好会

○高体連函館支部予選

団体戦 1勝1敗 予選リーグ敗退

男子個人形 滝沢俊一 優勝

男子個人組手 大和田陸 4位

男子個人形 大和田陸 準優勝

男子個人組手 岡本拓也 3回戦敗退

○高体連全道大会

男子個人形 滝沢俊一 2回戦敗退

男子個人組手 大和田陸 1回戦敗退

将棋部

○第44回函館地区高校将棋大会

団体戦 準優勝

○第47回全道高等学校将棋選手権大会

団体戦 ベスト8

○第47回全道高等学校閉幕選手権大会

団体戦 4位

卓球部

○高体連函館支部卓球選手権大会

団体戦 1回戦敗退

シングルス

2回戦敗退 及能・住田・森

1回戦敗退 平井

ダブルス 2回戦敗退 及能・住田

1回戦敗退 森・平井

柔道部

○全道大会

個人戦 90kg級 谷川丈太 出場

○北海道高等学校柔道大会

個人無差別級 谷川丈太 準優勝

○全国高等学校柔道選手権北海道大会

団体戦 北海道ベスト8

個人戦 90kg級 谷川丈太 3位

美術部

○高文連道南支部美術展(H23.9.21~9.5)

3-F 仲 駿輔「Sympathy」立体

最優秀賞(全道大会出品)

3-E 平塚崇晃「居場所」(絵画)

2-E 濱田祥太「PINK」デザイン

1-A 吉井 優

「DISCOMMUNICATION」(絵画)

アーチェリー部

○第43回北海道高等学校アーチェリー競

技大会兼高門宮賜牌兼第44回全国高等

学校アーチェリー選手権大会北海道予
選会

個人戦 永山雄太(69位)・熊谷健太(71

位)・鬼頭幸暉(74位)・安藤弘二(82

位)・見田剛弘(83位)・奥野正義(95

位)・水口隆介(99位)

団体戦 予選敗退

吹奏楽部

○第56回北海道吹奏楽コンクール函館地

区大会

高等学校C編成の部 金賞(地区代表)

全道大会 銀賞

硬式テニス部

○第51回北海道高等学校テニス選手権大

会兼第101回全国高等学校テニス選手権

大会北海道地区予選会

男子団体戦 2回戦敗退

男子個人戦 シングルス

高野雄暉 2回戦敗退

ダブルス

山本大輔・田淵真大 3回戦敗退

○北海道ジュニアテニス選手権大会

16歳以下男子ダブルス

秋葉颯樹・高野雄暉

決勝戦敗退(2位・全国大会出場)

16歳以下男子シングルス

秋葉颯樹 決勝戦敗退

高野雄暉 2回戦敗退

水泳部

○第64回高体連函館支部選手権

50m自由形 神 智尚 4位

100m自由形 神 智尚 4位

100m平泳ぎ 相馬快星 3位

200m平泳ぎ 相馬快星 3位

400mリレー

神・斎藤・甲地・相馬 4位

400mメドレーリレー

神・斎藤・甲地・相馬 2位

○全道高等学校体育大会

自由形(50m・100m)

神 智尚 予選敗退

平泳ぎ(50m・100m)

相馬快星 予選敗退

写真部

○高文連道南支部第31回地区高校写真展

武田毅司(1年)

「今、ふり返る」最優秀

大野耕太郎(2年)

「走れ、草食系!」入選

石幡智春(2年)

「走者の休憩(組3)」佳作

小西貴之(1年)

「雄大な自然の中で(組3)」佳作

○北海道高文連第35回全道高等学校写

真展・研究大会

武田毅司(1年)「今、ふり返る」佳作

グリー部

○第78回NHK全国音楽コンクール道南地

区大会 銀賞

○第62回北海道合唱コンクール高等学校A

部門 銅賞

軟式野球部

○第56回全国高等学校軟式野球選手権大

会北海道大会兼第61回北海道高等学校

軟式野球選手権大会函館支部予選大会

1回戦 ラ・サール 2-3 函館工業

○第46回秋季函館支部高等学校軟式野球

大会兼第22回秋季北海道高等学校軟式

野球大会函館支部予選大会 優勝

1回戦 ラ・サール 7-3 函大有斗

決勝 ラ・サール 7-4 函館工業

○第22回秋季北海道高等学校軟式野球大会

1回戦 ラ・サール 0-10 滝川

陸上部

○高体連函館支部大会

100m 成田和正 6位

200m 高松勝国 2位

110mH 金井大旺 2位

400mR 3位

砲丸投 久保木秀幸 4位

円盤投 久保木秀幸 3位

○高体連全道大会

100m 成田 予選敗退

200m 高松 7位

110mH 金井 3位

400mR 準決勝敗退

1600mR 予選敗退

砲丸投 久保木 予選敗退

円盤投 久保木 予選敗退

○高校総体(岩手県北上市)北東北インターハイ

110mH 金井 予選敗退

○国体北海道予選会

110mH(少年B) 金井

(山口国体の北海道代表選手に選ばれる)

理事会、評議員会からの報告

はじめに

新体制の同窓会の組織の特徴は、本部と支部体制、本部では総会開催をしない、理事会（執行役員）と評議員会（理事会の提案、執行状況を審議する…いわば最高意思決定機関）の体制、そして評議員は各支部からの選出による、などが挙げられます（巻末の会則等参照）。

この体制下で2012年3月17日に第1回理事会が、2012年5月19日に第1回評議員会が開催されました。理事会は今年度の事業計画、予算案、その他の案件について理事会全体としての方針を固めるための会議となりました。この理事会の議論を経て、理事会での方針や提案を評議員会で審議・審査してもらうということで5月19日に評議員会が開催され、函館ラ・サール学園同窓会としての今年度の事業方針およびその具体的計画が決定されました。

2012年度の事業計画（初年度…平成23年11月から平成25年3月までの事業計画）

1. 函館ラ・サール学園卒業生との消息把握と名簿作成およびその管理
新体制事務局と島本広報担当理事とでバックアップ体制を互いに取ながらリスク分散を図りながら管理
2. 函館ラ・サール学園、仙台ラ・サールホームおよびラ・サール会の要請に応じた寄付事業
ミンダナオ島洪水被害に鹿児島、函館同窓会が各10万円寄付
タイバンブースクールからのトラック購入の寄付依頼に対し、50万円を上限に寄附に応ずる交渉
3. 函館ラ・サール学園の在校生に対する奨学金助成事業
一人あたり年額24万円を9人の在校生に…経済的な理由を第一義に銚衡学園には奨学金受給生徒に、感謝の気持ちを札状等で表す程度の良識を持つように指導を要請
4. 各支部に対する補助金交付
5. 同窓会誌の発行
6. 会費に関する細則の制定と会員からの会費徴収
今後一年間をかけて、会費の年額、徴収方法を詰める

7. ラ・サール同窓会日本連盟の結成
鹿児島同窓会が正式に承認したら立ち上げる予定

8. 学園内に事務局の立ち上げ

9. 函館ラ・サール学園同窓会の事務局は学園内…進路資料室を借りて作業ラ・サール会修道士来日80周年記念事業

「趣旨」1932年（昭和7年）、4人のカナダから派遣されたラ・サール会のブラザーが函館に初来日してから80年の歳月が経つのを契機に、先達のブラザーの、日本の子供たち、青少年に対する教育のために、身を賭した献身、苦闘に、最大の敬意を払い「ラ・サール会修道士来日80周年」をお祝いする…宗教法人ラ・サール会修道院および学校法人函館ラ・サール学園との共催を考える

「記念式典」2012年8月25日（函館支部総会と同時開催）…記念講演と写真のパネル展示

「事業」①「道のりー日本ラ・サール会略史」（1981年日本ラ・サール会発行）の復刻、②日本ラ・サール会の歴史を記録する事業の立ち上げ（文献調査（ブラザーが記録した仏語の記録の翻訳）、写真等の資料収集、ブラザーへのインタビュー取材など）

10. 「予算」一般会計の「預金」の中から約150万円を予定
その他同窓会の目的を達成するために必要な事業

2012年度の予算（初年度…平成23年11月から平成25年3月までの予算）

（決算予算の表参照）

1. 本会の予算を「一般会計」、「奨学金会計」および「基本財産」に分ける
2. 一般会計の予算規模は700万円余り（詳細は決算予算の表及び会計報告へのメモ参照）
3. 50周年記念事業の決算報告を2〜3ヶ月以内に公表する
4. 会費収入が100万円の試算根拠の明示する（会計報告へのメモ参照）

今年とこれからと

新体制は始まったばかりです。月並みな言い方ですが、今年は同窓会の活動をしつかりと軌道に乗せることだと思います。かなりのものが初めてづくしですから、理事も評議員も戸惑うことが多いと思います。行き届かない点も多く出てくるものと思われまふ。問題は、われわれ一人ひとりがいかに公平、公正な同窓会運営を考

No.1 平成23年度 一般会計報告 (単位：円)

勘定科目	自	平成23年7月1日	平成23年11月5日	平成23年7月1日
	至	平成23年11月4日	平成24年3月31日	平成24年3月31日
会 費 収 入		0	6,844,200	6,844,200
グッズ販売収入		94,500	143,500	238,000
名 簿 収 入		5,000	5,000	10,000
同窓会誌広告収入		0	110,000	110,000
その他の収入		0	32,000	32,000
利 息 収 入		30,657	433	31,090
収 入 計		130,157	7,135,133	7,265,290
広 告 宣 伝 費		40,845	70,560	111,405
寄 付 金			100,000	100,000
会 議 費		74,810	20,000	94,810
消 耗 品 費		15,288	671,191	686,479
旅 費		1,727,800	400,000	2,127,800
手 数 料		141,540	125,515	267,055
通 信 費		9,200	0	9,200
グッズ仕入		93,135	92,800	185,935
総 会 費		0	374,403	374,403
卒業関連費			346,500	346,500
雑 費		157,500	298,000	455,500
繰 越 金		△2,129,961	4,636,164	2,506,203
支 出 計		130,157	7,135,133	7,265,290

え、いかに一体感のある、絆の強い同窓会にするかにあるのではないかと考えています。同窓会としての品格も問われるものと考えています。

同窓会の理事も、評議員も、あるいは支部役員も、本来的にパブリックな気分を強く持った人達だと信じています。こうした方々と同窓会を、またその絆を、将来に向かって築いていく作業は、真に意義のある仕事だと感じています。

パッションは十分あるけれども、われわれも人間だから、やる仕事がいとも完璧だというわけにはいかないことも、開き直りではなく、分かっているつもりでいます。そういうときには、是非とも、同窓生の方々の温かい応援や支援が必要になります。

一所懸命に精進します。そして、皆さんのご協力も最大に頼みにしたいと考えています。われわれも、同窓生皆さんも、学園の健全な発展のために、同窓生同士の親睦交流のために、そして同窓会そのものの力強い成長のために、同窓会の活動の一つ一つに強い関心を寄せていただきたいと、切に期待を込めて、理事会、評議員会の報告といたします。

事務局長 伊藤恒敏（6期…仙台）

No.2 平成24年度 一般会計 予算案 (単位：円)

	平成23年度 今期決算額 (平成23年7月1日～平成24年3月3日)		平成24年度 来期予算額 (平成24年4月1日～平成25年3月3日)	
(収 入 の 部)				
勘 定 科 目	金 額	内 容	金 額	内 容
会 費 収 入	6,844,200	36,600×187名分	6,844,200	36,600×187名分
グッズ販売収入	238,000	Tシャツ キャップ他	250,000	
名 簿 収 入	10,000	2名分	10,000	
同窓会誌広告収入	110,000	広告収入 10名分	200,000	
そ の 他 の 収 入	32,000	総会御祝儀4名分 他	10,000	
利 息 収 入	31,090	預金利息	30,000	
年 会 費 収 入	0		1,000,000	
収 入 計	7,265,290		8,344,200	
(支 出 の 部)				
広 告 宣 伝 費	111,405	総会、ラクロワ元校長ミサ 新聞広告	80,000	
寄 付 金	100,000	フィリピンへ(台風被害支援金)	1,000,000	
支 部 運 営 費	0		2,900,000	東京・函館100万円、札幌・東北・西日本30万円
会 報 関 係 費	0		1,600,000	新会誌作成
会 議 費	94,810	理事会、あり方委員会 食事代	100,000	
消 耗 品 費	686,479	事務局パソコン、総会案内	50,000	
旅 費	2,127,800	23/10マニラ世界同窓会、あり方委員会、理事会 旅費	800,000	
手 数 料	267,055	振込手数料 会計事務	350,000	
通 信 費	9,200	ハガキ 切手代	40,000	
グ ッ ズ 仕 入	185,935	グッズ商品仕入	200,000	
総 会 費	374,403	23/11/5 総会費	0	
卒 業 関 連 費	346,500	卒業証書ホルダー	346,500	
雑 費	455,500	名簿 ホームページ管理料、ラベル理事長記念品、総会バンド代 他	800,000	
繰 越 金	2,506,203		77,700	予備費
支 出 計	7,265,290		8,344,200	

No5 奨学会会計 決算報告及び予算案
平成23年7月1日～平成24年3月31日

(単位：円)

(奨学金勘定)	平成23年6月 30日 残高	平成24年3月 31日 残高	
定期預金(商工中金)	20,000,000	20,000,000	
普通預金(商工中金)	238,611	270,610	
定期預金(函館商工信組)	5,500,000	3,300,426	
普通預金(函館商工信組)	33,325	74,919	
合 計	25,771,936	23,645,955	

(収入の部)	H23.7.1～24.3.31	H24.4.1～25.3.31	
定期利息(商工中金)	31,999	20,000	
定期利息(函館商工信組)	2,020	2,000	
合 計	34,019	22,000	

(支出の部)	H23.7.1～24.3.31	H24.4.1～25.3.31	
奨 学 金 支 出	2,160,000	2,160,000	9名×24万円

	H24年3月31日	H25年3月31日	
奨学金勘定残高	23,645,955	21,507,955	

No3 貸借対照表
(平成24年3月31日現在)

(単位：円)

資産の部		負債および正味財産の部	
I 流動資産	10,730,809	I 流動負債	0
預金(一般会計)	8,282,266	II 正味財産の部	8,224,606
預金(一般会計)	11,001		
預金(一般会計)	42		
前 払 金	1,386,000	当期正味財産増加額	2,506,203
在 庫	10,051,500		
資 産 合 計	10,730,809	負債および正味財産の合計	10,730,809

No4 正味財産増減計画書
平成23年7月1日～平成24年3月31日

(単位：円)

科 目	金 額
I 増 加 の 部	
1 資 産 増 加 額	2,506,203
2 負 債 減 少 額	0
II 減 少 の 部	0
当 期 正 味 財 産 増 加 額	2,506,203
前 期 繰 越 正 味 財 産 額	8,224,606
正 味 財 産 合 計 額	10,730,809

1. 会計報告(予算書と決算書)は2通り作成…一般的形式…単年度の出入のみ記載…繰越は別扱い…繰越金組入型は繰越金を次年度収入に記載
2. 本年度は初年度でもあり、会計年度が例外(2011年11月5日から2013年3月31日まで)
3. 会費収入…毎年2月に学園から支払われる…従って初年度内に2度支払われる予定
4. グッズ販売収入は目安…これだけの収入は得られない可能性大…初年度なので手探りの案
5. 広告収入は同窓会誌編集に伴うもの
6. 年会費収入は平成24年度ではまだ、実際に徴収しないが、一応、計上した約100万円の計算(試算)根拠は次の通りである…卒業22年後40歳以上の会員に会費を負荷する…連絡先判明者が3、986人…このうちの10%が会費納入をしてけると仮定し、会費は本部会費として3千円とすると、119万7千円となる。
7. 寄附金はここ数年來の実績は次のとおり

No6 基本財産 決算報告及び予算案
平成23年7月1日～平成24年3月31日

(単位：円)

(奨学金勘定)	平成23年6月 30日 残高	平成24年3月 31日 残高	
定期預金(みちのく銀行)	12,134,126	12,134,126	
合 計	12,134,126	12,134,126	

(収入の部)	H23.7.1～24.3.31	H24.4.1～25.3.31	
定期利息(みちのく銀行)	0	7,000	
合 計	0	7,000	

(支出の部)	H23.7.1～24.3.31	H24.4.1～25.3.31	
な し	0		
合 計	0	0	

	H24年3月31日	H25年3月31日	
基本財産勘定残高	12,134,126	12,141,126	

第1章 総 則

(名称)

第1条 この会は、函館ラ・サール学園同窓会と称する。

(事務所)

第2条 この会は、事務所を函館ラ・サール学園内に置く。

(会員)

第3条 この会は、函館ラ・サール学園卒業生を会員（函館ラ・サール学園同窓会員）として構成する。

(会と支部)

第4条 この会に、支部を置く。この会は各支部を統括する。

2 支部は全国各地で同窓会活動を自発的に始め、この会が支部として承認した組織とする。

3 支部に関し必要な事項は、会長が理事会および評議員会の同意を得て細則として別に定める。

第2章 目的及び事業

(目的)

第5条 この会は、会員相互の親睦を図り、函館ラ・サール学園の健全な発展へ協力し、支援を行い、貢献することを目的とする。この目的を幅広い会員の協力によって達成するため、本会は政治活動に参加しない。また本会の名のもとに個々の会員が営利活動を行ってはならない。

(事業)

第6条 この会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 函館ラ・サール学園卒業生の消息把握と名簿作成およびその管理のための事業
- (2) 函館ラ・サール学園、仙台ラ・サールホームおよびラ・サール会の要請に応じた寄付事業

- (3) 函館ラ・サール学園の在校生に対する奨学金助成事業
- (4) 各支部に対する補助金交付を通じての支部活動支援事業
- (5) 函館ラ・サール学園同窓会員に対し会報を発行する事業
- (6) 函館ラ・サール学園同窓会員から会費を徴収する事業
- (7) 函館ラ・サール学園と函館ラ・サール学園同窓会が共催する種々の記念事業の企画実行
- (8) ラ・サール学園同窓会（鹿児島）および世界ラ・サール同窓会との連携事業
- (9) その他前条の目的を達成するために必要な事業

第3章 資産及び会計

(資産の構成)

第7条 この会の資産は、次に掲げるものをもって構成する。

- (1) 財産目録に記載された財産
- (2) 資産から生ずる収入
- (3) 会費
- (4) 寄附金品
- (5) 事業に伴う収入
- (6) その他の収入

2 会費に関し必要な事項は、会長が理事会および評議員会の同意を得て細則として別に定める。

3 会員は本会則および細則で定められた会費を納入しなければならない。

(資産の種類別)

第8条 この会の資産は、基本財産及び運用財産の2種類とする。

2 基本財産は、この会の目的である事業を行うために不可欠な財産であり、次に掲げるものをもって構成する。

- (1) 基本財産として指定された財産
- (2) 基本財産とすることを指定して寄附された財産
- (3) 理事会で基本財産に繰り入れることを議決した財産

(基本財産の処分の制限)

第9条 基本財産は、これを処分しまたは担保に供することができない。ただし、

やむを得ない理由があるときは、あらかじめ理事会で理事の4分の3以上の同意を経て、評議員会において、評議員の4分の3以上の同意を得て、その一部を処分し、またはその全部若しくは一部を担保に供することができ。

(資産の管理)

第10条 資産は、会長が管理し、その方法は、会長が理事会の議決を経て定める。

2 基本財産のうち、現金は、確実な金融機関等に預け入れ、若しくは、信託会社へ信託し、または国債、公債その他確実な有価証券に換えて保管しなければならぬ。

(経費の支弁)

第11条 この会の経費は、運用財産をもって支弁する。

(特別会計)

第11条の2 この会の特定の事業を遂行するため、特別会計を設けることができる。

(事業年度)

第12条 この会の事業年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(事業計画及び収支予算)

第13条 この会の事業計画書及び収支予算書は、毎事業年度開始の日の前日までに、会長が作成し、理事会の議決を経て、評議員会の承認を得なければならない。

2 会長は、前項の事業計画及び収支予算を変更しようとするときは、理事会の承認を経て、評議員会の承認を得なければならない。ただし、軽微な変更については、この限りではない。

3 前項の書類については、事務所に、当該事業年度が終了するまでの間備え置き、会員の閲覧に供するものとする。

(事業報告及び決算)

第14条 この会の事業報告及び決算は、毎事業年度終了後、会長が次の書類を作成し、監事の監査を受けた上で、理事会の承認を経て、評議員会に提出し、第1号及び第2号の書類についてはその内容を報告し、第3号から第6号までの書類については承認を得なければならない。

- (1) 事業報告
- (2) 事業報告の附属書類
- (3) 貸借対照表
- (4) 正味財産増減計算書（損益計算書）

(5) 貸借対照表及び正味財産増減計算書の附属書類

(6) 財産目録

2 前項の規定により報告され、または承認を受けた書類のほか、次の書類を主たる事務所に5年間備え置き、会員の閲覧に供するとともに、会則を事務所に備え置き、会員の閲覧に供するものとする。

- (1) 監査報告
- (2) 理事及び監事並びに評議員の名簿
- (3) 運営組織及び事業活動の状況の概要及びこれらに関する数値のうち重要なものを記載した書類

第4章 評議員

(評議員)

第15条 この会に、評議員15名以上20名以内を置く。

(評議員の選任及び解任)

第16条 評議員の選任及び解任は、評議員会の議決により行う。

2 評議員は、この会の理事または監事を兼ねることができない。

3 評議員の選任に関し必要な事項は、理事会および評議員会の決議により細則として別に定める。

(任期)

第17条 評議員の任期は、選任後2年以内に終了する事業年度のうち、最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとし、再任を妨げない。

2 任期の満了前に退任した評議員の補欠として選任された評議員の任期は、退任した評議員の任期の満了する時までとする。

3 評議員は、第15条に定める定数に足りなくなるときは、辞任または任期満了により退任した後も、新たに選任された者が就任するまでは、なお評議員としての権利義務を有する。

(報酬等)

第18条 評議員は無報酬とする。

2 評議員には、その職務を行うために要する費用の支払いをすることができ

る。

3 前項の費用の支払いについて必要な事項は、細則として理事会の決議により別に定める。

第5章 評議員会

(構成)

第19条 評議員会は、すべての評議員をもって構成する。

(権限)

第20条 評議員会は、次の事項について決議する。

- (1) 理事及び監事の選任及び解任
- (2) 貸借対照表の承認
- (3) 正味財産増減計算書（損益計算書）の承認
- (4) 貸借対照表及び正味財産増減計算書の附属書類の承認
- (5) 財産目録の承認
- (6) 会則の変更
- (7) 残余財産の処分
- (8) 基本財産の処分または除外の承認
- (9) その他評議員会で決議するものとして法令またはこの会則に定められた事項

(開催)

第21条 評議員会は、定時評議員会及び臨時評議員会の2種とする。

2 定時評議員会は、毎年1回5月に開催する。

3 臨時評議員会は、必要がある場合には、いつでも招集することができる。

(招集)

第22条 評議員会は、法令に別段の定めがある場合を除き、理事会の決議に基づき、会長が招集する。

2 前項にかかわらず、評議員会は理事会に対し、評議員会の目的である事項及び招集の理由を示して、評議員会の招集を請求することができる。

3 前項による請求があつたときは、会長は遅滞なく評議員会を招集しなければならない。

(招集の通知)

第23条 会長は、評議員会の開催日の14日前までに、評議員に対して、会議の日時、場所、目的及び審議事項を記載した書面をもって通知しなければならない。前項にかかわらず、評議員全員の同意があるときは、招集の手続きを経ることなく、評議員会を開催できる。

(議長)

第24条 評議員会の議長は、その評議員会において、出席した評議員の中から選出

する。

(定足数)

第25条 評議員会は、評議員の過半数の出席がなければ開催することができない。

(決議)

第26条

評議員会の決議は、法令またはこの会則に別段の定めがある場合を除き、評議員の過半数が出席し、出席した評議員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の裁決することとする。

2 前項前段の場合において、議長は、評議員として議決に加わることはできない。

3 第1項の規定にかかわらず、次の決議は、評議員の3分の2以上に当たる多数をもって行わなければならない。

- (1) 監事の解任
- (2) 会則の変更
- (3) 基本財産の処分または除外の承認
- (4) その他法令で定められた事項

4 理事または監事を選任する議案を決議するに際しては、各候補者ごとに第3項の決議を行わなければならない。理事または監事の候補者の合計が第30条に定める定数を上回る場合には、過半数の賛成を得た候補者の中から得票数の多い順に定数の枠に達するまでの者を選任することとする。

(決議の省略)

第27条 評議員会の目的である事項について提案した場合においてその提案について、議決に加わることでできる評議員の全員が書面または電磁的記録により同意の意思表示をしたときは、その提案を可決する旨の評議員会の決議があつたものとみなす。

(議事録)

第28条 評議員会の議事については、法令で定めるところにより次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。

- (1) 会議の日時及び場所
- (2) 構成員の現在数
- (3) 評議員会に出席した評議員の数
- (4) 議決事項
- (5) 議事の経過の概要及びその結果
- (6) 議事録署名人の選任に関する事項

- 2 議事録には、議長のほか、その評議員会に出席した評議員のうちから、当該会議において選出された議事録署名人2人以上が署名押印しなければならない。

(評議員会運営規則)

- 第29条 評議員会の運営に関し必要な事項は、法令またはこの会則に定めるもののほか、評議員会において定める評議員会規則による。

第6章 役員

(役員の設定)

- 第30条 この会に、次の役員を置く。

- (1) 理事8名以上10名以内
(2) 監事2名以内
2 理事のうち、1名を会長、2名を副会長、1名を事務局長、1名を会計理事、1名を広報理事、1名を学園担当理事、1名を渉外理事とする。

(役員の選任)

- 第31条 理事及び監事は、評議員の決議によって選任し、会長が委嘱する。

- 2 会長、副会長、事務局長、会計理事、広報理事、学園担当理事、渉外理事は、理事会の決議によって理事の中から選定する。

- 3 理事及び監事は、その職務を兼ねることができない。

(理事の職務・権限)

- 第32条 理事は、理事会を構成し、法令及びこの会則に定めるところにより、本会の業務を執行する。

- 2 会長は、この会を代表し、その業務を統括する。会長は特に、重要な学校行事には在校生に対して本会を代表するものとして、学園の求めに応じて適切な挨拶をする責務を負う。重要な学校行事は理事会の議を経て別に定める。

- 3 会長に事故があるときまたは会長が欠けたときは、副会長のうち年長のものが、年長の副会長もかけるときは年少の副会長が、その職務を代行する。

- 4 事務局長は、会長、副会長を補佐し、この会の業務を執行する。

- 5 会長、副会長及び事務局長は、毎事業年度毎に4ヶ月を超える間隔で2回以上、自己の職務の執行状況を理事会に報告しなければならない。

(監事の職務・権限)

- 第33条 監事は、次に掲げる職務を行う。

- (1) 理事の職務執行を監査し、監査報告を作成する。
(2) この会の業務並びに財産及び会計の状況を監査すること。
(3) 評議員会及び理事会に出席し、必要であると認めるときは意見を述べることができる。
(4) 理事に対して、いつでも事業の報告を求め、この会の業務及び財産の状況の調査をすることができる。
(5) 理事が不正の行為をし、若しくはその行為をするおそれがあると認めるとき、または法令若しくは会則に違反する事実若しくは著しく不当な事実があると認めるときは、これを評議員会及び理事会に報告すること。
(6) 前号の報告をするため必要があるときは、会長に理事会の招集を請求すること。ただし、その請求のあった日から5日以内に、その請求のあった日から2週間以内の日を理事会の日とする招集通知が発せられない場合は、直接理事会を招集すること。

(役員の任期)

- 第34条 理事の任期は、選任後2年以内に終了する事業年度のうち、最終のものに関する定時評議員会の終結のときまでとし、再任を妨げない。

- 2 監事の任期は、選任後2年以内に終了する事業年度のうち、最終のものに関する定時評議員会の終結のときまでとし、再任を妨げない。
3 補充として選任された理事または監事の任期は、前任者の任期の満了する時までとする。

- 4 理事または監事は、第30条に定める定数に足りなくなるきは、任期の満了または辞任により退任した後も、新たに選任された者が就任するまで、なお理事または監事としての権利義務を有する。

(役員の解任)

- 第35条 理事または監事が次のいずれかに該当するときは、評議員会の4分の3以上の決議によって、解任することができる。

- (1) 職務上の義務に違反し、または職務を怠ったとき。
(2) 心身の故障のため、職務の執行に支障があり、またはこれに堪えないと認められるとき。

(役員の解任)

第35条 理事または監事が次のいずれかに該当するときは、評議員会の4分の3以上の決議によって、解任することができる。

- (1) 職務上の義務に違反し、または職務を怠ったとき。
- (2) 心身の故障のため、職務の執行に支障があり、またはこれに堪えないと認められるとき。

2 前項の規程により役員を解任しようとするときは、その役員にあらかじめ通知するとともに、解任の議決を行う評議員会において弁明の機会を与えなければならぬ。

(報酬等)

第36条 理事及び監事は無報酬とする。

- 2 役員には、その職務を行うために要する費用の支払いをすることができる。
- 3 前項の費用の支払いについて必要な事項は、細則として理事会の決議により別に定める。

(名誉会長及び顧問)

第37条 この会に名誉会長及び顧問若干名を置くことができる。

2 名誉会長は、函館ラ・サール学園の校長若しくは理事長を、理事会が推薦し、会長が委嘱する。

3 顧問は、会長経験者および同窓会活動に顕著に功績のある者のうちから理事会が推薦し、会長が委嘱する。

4 名誉会長及び顧問は、無報酬とする。

(名誉会長及び顧問の職務)

第38条 名誉会長及び顧問は、理事会に出席して意見を述べることができる。ただし、名誉会長及び顧問には理事会における議決権はない。

第7章 理事会

(理事会の構成)

第39条 理事会は、すべての理事をもって構成する。

(権限)

第40条 理事会は、この会則に別に定めるもののほか、次の職務を行う。

- (1) 評議員会の日時及び場所並びに目的である事項の決定
- (2) 規則の制定、変更及び廃止に関する事項

- (3) 前各号に定めるもののほか、この会の業務執行の決定
- (4) 理事の職務の執行の監督
- (5) 会長、副会長及び事務局長の選任及び解職

(種類及び開催)

第41条 理事会は、通常理事会及び臨時理事会の2種とする。

2 通常理事会は、毎事業年度毎に5月及び3月の2回開催する。

3 臨時理事会は、次の各号に該当する場合に開催する。

- (1) 会長が必要と認めたとき。
- (2) 会長以外の理事の3分の1以上から会議の目的である事項を記載した書面をもって会長に招集の請求があったとき。
- (3) 前号の請求のあった日から5日以内に、その請求のあった日から2週間以内の日を理事会の日とする理事会の招集の通知が発せられない場合に、その請求した理事が招集したとき。

(4) 第32条第1項第6号の規定により、監事から会長に招集の請求があったとき、または監事が招集したとき。

(招集)

第42条 理事会は、会長が招集する。ただし、前条第3項第3号により理事が招集する場合及び前条第3項第4号により監事が招集する場合を除く。

2 前条第3項第3号による場合は、理事が、前条第3項第4号による場合は、監事が理事会を招集する。

3 会長は、前条第3項2号または第4号に該当する場合は、その請求があった日から2週間以内に理事会を招集しなければならない。

4 理事会を招集するときは、会議の日時、場所、目的である事項を記載した書面をもって、開催日の14日前までに、各理事及び各監事に対して通知しなければならない。

5 前項の規定にかかわらず、理事及び監事の全員の同意があるときは、招集の手続きを経ることなく理事会を開催することができる。

6 会長が欠けたとき、または会長に事故があるときは、副会長のうち年長のものが理事会を招集する。

(議長)

第43条 理事会の議長は、会長がこれに当たる。

(定足数)

第44条 理事会は、理事の過半数以上の出席がなければ会議を開くことができない。

(決議)

第45条

理事会の議事は、この会則に別段の定めがあるもののほか、議決に加わることのできる理事の過半数が出席し、その過半数をもって決し、可否同数のときは議長の裁決することによる。

2

前項前段の場合において、議長は、理事として議決に加わることはできない。

(決議の省略)

第46条

理事が、理事会の決議の目的である事項について提案をした場合において、その提案について、議決に加わることのできる理事の全員が書面または電磁的記録により同意の意思表示をしたときは、その提案を可決する旨の理事会の議決があつたものとみなすものとする。ただし、監事が異議を述べたときは、その限りではない。

(議事録)

第47条

理事会の議事については、法令で定めるところにより次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。

(1) 会議の日時及び場所

(2) 構成員の現在数

(3) 理事会に出席した理事の氏名

(4) 議決事項

(5) 議事の経過の概要及びその結果

(6) 議事録署名人の選任に関する事項

2 議事録には、議長のほか、その理事会に出席した評議員のうちから、当該会議において選出された議事録署名人2人以上が署名押印しなければならない。

(理事会運営規則)

第48条

理事会の運営に関し必要な事項は、法令または会則に定めるもののほか、理事会において定める理事会運営規則による。

(委員会)

第49条

この会の事業を推進するために、理事会は理事会が必要と認めた委員会を、理事会の決議により設置することができる。

2

委員会の任務、構成及び運営に関し必要な事項は、理事会の決議により別に定める委員会規程による。

第8章 委員会

第9章 会則の変更及び解散

(会則の変更)

第50条

この会則は、評議員会において、評議員の3分の2以上の議決を経なければ変更することはできない。

(解散)

第51条

この会は、第5条に規定する目的が達成（または達成の不能が確定）したときは、評議員会において、議決に加わることのできる評議員の議決権の4分の3以上の議決により解散することができる。

(残余財産の帰属)

第52条

この会が解散等により清算するときに有する残余財産は、評議員会の決議を経て、函館ラ・サール学園学校法人、この会と類似の事業を目的とする会または国若しくは地方公共団体に贈与するものとする。

第10章 事務局

(設置等)

第53条

この会の事務を処理するため、事務局を置く。

2

事務局には、事務局長及びその他の職員若干人を置き、事務職員は会長が任命する。

3

事務局及び職員に関し必要な事項は、会長が理事会および評議員会の同意を得て別に定める。

(備付け帳簿及び書類)

第54条

事務所には、常に次に掲げる帳簿及び書類を備えておかなければならない。

(1) 会則

(2) 理事、監事及び評議員の名簿

(3) 会則に定める機関（理事会及び評議員会）の議事に関する書類

(4) 財産目録

(5) 事業計画書及び収支予算書

(6) 事業報告書及び計算書類等

(7) 監査報告書

(8) その他法令で定める帳簿及び書類

2 前項各号の帳簿及び書類等の閲覧については、法令の定めによるほか、理事会の決議を得て別に定める。

第11章 情報公開及び個人情報の保護

(情報公開)

第55条 この会は、公正で開かれた活動を推進するため、その活動状況、運営内容、財務資料等を積極的に公開するものとする。

2 情報公開に関する必要な事項は、理事会の議決により別に定める。

(個人情報の保護)

第56条 この会は、業務上知り得た個人情報の保護に万全を期すものとする。

2 個人情報の保護に関する必要な事項は、理事会の議決を得て別に定める。

第12章 雑 則

(委任)

第57条 この会則に定めるもののほか、この会の運営に必要な事項は、会長が理事会の議決を経て別に定める。

付 則

1 この会則は、平成23年11月5日から施行する。

2 この会の改編当初の理事、監事（及び会計監査人）並びに評議員は、第16条第1項及び第31条第1項の規定にかかわらず、改編申請者の定める別紙役員（職）名簿のとおりとし、その任期は、第17条第1項並びに第34条第1項及び第2項の規定にかかわらず、役員（職）名簿に記載の日までとする。

3 この会の改編初年度の事業計画及び収支予算は、第12条第1項の規定にかかわらず、改編申請者の定めるところによる。

4 この会の改編初年度の事業年度は、第12条の規定にかかわらず、平成23年11月5日から平成25年3月31日までとする。

平成23年11月5日

支部の届出、支部の承認などに関する細則

第1条 この細則は函館ラ・サール学園同窓会の支部の届出、承認に関し、必要な事項を定める。

第2条 全国各地で同窓生が自発的に始めた同窓会活動を、その発足の経緯、歴史、会員構成などを考慮し、当該地域の同窓会組織を、函館ラ・サール学園同窓会により支部として承認する際、その承認が公平、公正に行われるように細則を定めるものとする。

第3条 支部としての新たな届出をしようとする組織は次の各号の条件を満たしていることを確認の上、函館ラ・サール学園同窓会事務局に、各号の書類とともに「支部承認申請書」を提出するものとする。

(1) 支部として届け出ようとする地区において50名以上の卒業生の居住を確認できること、その名簿を作成していること

(2) 当該地域において少なくとも年1回の活動を過去5年以上にわたって続けていることを示す活動（事業）報告書を作成していること

(3) 当該地域の同窓会組織の代表者名と可能であれば役員名簿

(4) 隣接する既存の支部との間での地域割りに関する確認書（署名捺印のある書類が望ましい）

第4条 その他の関連する書類

(5) 各地域から「支部承認申請書」が提出された場合は、函館ラ・サール学園同窓会理事会は前条各号に示された条件を満たすかどうかの審議を可能な限り速やかに行い、評議員会の審議を経て次年度の開始までに結論を出すものとする。

第5条 本会が2011年11月5日に新しい規約を制定する時点で既存の支部として承認している支部は次の各号の通りである。

- 第6条
- (1) 札幌支部
 - (2) 函館支部
 - (3) 東北支部
 - (4) 東京支部
 - (5) 西日本支部

各支部の活動は原則として各支部の自由意志と見識に委ねられる。ただし、各支部の年度末までには本部の要請に応じて、事業報告書と決算書を

本部事務局に提出しなければならない。
第7条 本細則の改廃は、理事会の決議を経て、評議員会の承認を得て決定される。

注..

「函館ラ・サール学園同窓会」は各「支部」の呼称に対して「本部」という俗称（概念）を用いることがあり得る。「函館ラ・サール学園同窓会」（「本部」）は各支部を束ねる連合体としても位置付けられる。

評議員の選任と旅費支給に関する細則

第1条 この細則は評議員の選任と評議員会出席に要する旅費の支給に関し、必要な事項を定める。

第2条 評議員の役割を重視し、評議員の選任に当たって各支部の発足の経緯、歴史、会員構成などを考慮し、評議員の選任と旅費の支給が公平、公正に行われるように細則を定めるものとする。

第3条 評議員は以下の各項に記載される基準で各支部に割り当てられるものとする。

2 すでに支部として登録されている支部から、支部長1名（ただし支部長が理事ないし監事に就任する場合は副支部長あるいは当該支部が指名する1名）すでに支部として登録されている支部から、支部長（副支部長あるいは当該支部が指名するもの）以外のもの1名

4 各支部が掌握する会員数500名に付き1名、ただし、500で割り切れない場合、小数点以下は切り捨てる（800名の会員の場合は1名）

5 第3項で割り当てられた評議員1名は、第4項で計算された各支部の会員数に応じた評議員数の内数とする。ただし会員数500名に付いての割当数が1名に満たない場合は支部長以外のもの1名を保証する

6 第2項、第3項、第4項および第5項の定めによって割り当てられる他に、函館支部に特別評議員として3名

第4条 評議員会出席の旅費は各支部に1名割り当て（支部長）分については本部から支給する。それ以外の評議員については当該評議員が所属する支部の負担とする。

支部	会員数	支部長 (副支部長あるいは当該支部が指名するもの)	会員数による配分		特別 評議員	計
			各支部 割り当て	上記以外		
函館	1,891	1	1	2	3	7
札幌	828	1	1	0	0	2
東北	588	1	1	0	0	2
東京	1,701	1	1	2	0	4
西日本	294	1	1	0	0	2
総計	5,302	5	5	4	3	17

(予備評議員とその登録)

第5条 本会に本細則第3条により正規に選任された評議員（正規評議員）以外に予備評議員を制定する。

第6条 各支部は2名を上限（函館支部は3名を上限）に予備評議員を登録することができ。予備評議員となる会員の氏名および卒期を、会の当該年度の開始から1ヶ月以内に、正規評議員の氏名、卒期とともに事務局まで登録しなければならない。

第7条 予備代議員の任期は、本会会則第17条の正規評議員の任期の規程に定められた通りとする。

第8条 評議員会の開催を会長から告知された場合、各支部は正規評議員および予備評議員の出席の有無を評議員会開催日前日までに事務局までに文書または電磁的記録をもって通知しなければならない。

第9条 予備評議員の評議員会への出席旅費に関しては正規評議員の出席旅費に関する第4条の規程を当てはめる。

第10条 本細則の改廃は、理事会の決議を経て、評議員会の承認を得て決定される。

注..

函館支部に特別評議員を配分する理由および予備評議員を制定する理由..
①函館支部は同窓会本部の地元として歴史的にも大きな負担をしてきた。また今後同窓会活動を支えるためには様々な局面で函館の会員の世話にならざるを得ない。そのため、函館の会員には特別に本会の運営にも関わってもらう必要があると考える。

②特別評議員を配分された函館支部はじめ、どの支部の評議員数でも過半数には届

かない配分数とした。

③本会会則では評議員会では委任状出席が認められないので、その補完的措置として予備評議員を制定する。予備評議員とは正規に選任された評議員がやむを得ない事情によって評議員会に出席できない場合に、あらかじめ各支部が登録しておいた予備評議員を、各支部が出席できない正規評議員の代理として出席させることを可能とする制度であり、本会では予備評議員の評議員会への正式な代理出席として認める。

会長が出席すべき式典に関する内規

第1条 本同窓会は、会則の定め（第32条 第2項）にもあるように、会長の職務

として母校の学校行事および式典における在校生への挨拶を特に重視する立場から、会長が出席すべき学校行事および式典について内規として明示して定める。

第2条 会長が従来、出席し挨拶を行ってきた学園の行事および式典に関し、その良き「慣習」が将来にわたり守られるよう定めるものとする。

第3条 「函館ラ・サール学園同窓会規約」制定時（2011年11月5日）に同窓会長が出席すべき学園の式典として確認されたものは次に掲げる各号である。

- (1) 4月 入学式
 - (2) 5月 聖ラ・サールの日
 - (3) 5月 同窓会奨学金選考会
 - (4) 5月 同窓会奨学金授与式
 - (5) 11月 死者の日
 - (6) 12月 クリスマス会
 - (7) 1月 同窓会入会式
 - (8) 2月 高校卒業式
 - (9) 上記の他、学園が会長の出席を要請する学校行事および式典
- 本内規の改廃は、理事会の発議を経て、評議員会の承認を得て決定される。

会長選出に関する申し合わせ事項

2011年7月9日支部長会（正式な理事会）で議論、合意されたことをもとに、本会の会長となるべき人材と資質、その選出に関する申し合わせを作成する。

会長としての人材を広く求めるという点では全国から会長を選ぶということが一般論としては理解できるが、次のような種々の理由で、支部長会としては「会長を函館地区在住者から選ぶのが望ましい」とことと考える（資料として比較表あり）。

1. 会長は周りにしつかりした補佐（理事会・事務局体制）をおけば情熱があつてフットワークが軽ければ良い
 2. 何よりもホームグラウンドだという意識を鮮明にできる：「But our heart is here (here)」
 3. 学園との関係では理事長、校長、副校長をはじめとして学校職員、生徒ともいつでも顔をつきあわせた交流や意見交換が可能となる
 4. 学園の式典や行事への出席要請についてもほぼすべての学校行事に要請があらばすぐ駆けつけて同窓会長として挨拶することができる
- 会長が出席すべき学校行事としては
- ① 1月同窓会の入会式
 - ② 2月卒業式
 - ③ 4月入学式
 - ④ 5月聖ラ・サールの日
 - ⑤ 5月奨学金の選考委員会
 - ⑥ 6月奨学金の授与式
 - ⑦ 11月死者のつどい
 - ⑧ 12月クリスマス会
- などがある
5. 緊急時にも会長が函館に在住していれば学校関係者、理事の多数と顔をつきあわせた対応が可能である
 6. 本部事務局は学校に場所を借りるので、同窓会本部運営にとつては会長が函館に在住することは理想的である…何事にも迅速な対応がしやすい
- なお、会長人事を支部組織間の権力争いの具にしないことも確認された。

事務局からのお願い

毎年、同窓会会報が多数「転居先不明」で返送されてきます。同窓会では、函館ラ・サール学園卒業生13,415名中7,341名の方の住所情報を把握・登録いたしております。

しかし、その他の方には現住所が不明のため、同窓会からの各種ご案内をお送りできない状態です。

同期の方、また、日頃おつきあいのある同窓生の方で、本同窓会誌が届いていない方や、消息をご存じの方がおられましたら、お手数ですが、同窓会事務局までお知らせ下さい。

本同窓会誌をお送りし、同窓会名簿に登録させていただきます。

この会誌がお手元に届いた場合でも、「転居先」に転送された場合は、次年度以降には「転居先不明」になる場合がありますので、お手数ですが、下記の「住所変更通知」を函館ラ・サール学園事務局にFAXしていただくか、ホームページからご連絡いただくようお願いいたします。

連絡先

函館ラ・サール学園同窓会

事務局 長 伊藤 恒敏 E-mail : ts_ito@abox7.so-net.ne.jp

広報担当 理事 島 本 肇 E-mail : h_simamt@hotmail.co.jp

ホームページ <http://www.h-lasalle.com/>

住所変更通知FAX 0138-54-0365

★は必須事項

ふりがな			(旧姓) ※変わっている場合
★氏 名	(姓)	(名)	
卒業年次	西暦	年3月	回生
★現住所	□□□□-□□□□ (都・道・府・県) (市・区・町・村)		
電 話	TEL() -		
勤務先(学校)	名称 TEL() -		
メールアドレス	@		

※本データは函館ラ・サール同窓会事務局が責任をもって保管し、同窓会名簿の制作及び同窓会・同期会の連絡以外の用途には一切使用しません。

1 期

藤 田 勝 司

有限会社 館山保険事務所

代表取締役

〒040-0073 北海道函館市宮前町24番6号
TEL.0138-45-9598

1 期

菅 野 剛 造

株式会社 日刊政経情報社

代表取締役

〒040-0036 北海道函館市東雲町19番5号
TEL.0138-23-4551 FAX.0138-23-4555
ホームページ <http://www.nikkan-seikei.com/>

2 期

若 山 直

株式会社 五 島 軒

取締役社長

42期 若山 憲・48期 若山 盛

〒040-0053 北海道函館市末広町4番5号
TEL.0138-23-1106 FAX.0138-22-8073
E-mail: nao-wakayama@gotoken.hakodate.jp

1 期

吉 田 淳 志

吉田淳志税理士事務所

税理士

〒040-0034 北海道函館市大森町10番15号
TEL.0138-26-8108 FAX.0138-26-3263
E-mail: amo@clever.co.jp

2 期

土 橋 弘 樹

精肉焼 久阿利本店

代表取締役

〒040-0043 北海道函館市宝来町10番11号
TEL.0138-23-0421・23-0422
FAX.0138-23-4222

3 期

川 端 裕 彦

川端測量設計株式会社

会 長

測量士・土地家屋調査士
〒041-0806 北海道函館市美原3丁目34番12号
TEL.0138-46-5525(代) FAX.0138-46-8626
E-mail: kwbt-s@gray.plala.or.jp

3 期

伊 藤 丈 雄

良質かつ適切な医療を
最良の環境で提供できる病院を目指して

医療法人 雄心会 函館新都市病院

理 事 長

〒041-0802 北海道函館市石川町331-1
TEL.0138-46-1321 FAX.0138-47-3420
E-mail: hakodate@yushinkai.jp

3 期

佐 藤 憲 一

3 期

小 林 弘

鉄骨工事の専門店

港 工 業 株 式 会 社

代表取締役

〒040-0078 北海道函館市北浜町8-4
TEL.0138-41-4918

3 期
5 期

代表取締役社長 中 川 雄 三
常 務 取 締 役 中 川 清 吉

中 川 商 事 株 式 会 社

〒040-0824 北海道函館市西桔梗町589-51
TEL.0138-49-3156

3 期

柴 田 繁 男

元気になる🇯🇵日本 LAWSON

柴 田 商 事

代表取締役

ローソンマネジメントオーナー
〒040-0043 北海道函館市宝来町23番1号
TEL.0138-22-2247

3 期

北 条 邦 彦

北 条 歯 科 医 院

院 長

〒041-0852 北海道函館市鍛冶2丁目24-4
TEL.0138-55-5665

3 期

平 城 淳 一

米とタマゴの玉屋

有 限 会 社 玉 屋

代表取締役

〒041-0812 北海道函館市昭和3丁目28番20号
TEL.0138-41-8728(代)
FAX.0138-45-1040

4 期

植 木 清三郎

全国4期会 10月27日函館に集合

函館ラ・サール学園同窓会

東京支部長

〒134-0087 東京都江戸川区清新町1-2-1-1303
URL: <http://www.geocities.jp/hlstokyo/>
E-mail: hlstokyo@yahoo.co.jp

3 期

渡 辺 重 信

株 式 会 社 ヤ マ ツ

代表取締役

35期 渡 辺 正 信

〒041-8567 北海道函館市西桔梗町537-4
TEL.0138-49-0101

4 期

渡 辺 良 三

Jewelry & Watch

ワ タ ナ ベ

代表取締役

〒040-0063 北海道函館市若松町17番9号
(棒二隣り)
TEL.0138-23-4111 FAX.0138-26-2818

4 期

及 川 潔

導 心 館 岩 見 剣 道 場

館 長

〒041-0806 北海道函館市美原3丁目31-1
TEL.0138-46-5077

5 期

辻 秀 明

夢は必ず叶う、家づくりをお手伝いする会社

らいむ
来夢ハウス 辻木材(株)

代表取締役

〒049-0111 北海道北斗市七重浜8-9-12
TEL.0120-37-1370 FAX.0138-49-6031
E-mail:tsujimok@sea.ncv.ne.jp

5 期

齊 藤 裕 志

函館ラ・サール学園同窓会会長

医療法人社団 さいとう歯科診療室 理事長
〒040-0021 北海道函館市の場町24-6
TEL.0120-51-8241 FAX.0138-56-1552
URL: <http://www.saitodentalroom.com/>
E-mail:kankai@ms6.ncv.ne.jp

6 期

松 田 俊 司

株式会社 千秋庵総本家

取締役社長

〒040-0043 北海道函館市宝来町9番9号
TEL.0138-23-5131(代)

5 期

納 谷 英 雄

みなさんのおかげでこの歳まで何とかやってこれました。
これからもよろしく。

株式会社 丸善 納 谷 商 店

代表取締役

〒040-0032 北海道函館市新川町28-1
TEL.0138-22-2926
FAX.0138-26-7891

8 期

和 泉 光 雄

函館ラ・サール学園の弥栄を祈念します。

北 海 道 乳 業 株 式 有 限 公 司

取締役 工場長

〒040-0014 北海道函館市中島町34-14(自宅)
TEL(FAX).0138-32-6797
E-mail:m-izumi@hokunyu.jp

7 期

中 島 俊 雄

中島胃腸科内科クリニック

院 長

〒042-0932 北海道函館市湯川町3丁目9番25号
TEL.0138-59-1258

8期

小原 光一

ブラジル生まれの北海道育ち
ガラナのルーツ函館にあり！

株式会社 小 原

代表取締役社長

〒041-0822 北海道函館市亀田港町39番40号
TEL.0138-45-8990 FAX.0138-45-8996
E-mail:k-obara@lagoon.ocn.ne.jp

8期

遠藤 俊二

株式会社 KEN会計センター

代表取締役

〒040-0036 北海道函館市東雲町15-4
TEL.0138-22-0500 FAX.0138-22-0550
E-mail:es600@gray.plala.or.jp

8期

工藤 建夫

同窓会の益々の発展をお祈りします。

工藤建夫司法書士事務所

司 法 書 士

〒236-0021 神奈川県横浜市金沢区泥亀1丁目15番6号
TEL.045-785-7396 FAX.045-785-3627
E-mail:tateo@m3.dion.ne.jp

8期

菊地 裕太郎

菊地 綜 合 法 律 事 務 所

弁 護 士

〒103-0022 東京都中央区日本橋室町2-2-1
室町東三井ビルディング18階(コレド室町)
TEL.03-5204-6703 FAX.03-5204-6702
E-mail:Yij02011@nifty.ne.jp

8期

遠山 雅士

と お や ま 酒 店

店 主

35期 遠山宗希・36期 遠山尚秀

〒040-0015 北海道函館市梁川町21番15号
TEL.0138-31-1311

8期

島 本 肇

株式会社 島 本 印 刷

代表取締役

〒040-0053 北海道函館市末広町13番27号
TEL.0138-26-1201
E-mail:simamoto@palette.plala.or.jp

8期

松田 雄司

日本マスタートラスト信託銀行株式会社

取締役社長

〒105-8579 東京都港区浜松町2丁目11番3号
MTBJビル
TEL.03-5403-5005 FAX.03-5403-5098

8期

新田 正弘

還暦を迎えた8期生です。母校を応援しています。

新田 正 弘 法 律 事 務 所

弁護士 新田 正弘
弁護士 直山 敬弘

〒060-0061 北海道札幌市中央区南1条西11丁目
コンチネンタルビル5階
TEL.011-261-3177 FAX.011-261-3178

10期

月館正男

月館測量設計株式会社

代表取締役

〒040-0073 北海道函館市宮前町20番6号
TEL.0138-41-4431 FAX.0138-41-4440
E-mail: hhb@tsukidate.com

8期

三木正俊

人生、還暦から本当の修行が始まる。

三木・佐々木・山田法律事務所

代表弁護士

〒060-0061 北海道札幌市中央区南1条西14丁目
ワフスわたなべビル7階
TEL.011-261-6980 FAX.011-261-6811
URL: <http://www.mikilo.jp>

12期

佐藤友康

有限会社 かすみ園

代表取締役

函館ラ・サール学園同窓会函館支部長
〒042-0942 北海道函館市柏木町10番6号
TEL.0138-51-2303 FAX.0138-51-2396
E-mail: kasumien@k2.dion.ne.jp

10期

藤村 朗

入学希望をお持ちの方、迷っている方は
ご連絡ください。

岩手医科大学 歯学部

解剖学講座 機能形態学分野 教授

〒028-3694 岩手県紫波郡矢巾町西徳田2-1-1
TEL.019-651-5111 (内線5842)
FAX.019-908-8010
E-mail: akifuji@iwate-med.ac.jp

19期

大山 慎 介

日本における「新たな北海道」の役割を果たしたい…。

NPO法人 住んでみたい北海道

総括プロデューサー

北海道総合政策部 科学技術振興課 勤務
〒002-8072 北海道札幌市北区あいの里2条7丁目1-4
E-mail: s-ohyama@poem.ocn.ne.jp

15期

成 澤 茂

成沢機器株式会社

代表取締役社長

〒040-0073 北海道函館市宮前町16番1号
TEL.0138-40-4100 FAX.0138-40-4101
E-mail: boss@nari30.co.jp

21期

岸 部 悟 司

2012年秋、卒業30周年同窓会を開催します

Hakodate Dining 備後屋
Sleek hakodate cuisine

湧元会社ガッツ 代表取締役

〒040-0011 北海道函館市本町22番11号
TEL.0138-31-1692
E-mail: s.kishibe@gutz.co.jp

20期

川 口 孝 徳

卒業して30年を迎えますが、同期のみなさんお元気ですか？

株式会社 今井工務店

専務取締役

〒041-0824 北海道函館市西桔梗町849番地の22
TEL.0138-48-5544 FAX.0138-48-7080
E-mail: t-kawaguti@imai-koumuten.co.jp

26期

齊藤 晋

医療依存度の高い患者様を積極的にお受けしています

医療法人社団 アルデバラン
手稲いなづみ病院
理事長・病院長

〒006-0813 北海道札幌市手稲区前田3条4丁目2-6
TEL.011-685-2200 FAX.011-685-2244
E-mail:s.saito@inazumi.or.jp

21期

和根崎 直樹

和根崎法律事務所
弁護士

〒040-0011 北海道函館市本町3番12号
カーニープレイス函館6階
TEL.0138-55-6668 FAX.0138-55-6635

31期

南木 孝夫

株式会社 南木測量設計事務所
取締役

〒041-0851 北海道函館市本通2丁目17番15号
TEL.0138-54-5550

27期

菅原 雅仁

地元で"わいんづくり"に取り組んでいます

株式会社 **ほびわいん**
専務取締役

〒041-1104 北海道亀田郡七飯町字上藤城11番地
TEL.0138-65-8115 FAX.0138-65-8249
mail: wine3@hakodatewine.co.jp
web: http://www.hakodatewine.co.jp

34期

今井 宏明

株式会社 **今井メディカル給食**
常務取締役

〒041-0812 北海道函館市昭和3丁目5-10-103
TEL.0138-44-5751 FAX.0138-44-5752
E-mail:imk@nyc.odn.ne.jp

34期

浅野 良太

株式会社 兼夕丸 浅野鉄工所
代表取締役

〒049-0111 北海道北斗市七重浜1丁目4番8号
TEL.0138-49-2731 FAX.0138-49-2748
E-mail:at-ryouta@asano.hakodate.jp

広告を掲載していただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

編集後記

同窓会誌の編集を終えました。同窓会の草創期に中心となって会の立ち上げに貢献された先輩諸兄はじめ、初々しい50期の後輩達に至る多くの皆さんから御寄稿をいただきました。

些かでも同窓会の歴史を俯瞰していただけたでしょうか。

本年はラ・サール会修道士の来日80周年にあたります。学園の歴史は50年ですが、その前史として30年にわたる修道士による労苦のあったことが改めて偲べれます。今後は同窓会の使命として、埋もれた歴史に光をあて、後世に伝える努力を続けてまいります。ご協力いただきました皆様に感謝を申し上げます。

冊子第1号となる本同窓会誌では、同窓会の組織改編や会則の改定などに多くのページを割きましたが、次号からは、より多くの皆様からの御寄稿をいただき、充実した誌面作りを目指してまいります。

函館で過ごした青春時代の思い出、社会人・企業人として、今、思うこと、また、同期会やイベントの報告などをお寄せ下さい。海外で活躍の方、専門分野での研究の一端などもご紹介できれば幸いです。

尚、編集の都合で掲載が次の号になる場合もございますので、ご了承下さい。

広報担当理事 植木清三郎
広報担当理事 島本 肇

ご寄稿は随時受付ております。

宛 先 : h_simamt@hotmail.co.jp

TEL・0138-26-1201
広報担当理事 島本 肇

函館ラ・サール学園同窓会誌

日吉の丘

第十二号

2012年5月31日発行

発行者

函館ラ・サール学園同窓会

会長 齊藤裕志

函館市日吉町1丁目12番1号

TEL・0138-521-0365

印刷

株式会社島本印刷

函館市末広町13番27号

TEL・0138-26-1201

